心理經濟の研究

精神分析

★第7卷・第3號★昭和14年・3月★

セガンチーニ作『悪母』(岩倉具榮氏譯文五〇頁參照)

東京精神分析學研究所出版部

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十四年二月廿五日印刷納本・昭和十四年三月一日發行・毎月一回一日發行

チマン・ベルグラー兩博士共著

大槻憲二・高水力太郎譯

冷感症とその治療

定價一圓八十錢
送料十錢
菊版紙装・原著者肖像付
壯重なる學術書

豫約申込者には前金にて　金一圓五十錢（送料十錢）に割引

婦人の冷感症は文明の進歩と共に加速度的に増加しつゝあると云はれてゐる。現代婦人の大部分が既に冷感症化しつゝあるとは世の多くの婦人科醫たちの戰慄すべき報告である。これをこのまゝに放置することは彼女等の不幸であるばかりでなく、世の夫たちの苦惱であると共に、社會秩序の紊亂を來す一大遠因となる。而もその病因は肉體にあらず精神にある。精神分析の研究に依つて始めてこの病症の本質と治療法とは闡明せられた。本稿の部分が雜誌『精神分析』誌上に連載せられて讀者からの一大反響を呼び、この度の單行本化を熱望せられたことは決して偶然ではない。本書は店頭には出せないかも知れない。

―目次―

第一章―總論　女性の對男性心理
第二章―一、女性性感の發達
　　　　二、女子性生活の特質
第三章―一、冷感症の概念、症候論、並びに程度
　　　　二、冷感症に特殊なる諸形式
第四章―冷感症の分析治療二例
第五章―冷感症の豫防及び處置
附　錄―處女性の問題
Zum Problem der Virginität（右のドイツ語原文）

東京精神分析學研究所
東京・本郷・動坂町・三二七
振替東京　七八八一七番

日本の風俗

‖創刊號‖

特輯 **牢獄生活**

江戸傳馬町牢獄生活……………田村榮太郎
韮山入牢人名前町……………戸羽山瀚
破牢物語……………松本隆二
滯納督促としての水牢……………松島宇平
歴史小説運動の意義……………村雨退二郎
相州露木騒動聞書……………生島哀子

特輯 **交通制度**

江戸時代の交通制度……………田村榮太郎
宿場根性……………鈴木鬪道
お七里……………喜多村進

‖一卷第二號‖

特輯 **工業と職人**(一)……………田村榮太郎

一、概觀　七、陣笠
二、水車　八、鐵砲・地雷
三、金屬　九、紙
四、石炭　一〇、墨・黒肉
五、石灰　一一、蠟・蠟燭・燈心
六、獸皮・魚皮　一二、傘

和宮鄕下向と西美濃の助鄕……………平塚正雄
奥州諸藩の交通量と人馬出役數……………庄司吉之助

‖一卷第三號‖

消費節約史上の人々―(特輯)―……………田村榮太郎
伊達騒動の伊達兵部・莊内藩の酒井忠德と富豪本間四郎三郎・松代藩の恩田木工・鷹野藩の土方義苗・濱田藩の松平武聰・備中松山藩の山田方谷
韮山代官所職制と消費節約……………戸羽山瀚
江戸風俗圖解(1)
旅芝居覺書……………藤井一男
高崎藩八公二民の研究……………松島宇平
工業と職人(二)……………田村榮太郎
活字・印刷・製本……寫眞

‖二卷第一號‖

明治人物圖解……………田村榮太郎
山内豊信と松平慶永。高杉晋作と山田顯義。桐野利秋と川路利良。坂本龍馬と陸奥宗光。玉乃世履と河野敏謙。
江戸風俗圖解(2)……………田村榮太郎
下げ札、制札と高札
明治商業資料圖解……………田村榮太郎
回漕店廣告。旅館廣告。製茶賣込問屋圖。煙草廣告。
幕末に於ける無盡の諸形態……………庄司吉之助
韮山縣御勝手方日記……………戸羽山瀚
清酒の起源に關する一考察……………渡邊慶一
大衆文藝の史的解剖(1)……………田村榮太郎
左甚五郎の再檢討……………荒井とみ三

心理經濟の研究・內容目次

表紙　セガンチーニ原作油繪『惡母』（寫眞）……

口繪　昭和十三年度フロイド賞贈與式紀念……

卷頭　フロイド賞に就いて……（五）

研究　心理經濟論……大槻憲二…（六）

一、物資經濟と心理經濟との關係――二、心理經濟の眞意義――三、個人生活に於ける心理經濟――四、社會生活に於ける心理經濟――五、文明の進歩と心理經濟の進歩――

芭蕉とその門下との心理的關係（下）……宮田戊子…（二八）

芭蕉と集團との關係――談林止揚の狀態から觀たる芭蕉の性格――指導理論より觀たる芭蕉の性格――芭蕉の連句と發句の二重性――芭蕉に於ける中世的なものと近世的なもの

チォヴァンニ・セガンチーニ（アブラハム）……岩倉具榮譯…（四八）

教育者のための精神分析概論（アナ・フロイド）……宮田齊譯…（五五）

資料　經濟界の精神病理……高水力太郎…（五九）

苦惱の解消法……奧本島田…（六一）

『精神分析』第七卷・第三號

時評 春花秋葉錄……篠原政雄…（六三）

刀劍鑑定の作法に於ける無意識心理……土屋秋實…（六六）

現代日本の心理經濟法……大槻憲二…（六九）
一、文化と戰爭の問題——二、採點制度の功罪——

アプフウブ 無愛想の心理經濟……不老泉院主…（六九）
貧者の一燈——磨瓜雅——柘榴果阿吽——墨硯蒐集の心理——持物と持主——

講座 精神分析學入門講話（七）（フロイド）……K・O・生譯…（八二）

新舊心理學の相違について……藤田由美…（八五）

精神分析學語彙（三六）……（九〇）

內外彙報 イェーケルス博士の書翰——『精神分析季刊誌』昨年度第四冊——『メニンガー診療所報』最近號二冊——國內關係時事——本研究所研究會例會——講習會例會——

伊東豐夫氏の逝去——文獻維持委員制に就いて再言……（九六）

通信 谷內正夫、久下貞夫……（九七）

附錄 冷感症とその治療（ヒッチマン及ベルグラー）……高水力太郎譯…（九九）

編輯後記……（一一〇）

月刊誌
正誌・冊子・隔月刊
正誌五十錢（送共）

直接購讀者に限り
半年六冊一圓五十錢、一年十二冊三圓（送料共）

昭和十四年一月　金錢心理研究　第七卷第一號

精神分析學から見た金錢心理……大槻憲二
女性心理に於ける金錢……延島英一
人間關係に於ける金錢とリビドー……不老泉院主
貧乏の心理に就いて……大槻憲二
金錢に關する分析的感想集……北山隆・他數氏
【時評】▲科學と神話の問題▲學界の弊風……大槻憲二
賭博の心理（サイコロ心理學）……高橋鐵
芭蕉とその門下との心理的關係……宮田戊子
教育者のための精神分析入門（アナ・フロイド）……宮田齊
ヂオヴァンニ・セガンチーニ（カール・アブラハム）……岩倉具榮
精神分析學入門講話（ジグムント・フロイド）……K・O・生譯
冷感症とその治療（ヒッチマン及ベルグラー）……高水力太郎譯

雜話
▼人間關係混同の喜劇
▼林きむ子さんの慈善强奪
▼坊さんと藝者の共通性
▼藝術家の職業性
▼フクチヤンの勞働問題
（以上）不老泉院主

挿圖
▼精神分析學語彙（三十五回）
▼（挿圖）セガンチーニ『兩母』とフクちやん。

雜報
▼外國雜誌内容紹介▼我國分析學界近事報▼研究會講習會報▼讀者通信

冊子精神分析（第六卷第十一號）送料共十錢
精神分析學のすゝめ……（編輯主任）
神話と漫畫・潮來天地青・娘子關分析……
内外彙報・讀者通信・編輯後記……不老泉院主

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

Zum Andenken an der Freu d-Preis-Feier (*1938*)

後列——

藤田由美　倉橋久雄　長田耕一　小杉長平　高橋鐵　塚崎茂明　小山良修　長崎文治　長崎靜枝　北垣照雄　田中虎男

前列——

黒澤敬次　霜田靜志　大槻憲二　北山隆　岩倉具榮　岩倉良子　大槻岐美

『精神分析』第七卷 第三號 卷頭言

★フロイド賞に就いて

フロイド賞は、本研究所から、その機關誌『精神分析』誌上に發表せられた優秀な論文に對して毎年末に贈與せられるもので、斯學に深甚の理解を有せられる岩倉具榮公の發案に出づる。論文銓衡には同公と長谷川誠也氏と大槻憲二氏とが關係し、昭和十三年度分で丁度三回目に相當してゐる。

第一回即ち昭和十一年度の受賞者は長崎文治氏、論文は『母性の長子憎惡心理の研究』であつた。第二回（十二年度分）は高橋鐵氏の『象徴構成の無意識心理機制』であつた。第三回（十三年度分）は北山隆氏の『夏目漱石の精神分析』、この論文は一書に纏められて、先頃公刊せられた。長崎氏は物理療法の畑の人で、目下壓戟療法なるものを創案實施して分析學をも應用してゐられるやうである。高橋鐵氏は實驗心理學畑の人であるが、文才豊富で、目下盛んに分析學應用の小說を『オール讀物』などに發表しつゝある。北山隆氏は家庭が先代から教育家であるから、現在兒童教育の實地にこの學問を利用してゐる。

フロイド賞の特色の一つは毎年美しい賞牌を添へることで、第一回は大内靑圃氏作フロイド像。第二回は同氏作エディポスとスフィンクス。第三回は高村光太郎氏作。本號表紙上にその寫眞を紹介する筈であつたが遺憾ながらまだ完成してゐない。

心理經濟論

大槻憲二

一、物資經濟と心理經濟との關係

「經濟」と云ふ語は東洋に元來あつた語か、或は西洋語の「エコノミイ」の譯語であるか、私は只今それを詳かにしないが、金澤博士著『辭林』に依ると「國ををさめ民をすくふこと、政事を行ふ」ことと註せられてある。西洋語の「エコノミイ」はラテン語又はギリシア語から由來したものゝ如く、ギリシア語で「オイコス」とは「家」を意味し「ノモス」とは「法則」を意味すると云ふ。即ち約言すれば、我々の家庭生活又は國民生活に何らかの規律を與へることに依つて幸福を齎らさうとする努力であることは明かである。併し、右の定義に依つて見ても分る通り、この語の概念內容は本來極めて廣汎なものであつたことは確だ。今日ではこの語は、物質現象又は最狹義に於いては貨幣現象をのみ對象とするものゝ如くに考へられてゐるが、本來の意味に於いては一方政治をも含め、他方心理をも包括してゐたものと認められる。近代科學の分化主義は必然的にその對象を限定し局限して、遂に經濟學の範圍內には心理現象は包含せられないものとなつて來たが、併し本來心理經濟を除いて物質經濟は存在せぬと云ふのが我等の主張である。現に、今日なほ經濟學はその基礎概念の內容に於いて極めて心理學的なものを多分に包藏してゐることは、私が本誌前號に『精神分析學から見た金錢心理』の題下に論證した通りであるが、なほこゝに假りに經濟學上からの欲望の觀念を吟味して見るならば、その心理性のなほ如何に濃厚なものであるかが、判然と理解せられるのである。

河津暹博士はその『經濟學原論』の中で「欲望の解剖」を試み、經濟學上欲望の觀念の中には、(一)不快又は不安の念、(二)その不快又は不安の狀態より脫却せんとする希望、(三)其の希望の滿足に依りて生じたる過去の快感の追憶、(四)この過去の快感を再現せんとする希望、(五)不快の念の除却と快感再現に必要なる犧牲の想像、(六)其の犧牲と希望との關係の認識、などの存在を主張してゐる。即ち河津博士に依れば、經濟學上欲望の觀念の根柢をなすものは「不快又は不安の念」であると云ふことになつた。これは極めて心理學的見解であつて、物質の獲得や處理を目的とする經濟行爲の根柢を定義するものとしては、甚だしく常識的見解に遠いやうに思はれる。寧ろ世人は、經濟學上欲望の觀念は快樂追及、安全確保と云ふ積極的、能働的な動機に存するもの丶如く考へ勝ちであらう。然るに河津博士はその反對に、不快逃避や不安的强迫のために已むなく行動するのが、經濟的欲望であると論ずるのである。これは常識的には一見河津博士の誤謬である如くに思はれさうであるが、併し精神分析學徒として私は河津博士の說に贊成するものである。何となれば、もし我々が不快を逃避するのでなく純粹に快樂を追及するのであつたならば、經濟的欲望など丶云ふ苦痛や犧牲を伴ふやうな行動をなさず、寧ろ直ちに快樂的行爲の中に沒頭して了ふであらうからだ。また不安を克服するにも苦痛や犧牲を拂はねばならないが、短兵急に安泰を求めるならば寧ろ直ちに不安(その窮極の形は死)の胸裡に沒入して了ふにまさる手取早い道はないからである。その代りさう云ふ方法に於いては經濟行爲の存在する餘地はないのである。即ち、精神分析學的に換言するならば、生の本能に卽して經濟的欲望は生ずるのであつて、死の本能に卽してそれは生じ得ないのである。

また河津博士の定義する如く「不快又は不安の狀態より脫却せんとする」ことが經濟的欲望であるならば、神經症者が自己の精神的健康を保全せんとする要求も亦正に「不快又は不安の狀態より脫却せんとする」ことに外ならないからして、これまた別種の經濟的欲望でなければならない。たゞその欲望の對象が違つてゐるだけである。即ち前者は物質をその對象とし、後者は心理をその對象とする。但し、物質經濟の能力は心理經濟の能力あるものにして甫めて可能なのであるから、經濟學の根柢は心理學、殊に精神分析學に存しなければならない。何となれば心理作用に量

的概念卽ち經濟的考察法を想定し、快不快の原則を確立したるものは、無意識心理現象を發見したる、わが精神分析學のみであるからである。

二、心理經濟の眞意義

經濟とは既に述べた通り、我々の生活に對して何らかの統制を與へることである。統制を與へる主體は意識であり自我である。然るに、意識が意識に、自我が自我に、統制を與へるとすれば、それは消極的になるより外に道はない。經濟活動と云ふ觀念の內には、事實そのやうな消極的なものが多分に含まれてゐて、現に辭典を檢して見ると「經濟」の條下には「節約」と云ふ意味が必ず含められてゐる。併しながら經濟の眞義は單なる節約に終始すべきものではない。節約は寧ろもつと積極的に、投資のための節約でなければならない。投資に依つて大なる回收を豫想しない節約は萎微であり、枯死である。それは經濟の眞意義には縁遠い。

然るに意識により意識に加へられ、自我に依つて自我に加へられる統制（經濟）は消極的節約に終るより外に能はない。現に、意識心理學的立場に卽しての能率法の如きは、例へばローマ字運動とか、假名文字運動とか云ふやうな單なるエネルギー節約的方策に留まつて、エネルギーの積極的な効果的な發動方策には何らの關係がない。そのやうな方策を立て得るためにはまづ心理裝置の力學的構成と心理エネルギーの量的消長の法則とに就いての研究が既に十分になし遂げられてゐなければならない。然るに心理裝置の力學的構成と心理エネルギーの量的消長の法則は悉く無意識界（エス）に屬することであつて、意識は心理生活の表皮を外面から眺めたものであるから、そこには構成や量の概念の入り得る餘地はないやうに思はれる。

私は右にローマ字運動や假名文字運動を否定するやうな口吻を洩したが、私はその主張者や運動者の眞劍な努力に對して敬意を拂はぬものではなく、その主張に意義を認めないものではないけれども、有體に云へばなほ多くの疑義を狹むものであることを告白することが出來る。漢字制限の必要は今や殆ど議論の餘地の存しないところであるが、

漢字節約にもローマ字法にも假名文字法にもなほ幾多の矛盾があり、疑問の餘地の存することは申すまでもない。例へば、「私」の一字で濟むものを「わたくし」と書いたり "Watakushi" と書いたりすることは却つてエネルギー浪費的である場合もあり、「行」の一字が「ユク」、「コウ」「ギョウ」、「アン「「ツラ」「ナメ」などゝ讀むことの煩瑣の嘆は至極尤であるとしても、考へ方を變へればこの一字を以てかく多數の場合に流用し得ることは七つ道具よりも便利（エネルギー節約的）であるとも云へないではない。*

註＊「行」の言語問題に就いては拙著『分析家の手帖』一六四頁を參照ありたし。私はそこに於いて行の七つの讀み方の生じた無意識心理の必然性を證明しておいた。

一つの漢字がかく多くの讀み方を生ずるに至つたことは無意識心理的必然性のあることであるから、これを無意識心理的に見る時は、現在の如き狀態が却つてエネルギー經濟的であるのだが、これを意識的に見るときは、そこに必然性がないから、單にエネルギー不經濟と考へられるのであらうと思ふ。外國語を學ぶ場合にも語源的に研究して見ると、數々の一見無關係と思はれる言葉の中にも必然的な無意識關係が發見せられて、記憶に幾分のエネルギー節約が出來るのである。

このやうに心理經濟の問題はまづ心理の無意識性を發見し承認することから始まらねばならないのである。さうして無意識心理經濟の問題はこれを個人に卽した面と社會に卽した面と二つに分けて考へなければならない。で、我々はまづ個人に卽した面から考究して行くことにする。

三、個人生活に於ける心理經濟

心理經濟は心理裝置の力學的構成と、心理エネルギーの量的消長の問題とに別けて考へるべきことをさきに論じた。で、今我々はこれ等二方面から主題を考究して行くことにしよう。

（A） 心理裝置の力學的構成

これは心理が自我、超自我エスの三つの個所から成立つてをるために、それ等三者の間がとかく分裂しがちになりそれぐ\その機能を完全に果しつゝ而も全體としての職分が圓滑に果されることが滅多に得られないと云ふことのために、この力學的構成の問題が重要になつて來るのである。併しながら心理の裝置が三つの個所に分立してゐることに就いては、我等は既に本誌上で屡々論及して來たことであるから、今更これを反復喋々する氣はないが、併しこれ等の三者の間に協力提携が不可能になるのは如何にしてゞあるかと云ふことに就いては、未だ必ずしも十分に說き盡くして來なかつたかも知れない。が、只今はさう云ふ問題に立入つて論及してゐる場合ではない。一通りのことを述べておくならば、自我が軟弱になつてエスを支配するの能力を缺き、超自我の攻勢に堪え得なくなるのは、幼時に兩親があまりに本人を甘やかし過ぎ、現實原則の前に彼を隔離し過ぎた結果(時には彼が本來病弱にしてさう云ふ養育を必要とする場合もあらうが)であることは、丁度肉體的にあまりに大事をとり過ぎて厚着をさせると兎角皮膚が弱くなつて感冒などに罹りやすくなるのと一般であらう。また彼の超自我が病的に高くなり過ぎて自我を攻擊することあまりに苛酷になるのは、彼が幼少時に自慰などを覺えて彼のナルチスムスの崩壞を不自然に凄慘ならしめた結果である場合が少くない。人間の心理裝置は丁度甲(超自我)を被つた騎士(自我)が巧みに馬(エス)を御して驅逐してゐるやうな狀態であらねばならないのだ。鞍上人なく鞍下馬なき狀態が健康なる心理である。神經症者の心理裝置は馬と人と甲とがそれぞれバラ〳〵になり、騎士は甲の紐のほどけを氣にしつゝ落馬してゐるやうな狀態であるのだ。このやうな狀態では、正常な乘馬者との競爭に於いて到底太刀打ちの出來ないのは申すまでもないことである。

(B) 心理的エネルギーの量的消長の法則

我々は絕對安靜にしてゐても、心理エネルギー(リビドー)は消費せられつゝあるのである。況んや活潑に勞働してゐる時にはそのリビドー消費量は相當の高額に達する。たゞその場合は勞働の結果が生產物として現はれ、その生產物は別種のものに轉換せられたるエネルギーに外ならず、且つ兩者を差引計算して見るとそこに剩餘價値が生ずる筈になつてゐるから、勞働は尊いと云ふことになるのである。併しあらゆる場合に勞働は剩餘價値を生ずるのではな

い。その場合、投資せられるリビドー量は最少限度に低額でなければならないし、生産せられるもの丶リビドー量は最大限度に高額でなければならない。たゞその最少限度は出し惜みであつてはならないし（冗費を省く程のものでなければならないし）最高限度は外見的、一時的なものではなく、實質的、持續的なものでなければならない。さう云ふ風に心理經濟の効果を擧げて行くためには、種々の法則が考慮せられなければならない。以下、たゞ思ひつくまゝに種々の關係問題を取扱ひ、その間に原則を探り當て得るならば、それを指摘すると云ふ方法を選んで、論究の筆を進めて行くことにしたい。

一、コムプレクスの問題——コレプレクスとは個人の過去の何らかの經驗が彼の無意識に病的に定着し、彼をして、彼の意識の反對努力に拘らず、現實原則に違反した行爲を强迫的にとらしめるところの原體である。このやうなものが獅子身中の蟲の如く我等の心理の中に巣喰つてゐるならば、我等の心理經濟は破綻を來たすべきことは申すまでもない。たゞ同じコムプレクスを共有してゐる人々の構成してゐる社會に於いては、そのコムプレクスに基く行爲や生産物が物的經濟價値を有するに至ることが時々あつて、そのためにそのコムプレクスに内的價値を有する如き錯覺を起さしめることがある。丁度、阿片吸引癖の流行してゐる國民の間に於いて阿片や阿片吸引器具が物的價値を有するのと同じである。同じことは精神的方面に於いて文藝や宗教に就いて云へる。文藝や宗教は、それ故に、屢々反文化的、反進歩的役割を果すものであつて、これ等が時々阿片に擬せられることも必ずしも根據のないことではない。

結局、コムプレクスは心理經濟に於ける浪費癖の如きものである。水壺の底に出來てゐる龜裂の如きものである。この龜裂を修理するのが分析法の役目であるが、世には多少は水の漏れる方が人間としての面白味があると云ふ人がある。それは一理ある言であるが、併し人間と云ふものはいくら水を漏らさないやうにしても、健康になつても、結局多少づゝは水の漏れてゐるものであつて、人間は動物に比して多少の病理性あるところに人間らしい本質があると云へないことはない。それ故に我等は安んじて分析に依る心理健康法を講じていゝのである。現實社會の勝利は結局心理上の健康者（心理經濟の合理的處置者）の頭上に輝くのであつて、才能の差別の如きは、人々の考へるほどに大

きなものでは決してないと云ふことを私は力説したいと思ふのである。

二、心理的遺傳の問題――コムプレクスは廣義に於いては集合的なものであると共に遺傳的でもある。集合的とは個人的の反對で、自分の有するコムプレクスは同時に他の社會人等の殆ど總てが共有するところでもある。またコムプレクスは自分一人でその個人生活中に作るものゝみならず、親や先祖の持つものが遺傳し、又は影響して居る部分もある。その祖先とは近く一二代の祖先ばかりでなく、遠く動物時代の祖先もあるであらう。それ故に、個人の生活は決して個人の責任のみにあるのではないと云へるのである。道德上の責任の或る部分はそのやうに祖先に歸することも出來るであらうが、責任は何人にあらうと生活の幸不幸は總てこれ個人の頭上に振掛つてゐるのであるから、我等はたゞ分析に依つてそれ等責任なき重任の重荷を我等の頭上から追拂ふやうにするより外はないのである。

これ等心理遺傳の問題は、正しくはコムプレクスの條下に含めて論ずべきであるが、理解に便宜のため、特に別に取出して論究して見たのである。

三、觀念支出の問題――我々は凡て何事をでも觀念するに、その事の大小に應じて相當量のリビドーを支出するのである。その支出せられたるリビドー量（觀念）はその事の現實的意義の大小に應じて適切であるのが健康なる心理であることを證する所以であるが、不健康者はその支出する量が常に不適切であるが故に、心理經濟はとかく破綻に瀕し勝ちである。對人恐怖の如きは相手の人物を觀念するために支出するリビドー量が多過ぎることの結果である。例へば、Aなる人物がBなる人物に對して恐怖を持つとすれば、Bは通例十五貫（假りにリビドーを貫で計量し得るとして）のリビドー量を以て觀念し得るのに、それに對して三十貫も五十貫も支出するとすれば、自分の方が貧困になつてリビドーの內外のバランスがとれなくなつて來るので恐怖が起きるのだと云ふ風に考へることも出來る。何故にそのやうな無駄な支出をするやうになるかと云ふと、それは恐怖者の幼兒的全能念慮の病的定着や知力（自我）發達の阻碍のためにその支出力の適應性が失はれてゐるためであると云ふことが出來るが、これ等の問題はなほ細かく論究すべき大問題であるから、只今倉卒の間に述べつくすことは出來ない。

たゞこゝに云ひ添へておきたいことは、教育と云ふ如き事柄は、人々の自我及び知力を發展せしめて種々の現實的事象を適確に觀念することの能力を具へしめることであつて、要するに漸次複雜化し行く現實の種々の事象に對して適切な心理經濟をなさしめむとの意圖に外ならないのである。これは併し狹義の教育のみならず、廣義の教育、即ち一切の學問はみなこの性質を具へたものであつて、昔から哲學は世界に對する恐怖から起つたと定義せられてゐる如きは、這般の消息を裏書きするもので、云はゞ哲學は對事恐怖症克服のための努力に外ならないのである。併しながら、學問及び教育の心理經濟的意義はそれに止まらない。そこにはなほ、

四、昇華の問題——が含まれてゐる。昇華とはリビドーをしてその本來の目的（が何等かの意味で禁斷せられてあるために）から離脱せしめて、より高度なる（と云ふのがもし語弊があるならば、より精神的なる）目的に轉向せしめる作用を云ふ。と云ふと、昇華とは意識的意圖に就いてのみ云はれるやうであるが、併しそれは本來無意識的意圖に屬するものであるのだが、人類は漸次にそれを意識的に行はうとするやうになつて來たのだ。併し昇華は本來無意識的の作用であるから、如何に意識的努力を加へてもその人自身の無意識の協讃と協力とがなければ、昇華は結局實現し得べきものではない。

文明の進歩と云ふことがもしあり得るならば、それは結局、昇華の進歩と云ふことを意味するかと思はれる場合も多い。併し昇華と云ふことは、右に論じた通り、無意識の協讃協力を俟たなければ實現し得ず、もしそれを俟たずして無理に行はうとするときは、無意識の反抗を買つて、却つて大きな弊害を招くことがあるのである。それ故に文明の進歩は同時に必ず文明の中毒を半面に伴ふてゐるものである。併し概して云へば、文明はリビドーの昇華に依つて心理經濟を合理化し、人類のエネルギーは合目的的に發展してゐると云ひ得るやうに私には考へられる。現に、我等日本人の心理活動能力を觀察して見ても、數十年前の日本人よりも現代日本人の方が概して若々しくなり、その活動能力はより長期に亘るに堪え得るやうになつて來たと思はれる。「人生は四十から」と云ふ呼聲は諸文明國間に於いて今や世界的であるらしいが、野蠻人の間に行つて見ると、今日でも活動年代はせいぜい三十までゞ、四十になればも

う老人扱ひにせられてゐることは、わが國の領土内でも、比較的未開の地域に於いて現に見られる現象である。併しこの昇華の問題は、云はゞ一種の

五、節慾の問題――でもある。節慾と昇華との關係は頗る密接であるが、必ずしも因果關係であるとも云へない。概して云へば、節慾するものは昇華の機會を多く有することになるし、また昇華するためには節慾は必然の前提とならなければならないが、併し節慾しさへすれば必ず昇華が得られると云ふわけには行かない。昇華は素質（天分）の問題でもあるからである。節慾しなくても昇華能力のあるものも存するが、併し昇華能力あるものが節慾すれば、その昇華能力は一層高度に發揮せられるとは、一般的に云ひ得ることであらう。

併し我等はこゝに「節慾」と云ふ語を用ゐて「禁慾」と云ふ語を用ゐないところに、多少の用意が存するのである。リビドーはその本來の性質として絶對にその根元的な目的を禁斷せられてはならないものである。もしこれを絶對に禁斷するときは、却つて昇華の機會をも併せ失ふやうになるのが一般的傾向であると云へよう。但しそこに多少の例外あるべきは勿論である。けれども如何なる程度まで目的の滿足を圖り、如何なる限度から節慾すべきかは、一般的規定を立てにくい問題であるが、性目的の滿足は快樂であるに對し節慾は快樂放棄を意味する故に、とかく目的は濫りに滿足せしめられ勝ちになることは自然である。併しこの自然は文明社會に於いては（文明社會は或る意味で不自然社會なるが故に）屢々現實生活上の敗北を意味する。敗北を意味しないまでも、支配的な位置に立つことを許さなくなる。

具體的に論ずるならば、例へば藝者や女給の生活の如きは現代社會に於いてリビドーを最も生のまゝに生かすことを目的とするものである。彼女等は一面に於いて愛慕せられると共に、反面に於いて輕蔑せられ、憎惡せられ、恐怖せられる。所謂良家の夫人令孃たちが藝者や女給たちに對する憎惡や反感の中には、自分等の配偶者や近親異性者のリビドーを横取りするものだと云ふ意味ばかりではなく（彼女等の意識はそれのみと思つてゐるらしいが）、實は彼女等もまた藝者や女給等の如くにリビドーを生のまゝに生かしたい根強い願望を有して、而もそれを抑壓してゐるから

であると見なければならない實例を我等はあまりに多く眼前に見る。これは夫人や令嬢に對する私の皮肉でもなければ冷評でもないのである。それは自然なことゝ思はれるのであるが、分析に依つて自己の防禦心理機制を自覺せられるならば、無用の感情浪費は節せられるであらうと思ふ。併し何れにもせよ、節慾の度の少いものはどうしても早く老い易いと云ふことは、一般的命題として當然下し得る科學的眞理である。藝者は教養ある普通人よりも概して老い易く、女は男よりも大體に於いて老い易いのは、節慾やリビドー昇華の心理經濟關係から容易に說明し得るところであらう。

なほ次に我々は前の昇華の問題に聯關して、

六、ナルチスムスの問題――を論じておきたい。リビドーが昇華の機會を失してゐるためにナルチスムスが幼兒期形態に停滯し、從つて觀念支出も莫大なものとなり、心理經濟の破綻を來してゐるのがナルチスス型神經症の一般的性格である。ナルチスス型神經症者の心理經濟的負擔は、所謂「背負つてゐる」と云ふ俗言に依つて適確に表現せられてゐる。彼等は、普通の健康人が身輕に步いてゐるところを、ナルチスムスの大荷物を御苦勞樣に「脊負つて」步いてゐるのであるから、それだけエネルギーは浪費せられなければならない。彼等はその重荷物のために奔命に疲れて常にそれを卿つてゐるのであるが、而も他方それを捨て去るに忍びず、それを有することに彼等の生存の意義は懸つてゐるのである。中を開いて見れば碌なものは這入つては居らず、みな幼兒期に持遊んだ玩具の壞れたやうなものばかりであるが、而もそれが彼等の無意識にとつては無上の價値であり意義であるのだ。

ナルチスス型神經症者のリビドーは昇華し損つてゐるが故に、觀念支出には常に現生のリビドーを以てし勝ちになり、甚だ危險でもあり不安でもある。丁度、日常の買物に一々本位貨幣たる金貨を持ち出すやうなものである。普通の人々はみな補助貨幣たる銀貨、銅貨、紙幣などを持出してゐるのに、ナルチスス患者のみは金貨で支拂つてゐる。それでは折角、補助貨幣の出來た社會的意義を無視するもので、周圍の人々もジロジロ彼の顏を眺めるであらうし、彼自身も心配しながら恥ぢなければならないのである。

次に我々はいさゝか方面をかへて、

七、能率の問題――を論じて見たい。能率と云ふことは、前に述べた通り、單にエネルギー節約の消極的問題（意識的見地からはどうしてもさう云ふ風な考へ方に終始するやうになるより外はないが）のみならず、その心理經濟を如何にして最も有效に行ふべきかと云ふ積極的な問題でもあらねばならないのである。

勞働はエネルギーの消費面と生産面とに分けて考へることが出來るが、併し一切の勞働はたとへ生産面を有せずとも必然的に消費面を有してゐる。否、人間の生存それ自身が既に必然的に消費の上に成立つものである。況んや勞働に於いてをや。そこで勞働は屢々懲罰として罪人の上に課せられる。然るに或る宗教學校の先生は勞働は懲罰として課せらるべきものではなく、褒美として與へらるべきものであると云ふので、善事をしたものにのみ課するやうにしたと云ふが、やがて善事をするものが段々なくなつて來たと云ふ結果を招いたとのこと。

それはその筈だ。私はかつて勞働は創造であるが故に歡喜であると、ウィリアム・モリスと共に唱へたことがあるが、如何なる勞働も常に必ず創造であり歡喜であるとは云はない。如何なる勞働も常に必ずエネルギー消費であるが、エネルギー創造としての面を甚だ少く有する勞働は存在しないではない。殊に我々の超自我とナルチスムスとエロスとに滿足を與へない勞働はたとひ如何にエネルギー創造的であつても、その歡喜としての特質は低い。故に超自我高く、ナルチスムス強く、エロス豊富な人間はとかく、單なるエネルギー生産的な筋肉勞働や實務や物質的事業に從事することを好まず、學問や藝術や宗教などの仕事を擇ぶやうになるのである。それ故に、さう云ふ超自我、ナルチスムス、エロスを特に豊富に有する人に對しては單なる雜務的勞働に服せしめることは、それ等の心理特質を比較的少く有する人々に對して課するよりは懲罰としての意義が大きいことになる。

併しながら、轉じて考へると、人間は（前にも論じた通り）何の勞働をせずとも、絶對安靜にしてゐてもエネルギーは刻々に消費せられて行くのであるから、その人が非常に超自我高く、ナルチスムス的であり、エロスの人であればあるほど、絶對に勞働を禁ぜられると云ふことは、彼にとつて最大の苦痛であり懲罰でなければならない。何とな

れば、何ら勞働せずして（生産化せずして）彼のエネルギーを消費することは、彼の超自我に反し、彼のナルチスムスを引下げ、彼のエロスを無に歸することであるからである。昔から「無事に苦む」と云ふ言葉があるが、これは正にこの心境を適切に表現したものである。結局、能率の問題は、仕事に際し如何なる程度まで、如何なる形式で、勞働者の超自我とナルチスムスとエロスとを生かすやうにしてやるべきかと云ふところにその窮極の意義がある。利益を以て釣ることや、便利な機械をあてがつて促すことや、適宜の休養を供することなども、それ〳〵に必要であり有意義ではあるが、能率問題としては窮極的意義ではないと云へるであらう。次に、

八、記憶の問題――に就いて論及しておきたい。記憶の問題とは、過去の經驗の蓄積に對するリビドー配給の問題である。我々人類は過去の經驗を利用して將來の生活の資料とすると云ふ特殊の傾向を有してゐる。これは他の高等生物も多少は行ふところであるが、人類に於いて斷然他を拔いて多大に行はれる。その代り無用な經驗に對してまでもリビドー配給を行つて、從つて當然限度あるリビドー量に貧困を來す、これ神經症狀である。リビドー配給は將來の生活のために必要な程度に應じてそれ〳〵配給量に等差を附しておかねばならない筈であるが、神經症患者の場合に於いては無用なものに多量に配給しておきながら有用なものに少量しか配給しないと云ふ風になりがちである。

精神分析學から見た記憶現象は、これを局所的に考へて前意識界のものと無意識界にあるものとに區別することが出來る「我々は日常の生活に於いて毎日必要な品以外は大抵は押入に片付けておく。さう云ふものをゴタゴタ並べておくことは仕事や生活の邪魔になる。心理生活も正にその通り、平素意識界（居間）に置く必要のあるものは極めて僅かであるが、三日に一度、一月に一度、一年に一度しか用ゐないやうなものは大抵は押入（前意識界）にしまつておく。或は十年に一度、一生に一度しか用ゐないやうなものは土藏や地下室や、密室や開かずの間（無意識界）などに鍵をかけて片付けておく、併し密室や開かずの間でもやはり家屋稅はかゝるのである。平素あまり必要でない、遠い祖先の遺品のやうなものをゴタゴタ並べておいてそのための家屋稅が現在生活してゐる居間の家屋稅よりも多額に上るやうになつては、心理經濟は正常であるとは云へない。その時は古道具屋に拂つて了はなければならない。その

賣立の相談にあづかるものが分析者である。

四、社會生活に於ける心理經濟

（A） 社會機構の力學的構成。

原始社會から近代社會への進展、又は農村社會から都市社會への變遷は丁度エスから自我の發生した過程を彷彿するものである。勿論、原始社會それ自身の中に、その自我に相當すべき核子の既に發見せらるべきは云ふまでもないことであるが、それにしても原始社會や農村社會は一方それ自身としての存續を保ちつゝ、他方に都市と貴族とはその原始社會、農村社會の中から胚胎して來たものである。

この形態はそのまゝまた政治機構には反映して、一方、エスに相當すべき民衆は昔ながらの姿で存續して他方そこから抜け出して來た知識階級、指導階級、及び貴族階級（卽ち自我超自我に相當するもの）は成立して、半ば民衆と對立しつゝ、半ばこれと混融してゐる。指導階級は政治の實權者でありこれが自我に相當し、貴族は批判者、審判役であつてこれは超自我に相當して實權と實行の義務とを有たないと共に、有つてはならないものである。貴族や指導者は民衆の實力を利用するものであつて、彼等自身にその實力の全部があるわけではないが、漫然客觀すると如何にも彼等にその實力が具はつてゐるかのやうに見える。彼等はたゞ民衆の有する社會的エネルギーを驅使する才力だけを有するに過ぎないのだ。それは丁度、馬に乘つてゐる騎士が驅走するのは、騎士の力と云ふよりは寧ろ馬の力を借りてゐるものであつて、彼等はたゞ馬の盲目的なエネルギーを巧みに驅使する才力を具へてゐるに過ぎないのと一般である。たゞ輕率に眺めると、騎士それ自身にそれだけの驅走能力の全部が具はつてゐるかの如くに見え、彼等自身もそのやうに妄信し誤解することが實に屢々である。

これを要するに、社會機構や政治機構の力學的構成も心理裝置のそれと正に同じく、それ〴〵の個所の機能は分業化して居りながら、而も全體としての有機化（統制とは云はず）がとれて居なくてはならないのである。統制を重視

する全體主義は自我と超自我とが合體してエスを盲目狀態に置くことによつてその力を利用せんとするものであり、その故にエスは自我超自我の考へる如き幸福を幸福として甘受することを學ばない限り不平を持つやうになるであらうが、上からの統制でなく、さりとて下からの統制（即ちデモクラシイ）でもなく、上下渾一體の社會機構は、これ健全な社會狀態であるが、併しさう云ふ中庸狀態は永くそのまゝ持續してゐると云ふことは、如何なる時代、如何なる民族の間に於いても、不可能なことであらう。その時代やその環境の情勢によつて、上からの統制の强化せられなければならない場合もあるであらうし、下からの統制の强化せられねばならない場合もあらう。社會も人心も常に右に左に動搖して居り、嘗て一瞬なる能はざるものであるが、その中庸の狀態は何れの時か回復せられなければならない。この狀態が社會心理經濟の最も圓滑に行はれてゐる狀態であると云へよう。

（B）　**社會心理經濟の法則。**

一、個人心理經濟と社會心理經濟との相違――この相違を端的に示してゐる一例は、物語の中に於いてゞはあるがフランス文豪ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』の中に於いて主人公ジャンバルジャンが僞のジャンバルジャンが所罰せられようとした時に自らそれと名乘り出た時の、法廷の迷惑さうな表情に伺はれる。この例は架空の物語中のものとは云へ、現實性を十分に具へてゐると云へる。ジャンバルジャンは今やマドレーヌ市長として財と名と權威とを兼ね具へた一代の人望家となつてゐた。何人も彼の前身が脫獄囚人ジャンバルジャンであるとは想像もしなかつた。彼は幸福であつた。その時、突如としてシャムマシウなる一老人がジャンバルジャンと酷似してゐるとの理由でジャンバルジャンとして裁斷せられようとしてゐることがマドレーヌ市長の耳に入つた。その事を知つて彼の高い超自我――ミリエル僧正の面影に、その贈物たる銀の燭臺に象徵化せられてゐる彼の峻嚴な超自我――は默つてゐなかつた。潔く、我こそお尋ねのジャンバルジャンであると名乘り出て無垢の哀れな老人シャムマシウをその不幸から救へと命ずるのであつた。併しそのためには彼の現在の幸福と安樂と聲威とをすべて放擲しなければならない。彼の自我と超自我とはそこで猛烈な葛藤を始めた。俺は爾々の善根を積んだ。その善根は過去の惡根を償ふて餘りがある。俺は無罪だ、俺は

あの工場を建てた。俺が失脚したらあの工場に働く多勢の職工たちは失職せねばなるまい。自我の抗議は妥當であつたが、超自我の批判は依然峻嚴を極め、それ等一切の理由のために無罪の人を苦しめて恬然として居る權利は如何にして生ずるかと。そこであの美しい言葉となつて彼の苦悶は叫び出される。「天國に停まつて惡魔となるべきか。再び地獄に入つて天使となるべきか」と。彼は遂に後者を選んで裁判所へと馬車を驅つた。

裁判所は彼の告白を迷惑に思ひ、彼を狂人として扱ひたがつた。「誰かこゝに醫者は居らぬか」と裁判長は叫ぶ。市長の精神鑑定をさせようとするのであつた。と云ふことは、裁判長が自分の下さうとしてゐる判決の動搖することを不快とするためである。何故に不快とするかと云ふに、それは裁判長が市長を尊敬するためでもなければ、シャムマウ老人を憎むためでもなければ、自分の裁判官としての權威の動搖することを憂うるためでもなくて、實は折角片付きさうになつた事件が又もやこのために混亂に陷りて、また元から取調べ直さなければならないと云ふエネルギーの支出が彼及び彼の屬僚たちにとつて堪え難い損失であつたからであらう。官吏としては事の眞僞よりも、外見如何にも尤もらしく要領よく事務を處理して大過なければそれでよいのであつて、ジャンバルジャン（マドレーヌ市長）のやうに道德心の滿足を得るのが目的でもなければ、法學者や心理學者のやうにこの事實の科學的眞相を闡明するのが目的でもない。それは官吏として俗吏として事務家として當然のことであつて、彼はその場合、法學者でもなければ、心理學者でもなければ、道德家でもなければ、宗教家でもないのである。たゞ一裁判官としての事務を簡捷に運ばせつゝあるに過ぎないのである。卽ち、換言すれば、彼は自己及び自己の代表する社會のエネルギーを最も經濟的に處理しようとしてゐるのであるからである。またさう云ふ態度でなければ、彼等の職責は到底完全に果されるわけはないのである。またこのやうな態度や方法に依つて常に必ず誤りがあるとも限らないのである。

二、右との現實的類例——右は物語に發見せられたる社會心理經濟の機制であるが、それは正にそのまゝ現實生活の中にも屢々見出されるのである。例へば、雜誌『人生創造』昭和十三年二月號に揭げられた岸井溪堂氏稿『工夫無限』の中の次の實話の如きが正にそれである。岸井氏の文の重要な部分をところぐ〵中略して左に引用させて貰ふ。

「今から二十年程前まで田舍には火を焚く時に用ゆる火札といふものがあつた。或娘に懸想した男が、その娘の緣談が持ち上がるや、その火札に『お前の娘を嫁にやると燒き拂ふぞ』といふ意味の文句を書いて娘の家の附近に立札して娘の親を脅迫したといふ事件です。被疑者として捕まつたのが飮食店（茶店）の主人某であつた。警察へ呼ばれて散々いぢめられたらしく、已むを得ず私がやりましたといふことを自白しました。豫審に附され檢事に調べられても矢張りその通りになつてゐる。それが公判になつた、その事件を私が擔當いたしたのであります。

私は先づ刑務所へ行つて本人に面會して聞いて見た。ところが、實は私がやつたのではないと言ふ。

「しかし、君は何遍も自分がやつたといふことを自白してゐるではないか。のみならず筆蹟を鑑定したら同字だと書いてあるぢやないか。」

「本當に私がやつたのではない。警察でいぢめられて色々訊かれたので仕方なしに自白しただけです。」

といふ答であつた。よく聞いて見ると、夜もろく〳〵寢かせないで、入代り立ち代り刑事がやつて來て、ゆすぶり起しては訊問する、眠らない程つらいものはないさうです、私はいつか斯ういふ體驗談を聞いたことがある。さういふところを狙つてやるのかどうか知れませぬが、刑事が入代り立ち代りやつて來ては無理矢理訊問されるので已むを得ず自白したといふことであつた。

そこで、先づ頭に浮んだのは、重要な證據物件たる火札の「筆蹟」です。一體この證據物といふものは裁判所の一つの倉の中に入れて別にしてある。辯護人だけはそれを見ることが出來ることになつてゐるので、それを見せて貰つた。よく調べて見ると、私書道の方を少しやつてゐるのが役立つて、字の癖など可なり違つてゐることが判つた。

けれども、本人が書いたのでないといふことが判つただけでは、何の役にも立たない。誰が書いたのであるかといふことが判らなければいかぬ。昔の裁判などでも、疑ひがかゝつたならば無罪の證據を出さなければ許されなかつたさうですが、今日でも矢張り同じです。今の事件でも警察や豫審廷で自白してゐるのですから、それを引くり返すには、否應なしに實際の犯跡を擧げなければならない。そこで、親類一同を呼んで、何か思ひ當ることはないかといふ

ことを聞いて見た。こんな時こそ親類が非常に大切である。辯護士が種を探す場合、親類が同志になつて協力しなければならぬといふことを呉々も申して置きたいのであります。「いやそれには疑ひの人がある。その女に懸想した薄馬鹿のやうな男が居る」「それが書いたのか」「確かにさうだと思ふ」「その筆跡はないか」「あれは滅多に字を書かぬ男だ。」

記錄がなくては取りつく島がない。色々考へた末、田舍では人が亡くなると香奠を持つて行く。その包みを丁寧に縛つてとつて置いて、他日不幸のあつた時に同じ額を返すといふことになつてゐる。漸くにしてその男の書いた包み紙を發見して調べて見ると、「なにがし」といふ字がとても振つてゐる。それを手に入れて裁判所へ行つて火札の文字と對照して見ると、非常によく似て居る。

この上は、その男を呼出して「お前が書いたのではないか」と正否を確めて見ると極めてはつきりするのですが、その男を裁判所へ呼出すには、何か理由がなければ出來ない。火札と同じ字であるといふことだけでは許されるものでない。ですから外のことに託して、斯ういふことで調べて貰ひたいといふ申請をした。ところが幸ひ、山をかけたのが當つて、その男を裁判所へ呼出すことになつた。訊ねて見ると、「違ひます」と頑張る。

扨て御承知の通り裁判所には宣誓といふものがあつて、一々署名をさせる。その字を比べて見ると全く似てゐる。確信を得た私は「實はこの人について斯ういふ疑がある、この事件の證據物件たる火札の字はこの人が書いたものと確信する。是非お調べを願ひたい」と申請した。

裁判官は首を捻つて會議した結果、遂に私の申請は採用された。しめたと思つた。澤山字を書かせたがその中『嫁』といふ字が皆『稼』と書いてある。それで『ヨメ』といふ字を書いて見よといふと何度も『カセグ』といふ字を書いてゐるし『ヨメ』といふ字はこれに違ひないかといふと、違ひありませぬと言ふ。そこで漸く本人の言ふことが逃れられない破目になつた。

そこで、これは被告人の書いたものでない。この人間の書いたものと思ふから是非鑑定して貰ひたいといふことを

申請した。大概鑑定は民事々件では違ふと鑑定し、刑事々件では同じだと鑑定する癖がある。だから餘程鑑定を上手にさせなければならぬ。茲に證據物件として火札に書いたもの甲と、被告の書いたもの乙と、その男の書いたもの丙と三つある場合、乙又は丙の一つ宛を以て甲に似てゐるかと鑑定さすと間違つた鑑定をする虞れがあるので、私は甲に對して乙と丙を兩方出してどつちが似てゐるかといふやうに鑑定をさせたのでありますが、その結果どうしてもその男の書いた丙と火札に書いたもの甲とがすつかり合致することになつた。それで漸く疑は晴れたのですが、それを決定する迄には檢事が反對して容易に容認してくれなかつたのですが、それでも最後には私の主張が通つて、無罪になつたのであります。

實際裁判といふものは、普通考へるやうに公正に行はれるものと限らない。一たび罪を受けたならば世間ではすぐあの人だといふやうな考へ方をするものが少くないが、かういふやうな寃罪がないとも限らないといふことを御承知置き願ひたい。」

かう云ふ事實に對してはとかく人々は道徳的批判を加へたがるけれども、その前にまづ心理經濟的見地から考究してかゝらなければならない。被疑者を不眠狀態に陷れておいて尋問することは、彼をして早く眞狀を告白せしめようと云ふ經濟的意圖に出づるものであつて、必ずしも彼に虛僞の告白をなさしめようとしたことを意味するものではない。尋問者に批難の餘地があるならば、被疑者が如何に不眠の苦境にあつたとは云へ、虛僞の申立てをしたと云ふ點にも批難の餘地は存しなければならない。吏員は與へられたる材料に基いて最もエネルギー經濟的な方法で處斷して行けばよいのであつて、それが能吏たる所以である。與へられざる材料までほじくり出して來ると云ふことは、彼の科學的興味や人道的情熱に基くものであつて、官吏はそのやうな無用の方面に頭腦を用ふる必要はないし、またそんなことは出來もしなければ、しても始まらないことでさへあるのである。岸井氏は辯護士であるから、このやうな與へられざる材料を探し出して來て、豫審を覆したけれども、それは彼の道徳心に出づるものではなく(道徳心も全然

なかつたと云ふのではないが)、寧ろ彼の職業的意圖(經濟心)に出づるものであつて、彼がもし警察官や裁判官にな
ればやはりこのやうな「工夫」は無用のエネルギー浪費として試みなくなるであらうことは明かである。

三、國家政策に於ける心理經濟――一國家政策の變動の如きも、國民心理經濟に基く場合が頗る多いことを見落してはならない。三十年間東京帝國大學法科に講義し續けられた憲法論が急に不當とせられるやうになつたり、一時はあれほど大目に見られてゐたマルクシズムが突如として排擊せられたりするやうになつたりすることを、當局者の無定見、不見識としてのみ批判することは出來ない。美濃部博士の憲法論は云はゞ、從前それほどまでに國家國民から默殺せられてゐたと云ふことが出來るのである。學者の寢言ぐらゐにしか考へられてゐなかつたのである。それで大目に見られてゐたのであつて、必ずしも美濃部說が國家國民の全體から支持せられ容認せられてゐたためではなかつたのだ。それが急に不當なりとせられるやうになつたのは、突然美濃部說の重要說たる所以を認識するやうになつたためではないのだ。寧ろ一學者の一學說をさへも神經質に氣をくばらなければならなくなつた程に、對外の心理經濟關係が重大性を加へて來たゝめに外ならない。丁度、或る富豪が財產狀態の安泰な間は息子の少々の道樂をも大目に見てゐたのが、株式界の變動に應じて自分の財產狀態が危險に瀕すると、急に息子の道樂や趣味にまで干涉や制肘を加へたりするやうにならねばならないのと同じであらう。

左右兩翼の對立に對する爲政者の態度の變動に就いてもやはり同樣に、國民的心理經濟の見地から說明することが出來る。國民の心理エネルギーの重大な部分を國外の方に注がなければならなくなつて來れば、國內での對立に依るエネルギー消費は極度に節約せしめられなければならなくなるのは當然である。丁度、兄弟內にせめけども、外その侮りを防ぐのと同じである。外からの侮りは兄弟の共通の損失であるからである。さう云ふ心理經濟法の原則を認識せずして、徒らに抽象的な眞理や一般的な法則などを持出して頑張つてゐると云ふことは、彼等の超自我の病的に高く自我の不健全であると云ふことを暴露するに過ぎないものであつて、彼等は結局現實生活の敗北者とならなければならないであらう。また現に多くの敗北者を出した。たゞ超自我のあまりに低調卑俗にして朝三暮四、現實に順應

すると云ふより現實に阿附する如き態度の者はこれまた決して健全なる精神の所有者と云ふことは出來ない。健全なる自我と超自我とを有するものは常に現在の現實と過去の現實と將來の現實との間の關係を大觀することが出來る筈である。さう云ふ固定的ならぬ現實感、進展し流動するものとしての現實感はたゞ健全なる精神（自我及び超自我の合體）の所有者のみがこれを把握することが出來、またそのやうな精神の所有者のみが現實に阿附せずしてこれに順應――と云ふよりはこれを支配することが出來るのである。

五、文明の進步と心理經濟法の進步

以上說いて來たやうに、人生に於ける心理經濟法と云ふ見地から個人生活及び社會生活を仔細に檢覈して見ると、そこには如何にも無駄が多いと云ふことを痛感する。最少限の勞力を以て最大限の効果を擧げようと云ふのが經濟學發生の根本要諦であるならば、これは勞力の出し惜みをすると云ふ意味ではなく、勞働の効果を擧げる方法を探究すると云ふのがその眞實の意味でなければならない。で、私は文明の進步と云ふやうな事も實は心理經濟法の進步と云ふことに外ならないと考へるのである。抑々、進步と云ふやうなことは、人々が信じてゐるやうに實際あるのかどうかは姑く別問題として、大體に於いて人類は意識的に進步し、無意識的に退步する（而もその意識の進步も無意識の出資に於いてゞある）と云ふのがその眞相であるやうに思はれる。もしこの哲學的、思辨的な考へ方が何等かの客觀的妥當性を有するとすれば、進步せる意識活動と退步せる無意識活動とは相殺して結局人生には何らの變化がないと云ふやうな考へ方にもなるし、また意識方面の進步と無意識方面の退步とが相尅して、愈々人生を不自然な、ぎごちない狀態に追遣ると云ふやうにも考へられる。要するに、無意識（エス）の退步と意識の進步との間に相尅を生ぜしめない、或は最少限度にその相尅を緩和することは、無意識を意識化する分析の操作に外ならないと思はれる。何となれば、さうしておかなければ無意識は常に出資するばかりでその回收はつかず意識に搾取せられて、遂に無意識の反逆革命を起すことになるからだ。それ故に我等は分析の事業に最も重大な文明史的意義を主張するものであつて、

これ以外の文明的努力は總て第二次的な重要性をしか主張し得ないものであると考へてゐるものである。
そのやうな次第で、從前に文明進歩の標徴として認められてゐたやうな事柄も、實は心理經濟に於ける進歩の事に外ならなかつたと考へ直される場合が甚だ多いのではないかと思ふ。その證據の二三を左に擧げて見よう。
第一に、中世期に於いては性慾はそれ自身惡であると考へられてゐたのであるから、性慾に抗することそれ自身が非常に崇高偉大なことであると考へられてゐた。それ故に、西洋中世の苦行僧たちは、高い柱の上に登つてその上で一人で苦み惱み拔いてそれで何か非常に立派な行ひを果し、社會人生を高めるものゝやうに考へてゐたのだ。尤も、柱の上の生活は普通地上の生活よりは空間的には確に高いには相違ない。そのやうに空間的な高さを精神的な高さの象徴として解する機制が彼等の無意識心理の中に働いてゐるので、その點では數年前にわが國の社會を騷がせた煙突男なども苦行僧の精神的子孫であり、その象徴主義の無意識傳統の保持者であると解することが出來る。併し高い柱の上で苦惱して見ても、現實社會はそのために少しも進歩などはしないし、本人の生活もたゞの浪費に過ぎないのである。丁度、百萬圓の財産を親から讓られた子がそれを罪惡と感じ（さう云ふ人は隨分に多い！）その罪惡感は恐怖感となり、泥棒に盜まれることの被害妄想を起し、堅固な土藏を築いてそれを守り立てようとしたが、さて土藏が出て見たら、その築造費に百萬圓を要し、守り立てるべき財産はなくなつてゐたと云ふのと同じで、そんなことなら、その百萬圓で遊興でもした方がまだしも享樂の得られるだけでも有意味であつたわけである。性慾を惡と考へたことが思想上の病理であつた。從つて彼の心理エネルギーは破産をしたのだ。性慾が惡だと云ふので去勢をすれば、その男は社會に於いて何ら男性的活動能力のない人間になつてしまふことは幾多證據の擧つてゐることで、現代人はみなそれ位の事は知つてゐるが、中世人はそれを知らなかつた。と云ふことは、つまり、心理エネルギーの根源を知らなかつたと云ふことになるのである。
第二に、復讐に就いての考へ方の變化もさうである。近代では復讐は惡だと考へられてゐるが、中世に於いてはそれは美德とせられてゐた。どうして近世に入ると共に復讐觀がこのやうに變化して來たかと云ふに、これも要するに

エネルギー經濟上の必要からであると云へる。近代人でも實際に於いて復讐は行つてはゐるのだ。それは殺人に對して殺人を以てするやうな復讐の仕方をしないだけである。さう云ふ復讐は個人が行はずに社會が、法律が行つてくれる。それ故に個人はさう云ふ問題は公事に任せておいて、自分のエネルギーはもつと有意義に利用することが許されるのだ。それ故に、それをほつておいて、自分で復讐に憂身をやつすことは道德的に惡とせられるやうになつたので根柢はエネルギー經濟法の進歩であつて、道德上の進歩ではない。菊池寛の小說に次のやうな筋のものがある。或る夫人が夫を賊に殺された。賊は入獄して敎誨師のために說敎せられ、大悟徹底して、その處刑には何ら惡びれたところがなく、歡喜を以て死に就いたと云ふ報を聞いて、被害者未亡人は非常に不滿を訴へ、政府の處置の誤りを責めたと云ふのである。これは未亡人の心理としては極めて自然であると共に、如何に刑法が個人に代つて復讐の古き法則を今日に繼承實施する制度であるか、またあらねばならない一面を存してゐるかを證明するものであると思ふ。

典型的な復讐問題として見られるシェイクスピアの『ハムレット』をとつて見ても、これを心理エネルギー經濟の面から見ると、一層あの作の意義がよく分つて來る。ハムレットはもつと自分の生命を有意義に活用したかつたのだが彼は復讐の義務を負はされてしまつたので、その點に彼の懷疑の動機があつたのだ。シェイクスピアがこの點を重大に强調してゐるのだが、世の批評家たちはみな看過してしまつてゐる。現に、ハムレットと對比してフォーチンブラスの生活が描かれてある。そのフォーチンブラスと云ふのは、ハムレットの父のために自分の父を殺されて、復讐の念に燃えるのだが、それを斷念して別の事にエネルギーを傾注するのだ。而も、フォーチンブラスの父をハムレットの父が殺した日に王子ハムレットが生れてゐると云ふのだから、その因緣は極めて皮肉であり運命的である。さうして結局ハムレットの領土は全部フォーチンブラスの手に歸してしまふことになるのだから、心理エネルギー經濟化の方法を知ると知らざるとの二人の生活の對比を作者が十分に意識して描いてゐることは、殆ど絕對的に否定のしようがないと私は信じてゐる。

心理經濟の問題は以上の論述で盡くし得たとは思はないが、大體の要領は把握し得たかと思ふ。（完）

芭蕉とその門下との心理的關係【下】

——集團心理の理論より觀たる——

宮田戊子

芭蕉と集團との關係

私は前號において芭蕉とその門下の心理關係を述べた。これは芭蕉の指導者としての資質を檢討する豫備的動作であつたのであるが、その蕉門における複雜微妙な心理の動きを述べるのに紙數を多く費したゝめ、肝腎の芭蕉の指導者としての資質、指導理論の如何等はこれを本月號に割愛しなければならなくなつたのである。

前號に於いて極めて茫漠として觸れておいたが、俳諧の集團が純粹に藝術的に行動してゐる間は、集團自體が何ら矛盾を釀すことはない。しかしそれが職業化するに至ると、その職業意識が藝術行動を阻害し、師弟關係をも崩壞に導く。その最もよき實例を我々は芭蕉以後の俳壇に見てゐる。これは畢竟するに指導者としての面と、組織者としての面の相尅によるもので、それが職業として、何ほどでも多く人を集めたい慾望を有する限り、藝術的行動は純粹性を保ち得ない。これは今日の俳句の結社でも同じことである。人間には生の本能と死の本能、即ち有機體から無機物へ還元する本能のあることはフロイドの喝破したところであるが、集團においてもそれと同じく、群居の本能があると同時に、それから個々へ分散せんとする本能があると觀て差支へないやうである。蕉門における背反はその後者のあらはれであつた譯であるが、既に見て來たやうに、それは漫然と分散しようとするものではなくて、最高の首領から分離して、自らがそれの小さなものに扮裝しようとする指導癖の現はれでもあつたのである。

芭蕉が俳諧師としてどのやうな生活費を得てゐたかは

今日餘り明らかでない。故山口剛氏は、その著「江戶時代の作家生活」(『紙魚文學』所收)において、芭蕉が『奥の細道』の行脚中、山中の久米之助なる者の所に宿つた時のことを記したその序次に

かれが父俳諧を好み、洛の貞室、若輩のむかし、爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸て貞德の門人となつて世にしらる。功名の後、此一村判詞の料を請ずと云。今更むかし語とはなりぬ。

と、一字一句もゆるがせにしない簡潔な『奥の細道』に於て、あまり全體について重要でないと思はれる點料のことを芭蕉が書いてゐるのは、彼がその生活資料を重く見てゐたといふことが考へられなくもないといはれてゐる。また氏は、芭蕉が曲水に宛てた書簡、いはゆる「風雅三等文」といふものを見ても、彼が大衆といふものを考へずにゐたわけではなかつたと述べてゐる。その「風雅三等文」の全文をこゝに紹介するのも徒事ではなからうと思はれるので、左にこれを掲げる。

一風雅の道筋大かた世上三等に相見え候、點取に晝夜を盡し勝負を爭ひ、道を見ずして走り廻る者有。彼等風雅のうろたへものに似申候へども、點者の妻子腹をふくらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんには増りたるべし。

又其身富貴にして目に立慰は世上を憚り、人事云はんにしかじと日夜二卷三卷點取、勝たるものもほこらず、負たるものもしゐていからず、いざま一卷など又とりかゝり、線香五分之間に工夫をめぐらし、事終て即點など興ずる事とも、偏に少年のよみかるたにひとし。されども料理を調へ酒を飽迄にして、貧なるものを助け、點者を肥しむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。

△又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず、これより實之道に入べき器なりなど、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから、わづかに都鄙かぞへて十ヲの指たるべし。能〳〵御つゝしみ御修業御尤奉存候——

これは元祿五年のもの、これによつて見ても芭蕉が比較的遲くまで妥協的な態度であつたことがわかるが、殊に興味あることは、從來解されてゐるやうに、單に風雅を三等級に分けてゐるばかりではなく、俳諧に携はる人を三階級に分けて論じてゐることである。即ち

一、道を見ずして點取の勝負のみに狂奔してゐるもの

(それが社會的には、最下級の小市民層を指してゐることはその文で明らかである。)

二、富貴な人の閑つぶしにやるもの
三、他の是非（大衆的な評價と解する。）に迷はず、杜甫、樂天、西行、定家を以て任ずるもの（社會的にはこれは智識層を指すものであらう。）

等に分け、一、二のものに主力を置かず、三の智識層に主力を置いてはゐるが、然しそれだからと云つて一、二の者を捨てるのではなく、俳諧點者の生計を助け、又は貧しいものを扶知する點でかゝる輩も「道の建立の一筋」であらうといふのである。この見解によれば彼は一槪に藝術の理想に走ることなく、十分に現實と妥協し、一、二の人々の如きはこれを說いても到底三の人々のやうになるものでないことを認めながらも、それはそれとして捨てず、むしろ道のために利用すべきであると考へてゐるのである。そこに指導者としての芭蕉の洞察力が見え、彼が大衆を組織する上に採つた方法と照し合せて興味あることに思はれる。彼が多くの人をその膝下に集め得たのは、その指導理論や藝術の卓越性によるばかりではなく、むしろ斯うした「働きかけ」によるところと考へることは當然であらう。そして斯ういふ方面での芭蕉の手腕の認識が、從來の芭蕉研究家に齊しく回避されてゐるのは、芭蕉を仙人のやうな人として置きたい無意識の集合心理によるものである。しかし藝術は一人で達せられるものではなく、多くの人を自らの位置に高めることによつて達せられるのであるとすれば、芭蕉を仙人とするしないは別として、この方面を認めんとすることが必ずしも彼を冒瀆するものとは考へられないのである。この重要な事項を認めまいとしてゐる史家研究家の態度がまづ心理的に問題にならなければならないであらう。

指導者としての芭蕉を研究するために私はその指導理論を檢討しようとするのであるが、これは可なり困難の伴ふ仕事である。なぜならば芭蕉の俳論と唱へるものに眞僞頗る疑はしいものが多くあり。採否に迷はさるゝのみならず、芭蕉は一貫した指導理論を唱へてゐないからである。芭蕉の俳論と唱へるものは皆その門下が彼の死後書いた斷片的なものなので、それをなるべく多く集めて、指導理論の體系をつくつてみるより仕方がないのである。

談林止揚の狀態から觀たる芭蕉の性格

何よりも念頭におかなければならぬことは、芭蕉は貞德門の季吟門下であり、のち談林興起にあたつてその影響をうけた人であることである。その過去のものたる貞門、談林を彼がどのやうに揚棄したかは、彼の俳諧を見

る上で重要なものがある譯である。ところでその談林の俳諧とはどんなものか。これは明らかに當時勃興しつゝあつた町人階級の感情を表現してをり。その首領宗因が てすいたことして遊ぶにしかじ、夢幻の戯言なり」（阿蘭陀丸二番船）と云つたやうに、著しく遊戯的要素をもち、言葉の上の機智によつて成立してゐるので、彼らにはまづ何をおいても快感を欲求する意が濃く、洒落のめして喜ぶ風があつたのである。談林以前の貞德の俳諧も町人の參加が多く、したがつて町人の感情を反映してゐるけれども、それは著しく古典への思慕を明らかにしてゐたが、談林は古典をもぢり茶化すやうな態度を露骨にしてゐる。例へば西行の

　ながむとて花にもいたくなりぬれば散る別れこそ悲しかりけれ

をもぢつて

　ながむとて花にもいたし頸の骨　　宗　因

となし

今來んといひしばかりに長月の有明の月を待ちいづるかな

を

　今來んといひしは雁の料理かな　　宗　因

と詠む類である。また西鶴、三千風等によつて行はれた矢數俳諧（三十三間堂で行はれた大矢數に倣つて一夜に二三千から一萬餘の句を詠むもの）の如き輕口俳諧も彼らの得意とするところであつた。しかし前號にも述べたやうにこれも次第に行詰り狀態に達し、諸國に期せずして新風への運動が起つてゐた。芭蕉はこの機運を巧みにとらへたのである。

　談林の運動はさうした一面をもつが、然し寫實的一面をもつことも否みがたい。この寫實性こそ、新興町人階級の中世的宗教主義や擬古的浪曼主義からの脫却を意味してゐるものでなければならなかつた。芭蕉の俳諧もこの點で或る一致點を見てゐる。されば彼は「宗因なくんば吾々の俳諧は今以て貞德の涎をねぶるべし、宗因は此道の中興なり」と云つてゐる程である。この言葉には彼が「吾々の俳諧」の成功に誇を感じてゐるところが見え、曾て宗因の歡迎の席に連り、「こちとうづれもこの時の春」にめぐり會ふことを光榮とした彼とは思へぬほどナルチスムスが昂揚せられてゐる。

　芭蕉は生れつき蒲柳の質であり、常に持病に惱まされつゞけてゐたことは普く人の知るところであるが、四十歲の頃すでに六十位に見えたとは彼に親炙したものゝ語るところであり、（『老の樂』）肉體方面のかゝる狀態は精神方面にも及んで、彼には宗因、西鶴のやうなエネルギ

ツシュなところも、人を人とも思はぬところも見られない。この肉體的にも精神的にも弱々しい彼が、しば〳〵困難な長途の行脚を敢行し得たことは、彼自らが云つてゐるやうに「そゞろ神の物に憑き」(『奧の細道』)たる仕業であつたと思はれる。この天性の弱さを強くするところのものが何であつたかは後に述べるが、その統制ぶりにも強いところがなく、前にも述べたやうに、背反の意を明らかにした門下の許を訪ふといふやうな行動をとらしめたのである。この弱さのために彼は得もしてゐるが同時に損もしてゐる。

　ばせを翁うすいも(薄い痘痕)あり、其角や嵐雪が所へいくぞやといふ、あいさつしづかなり、しゆしやうなる翁なり(『老の樂』)

と記し、又別のところで嵐雪らが彼と同席するを嫌つたことを書いた後「とかく翁は德の高き人なり」とも云つてゐる。

　かういふ觀察は、恐らく當時彼に接した人々の彼に對する心理を代表してゐるものとして興味がある。彼の德が高かつたゝめその門が榮えたといふ今日における芭蕉の評價が、當時一般の人々の芭蕉に對する崇敬の情をそのまゝ傳へてゐることは先にも述べたが、要するに詩人的な弱々しい風貌が人々に強く印象づけられ、實際にそれに接する以前に「德の高い人」として仰がれたことは察するに難くない。そしてかゝる印象が彼の組織的手腕と相俟つて蕉門なる集團が結成されたものと觀られるのである。＊(前號所揭其角其他の入門の項參照)

＊もちろんこれらの內的な條件だけで蕉門が大をなしたと考へるのは早計であつて、それが大をなすためには更にも一つ大きな外的な條件が與つて力あるものであることはいふまでもない。外的な條件とは、中央集權的封建制度の下に江戸にゐたことであつて、同じやうに談林から新風へと眼を開いて行つた大阪の來山や伊丹の鬼貫やが大をなさなかつたのは、さうした地域的な關係によるものと考へられる。俳人春來が云つたといふ言葉の、江戸紫は他の企圖しても及び難いものだといふ意味は、かゝる關係を道破してゐるものと見なければならない。

　更にもう一つ考へられることは、宗因の談林が思ひきつてエネルギッシュな力を以て貞德以前の古典主義に破壞工作をやつた後を芭蕉がうけついだといふことで、そのために彼のマゾヒスティッシュな性格が幸ひしてゐるところが多いやうである。もし芭蕉が宗因と同じ年配だつたら、また宗因のやうに破壞工作をやらなければならない立場に立つたら、到底その任に堪へないにちがひなかつた。だから芭蕉が德が高く、その外的表現が殊勝に見

えたとしても、かゝる條件によらなければ大をなさなかつたと見て差支へなからう。然しながらそれだからと云つて、芭蕉の德の高い人と見られたことが結集力を强めたことを否定は出來ないので、このために芭蕉はよほど得をしてゐることは否めない。

しかし斯ういふ性格による指導と統制とは、蕉門が未だ大をなさぬうちは効果があるが、次第に大きくなつた集團に於ては、統制に缺くるところがあるのは見易いことである。先にも述べたやうに、俳諧の集團における紐帶は、感傷愛によるとはいへ、キリスト教における如き强烈な愛によるものではなく、又親分子分のやうに血を啜つて誓ふものでもなく、主從のやうに祿を以て繋がれるものでもない。その點でいはゞ烏合の衆的な集團と似たものであるし、それが師弟といふ觀念の弛緩と共に一層解體しやすくなることは明かである。しかも一人の背反は他もそれに倣ひ易いので、荷兮、越人、野水、凡兆の誰が最初に口を切つてさうなつたものであるかは明らかでないにしても、芭蕉がそれを恐れて、いはゆる怨をのんで荷兮を訪うたのは、さうした蟻の一穴から集團の崩れるのを危惧したものであることは云ふの必要のないことであらう。それにしてもその態度の弱さは蔽ふべからざるものがある。もとより彼の規矩に從はぬものや背反者が出たことは、エディポス的願望によるもので、何人がその位置に据つても避け得られぬものにしても、背反の意あるを知つてそれに腰を屈し、その鼻息を窺ふ如きは、首領その人の弱さとその組織の弱體性を知るに十分であり、これの主要なるものが芭蕉のマゾヒスティッシュな性格（根本的にはその罪障感）によることはいふまでもないであらう。卽ち曾て彼はその劣等感からして宗因を偉大視したが、その後自らの門にも多くの門人を擁するに至り、獨尊觀念をとり返すに至つたけれども、その罪障感からして絕えず理想我の呵責をうけてその自我が兢々たらざるを得なかつたゝめ、如何なることにもあれさうすることが贖罪であると考へなければならなかつたものであらう。

指導理論より觀たる芭蕉の性格

以上に見た性格の弱さは當然彼の指導理論にも及んでゐる。彼の俳論は一貫した理念によつて貫かれてゐず、個々の成員に對談的に、或は三五人に對して座談的に說くといふ方法をとり、したがつて甲のものと乙のものに說く場合とで全然反對なことを云つてゐるやうなこと

がある。

先師曰。發句は頭よりすら／＼言ひ下し來るを上品とす。

洒堂曰。先師いはく、發句は汝が如く、もの二つ三つ取り集めて作るものにあらず、黄金を打ち延べたるやうにありたしとなり。

先師曰。發句はものを取合はすれば出來るものなり。それを善く取り合はすれば上手といひ、惡しきを下手といふなり。（『去來抄』）

こゝに發句といふは今日の俳句であるが、彼はこれを二つ三つの素材を繋ぎ合せれば成るといひ、又或る時は素材二三を以て作出するものではないとも云つてゐる。かゝる自家撞着も從來の研究家には、人によつて對症療法的に說いたものと見られてゐるが、これは『去來抄』に去來の言として「先師は門人に教へ給ふに、其言葉極まりなし、」など云つてゐることを鵜呑みにしてゐるものであらうが、この『去來抄』の記事を見てもわかるやうに、それらの言が早くも混亂して傳へられ、門下を歸趣に迷はしめてゐるのは指導者として策の得たものではない。だから對症療法的な說き方などいふは最負の引倒し的な觀察で、當時の芭蕉としては、取り合せがいゝか惡いかに就て明確な意見をもつてゐなかつたと見る方が正しいやうである。もちろん今日のやうに印刷物が發達してをらず、すべて口から耳へと傳へられる當時ではあり、且つ談林から新風に移つて早々のことであるから、時に自ら云つた前言と後の言葉とに撞着するやうなこともあり得ると思ふが、『去來抄』編纂當時すでに門弟間に混亂が生じてゐたことは蔽ふべからざるもので、これは何としても芭蕉が多くの人に說くといふ用意を缺いたものと云はなくてはならない。

人が人としての感情を私意と名づけ、これを捨てゝ自然に還元することを念としたことも、彼の俳論として特徴的なものである。

松の事は松に習へ竹のことは竹に習へと師の詞のありしも私意をはなれよといふ事なり——習へと云は物に入てその微の顯て情感るなり。句となるなり。たとへ物あらはに云出てもそのものより自然に出る情にあらざれば物と我二ツになりて其情誠にいたらず、私意のなす作意なり。（『赤冊子』）

翁常に教給ふは、松のことは松に習ひ、竹のことは竹に習ふ。唯風雅は私のなきこそ誠といはん。（『木葉集』）

松や竹になつてその情を詠めといふことは、心理學の

何の木の花とは知らず匂ひかな

は、支考の『笈日記』に「西行のなみだをしたひ、增賀の信をかなしむ*」と前書があるので、この句は西行の

何ごとのおはしますかは知らねども忝けなさに淚こぼるゝ

と同じ感情から出てゐることは明らかであるが、西行の歌は、彼の多くのものがさうであるやうに無技巧で、感情を平面的に敍したにすぎないのに反し、芭蕉はその感情を極度に壓縮してそれを自無に假托して詠ひ出てゐるのである。彼が西行に對して思慕の念を明らかにしたことは今更いふまでもないが、西行的なものゝ止揚は斯ういふ形であらはれ、そこに芭蕉的な技巧主義もあり、小さなものを描いて大きなものを聯想させるといふ事の効果を彼は知つてゐたのである。『去來抄』には芭蕉の言として「いひおほせて何かある」と云つたことを錄してゐるが、この感情の壓縮と象徵化は確かに芭蕉の句の特色と云つて差支へなく、斯ういふ創作態度をとる限り、素材を二つ三つとり合せて十七字にまとめあげることゝは相容れず、後者はやゝもすれば平板な描寫になり易い。そこで「發句は——もの二つ三つ取り集めて作るものにあらず」といふ言葉になる。然し又斯かる象徵的寫實主義的手法は彼を待つて出來ることで、その手腕において所謂感情移入であるさうであるが、芭蕉が私意を嫌つたことは、彼の談林以來の放埒な句の作り方を撥無しようとしたものであらうが、然し意識上ではさうとしても無意識の彼の心理では自然は彼の母であり、その母たる自然に接するために「そゞろ神の物に憑」いた如くに思つた彼であるから、さもあるべきことゝいへるやうである。こゝに物神一如といふ心境が見られるが、この物心一如といふことの思想的根據は莊子の「物化」といふ思想であることは十一月號に述べておいたが、つまり彼の性格が弱すぎるために、弱いものが高い位置をもつものだといふ無意識の劣等感の充足からして、さうした思想的裏うちをしなければならなくなつたものであり、それが老莊的な思想に傾倒せしめた基であつたが、一方又莊子のいはゆる「物化」が「感情移入」となり、且つ俳諧の詩型の特殊性からして、卽實主義でありながらその表出にあたつては象徵主義にならざるをえなかつた。もちろん此の彼の象徵は意識的なもので、後に述べようとしてゐる無意識の象徵とは名は同じくして、全く別個のものであるけれども、彼はこれを實踐化するために相當の努力を惜しまなかつた。例へば小宮豐隆氏がその『芭蕉の研究』で云はれてゐるやうに

可なりの高低のあるその門下に望むべきことではない。「黄金を打ち延べたる」やうな句を作り出すことは、堂に入つた人によつてのみ可能で、一般はまづその目標へ向つて精進すべきであるといふ意味に解せられる。この理念には彼の「千歳不易・一時流行」と同じやうなものが底流してゐる。

＊ 増賀聖が伊勢の大神宮の夢の示現で名利を捨て行ひすましたことは『撰集抄』に見えてゐる。支考の『笈日記』に、此の句に並べて「裸にはまだ如月の嵐かな」の句が記されてゐるが。後の句は正しく増賀が名利と共に衣類を捨てゝ出家したことを詠んだものである、

彼は「不易流行」の説を元祿二年の「奥の細道」の行脚中に發明したのださうである。それは『去來抄』に「奥州行脚の……うちに工夫し給ふと見えたり……此年の冬はじめて不易流行の教を説給へり」と書いてゐるのによつて知られるし、「元祿二年己巳秋」に書かれた北枝の『山中問答』に「道古今に通じ不易の理を失はずして流行の變にわたる」と云つてゐるのも、これがこの時唱へ初められた徴證になるであらう。この「不易流行」はいろ〳〵勝手な解釋が試みられ、殊に明治以後、十七字の詩形に俳人が疑問をもつに至るや却つて保守的な人々に逆用せられてゐるが、これは彼らが「不易流行」の言葉のみに眩惑されて、内容の檢討を怠つた錯誤であるにすぎず、芭蕉の意は「俳諧は一時々々の變風（『去來抄』）なりといふ如く、流行への理論づけをしたものに外ならなかつた。＊即ち『冬の日』『春の日』『曠野』等の風調を非とし、新風を樹立せんための理論づけであつて、元祿四年の『猿蓑』はこの理論に導かれて編纂されたものである。この「不易流行」は、昨日の我を止揚して新らしき我へ策進する日々不斷の精進を示すものにほかならず、それは實に辯證法的な思考をさへ示してゐるすぐれた理論である。しかし前にも述べた通り、彼はこれを京都、湖南で熱心に說きながら江戸ではさまで熱心に說かなかつた。こゝにも指導者としてはもの足りない程の優柔さをあらはしてゐる。これも彼の性格の弱さの齎したものにほかならなかつた。（江戸における其角の勢力、及び其角の流行への反對的口吻に對して芭蕉が氣兼してゐるらしいことは前號に述べた。）

幼兒的純眞性の尊重といふことも蕉門俳諧の特徴である。

蕉門の發句は、一字不通の田夫、十歳以下の小兒も時によりて佳き句あり。却て他門の功者といへる人は覺束なし。他流は其の流の功者にならざれば、其の流の佳き句はなし。難しと見えたり。（『去來抄』）

俳諧は三尺の童子にさせよと芭蕉老人の申されしは世の人の私知をもちゆるをにくめるならし。（『けふの昔』）

師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそたのもしけれ。（『赤册子』）

この理論も先に擧げた「松のことは松にならへ」と同じやうに、私知（主觀）を排斥する意味にほかならないと思はれるが、それは鴨長明が『無名抄』で「たゞ歌は幼なかれ」と云つたことや老莊的な幼兒性願望からヒントを得てゐるものと考へられ、談林の輕口俳諧の如き悪達者に陥ることを戒めたものであらうが、根本的には自らの弱さの優越性を主張したかつた無意識の思想づけか基となつてゐるものである。（十一月號拙稿參照）

これらの諸理論によつて、そのどれもが指導者としての芭蕉の性格の弱さが知れるのであるが、この弱さによつて芭蕉の自我の卑少さと、理想我の強さとが知られ、その理想我は彼の父及び權威をとり入れたものなのは明らかであるが、曾ての何らかの罪障感（罪障と彼にだけ思はれたもの）によつて自我が絶えず脅かされつゝあつたことに基づくと考へられるのである。即ち自我の破壞本能が、彼にあつては外に向はずして理想我として自らに向けられ、時に彼のリビドーが支配本能となつて外に向ふ事があつても、その罪障感の強さからして幾何もなく内に向つてその自我に暴虐を逞しうするのである。傳ふるところによると、彼が大阪の花屋で病重篤に陥つた時、醫師で門下だつた木節が、他の醫師に診察を乞はれたいと云つたに對し、彼は死ぬまで木節の藥を賴むと云つて肯んぜず、死顔うるはしく睡るが如く逝いたさうである。かういふ態度こそ死を何かの償ひと見るマゾヒスムスに特有のものであるが、一生彼の行動はかういふ心理によつて貫かれてゐるのであつて、談林と決定的に對立しなかつたことも、旅に死なんと云つたことも、背反者たちに對して寛容だつたこともこのマゾヒスムスに基くのである。

芭蕉の連句と發句の二重性

芭蕉は談林を止揚するに當つて、二つの傾向を採つたのである。彼は連句においては寛文十二年二十九歳の時、郷里伊賀の天滿宮に奉納した『貝おほひ』以來『田舍之句合』『常盤屋之句合』におけるやうな市井の人間的なものゝ描寫を旨としたが、發句においては自然を詠じ、象徴的寫實主義に終始した。これは連句においては

その最初の數句が穏健なものたるを要し、殊に發句は茫漠として碎けたところのないものたることが原則なので發句として詠まれたものが、連句の平句とは全然異つた理念の下に作られたのは當然である。元來芭蕉は發句より連句が得意だつたので、門下に對しても連句の教へはなか〳〵嚴重だつた。今日では連句は既に過去の文學となりつゝある狀態で、その作法の如きも少數の人の外知つてゐる人が少いので、芭蕉の批判にも連句だけを取のけて評價することが流行してゐるが、かゝる評價は畢竟芭蕉をして不具的にするものにほかならないのである。

連句に對する彼の理論は、理論といふよりヨリ實際的な作り方を示してゐる點が特徵的である。これは連句そのものゝ性質上當然であつて、連句は元來附合の變化を旨とするものである故、その不即不離の變化を教へることに主力を注いだものと見られる、どういふ教へ方をしたかといふと、まづ「移り」「響き」「匂ひ」「位」等の言葉によつてそれを導いたのである。これについて『去來抄』に左の記事がある。

赤人の名はつかれけり初霞　　史邦
鳥も囀る合點なるべし　　去來

先師曰。「移り」といひ、「匂ひ」といひ、實は去年中三十棒を受けられたる證なりと悅びたまひけり。玆に思へば、「匂ひ」といふも、「移り」といふも、纔かに句作の綾にして、乘ると乘らぬとの境なれば、冷暖自知の時ならでは、悟り明きらむる事あるまじ、此の句若し「赤人の名もおもしろや」とあらば

鳥も囀るけしきなりけり

とも作るべきを「名はつかれたり」といへるより「合點なるべし」とは相移り行く處、味ひ見らるべし。

「響き」は打てば響くが如し。たとへば

くれ緣に銀土器を打ち碎き
身細き太刀の反る方を見よ

先師、この句を引きて敎ふるとて、右の手にて土器を打ちつけ、左の手にて太刀に反りかくる眞似をして語りたまひける。一句一句に趣の變ることなれば、言語に盡しがたき處、看破せらるべし。

これを要するに「移り」とか「匂ひ」とか「響き」とかいふのは連句の不即不離の變化をいふもので、芭蕉の實作上の經驗がこの言をなさしめたものと思はれるが、この方面の彼は指導者としての勝れた資質を發揮してをり、自ら句中の人間になつて土器を打ち碎き、太刀に反りをかけて見せる程熱心だつたのである。

次に「位」とは、前句に描かれた情景の身分的な位置

によつてそれにふさはしい後句を附けることである。これも『去來抄』に

　牡年曰。句の「位」とはいかなる事にや。去來曰。前句の位を知りて附けることなり。たとひ佳き句ありとも、位應ぜざれば乘らず。先師の戀の句を擧げて言はゞ

　上置の干菜きざむも上の空
　馬に出ぬ日は内で戀する

前句は人の妻にもあらず武家町人の下女にもあらず、宿屋問屋の下女なりと見て、位を定めたるものなり。

とあるその位置づけである。なほ

　細き目に花見る人の頬腫れて
　茶種色なる袖の輪ちがひ

の如きを古代人の俤となし

　尼になるべき宵のきぬ〴〵
　月影に鎧とやらん見すかして

を然るべき武夫の妻とし

　白粉を塗れども下地黑い顏
　役者模樣の袖のたきもの

等を今樣の女となすなど、皆連句の實際的附け方を敎へたものである。これは去來の書いたものであるが、もとは芭蕉が說いたものに違ひないのであるから蕉門の敎授法と見て差支へない。これらの附け方十七條を傳授したのを路通が芭蕉に內密に賣つたことが路通破門の因であるといはれてゐるが、この十七條の附け方は、これ以外に蕉門に附け方がないと後世思はれてはとの懸念から、芭蕉はこれを捨てたのだといはれる。その道に忠實なのは肯定せられるが、こゝでも指導者としての弱さが指摘し得られる。事實彼自ら「發句は門人にも作者あり、附合は老骨の吟」と云つたやうに、その附合の巧みさは門下はもとより、他門にも當時匹敵するものがなかつたのであるから、もつと確信を以て指導もし、號令してよかつた譯であつたのだ。

　然しながら連句のかゝる修練は、句と句との間に言葉以外の飛躍を試みしむる手段を蕉門の徒は發見したのである。たとへば

　きさんじな青葉の頃の樅楓　　惟然
　山に門ある有明の月　　芭蕉

の如く、前句と後句の間の不卽不離が複雜な情景を處理出來ることになるのであるが、後にはこれが發句にも應用され、一句の切れ目に或る種の飛躍あるべく語が繼がれるやうになつた。

　山里や井戸の端なる梅の花　　鬼貫

はいはゆる平面描寫的なものであるが

山里は萬歳おそし梅の花　　芭　蕉

は、「山里は萬歳おそし」といふ情景と、梅の花との間に言葉が伏せてあり、そこで一句が同じ十七字を以てしても單純となり複雜となるのである。發句は「もの二つ三つ取り集めて作るもの」ではないが、この二つの概念の繋ぎ合せは有効な手段だつたので、もつと熱心にこれを說いてもよかつた譯であるが、何となくこれを狐疑したり朝令暮改してゐるやうに見られるのである。

芭蕉に於ける中世的なものと近世的なもの

芭蕉が俳諧によつて表現せんと庶幾したところのものは、「幽玄」といふ中世的な藝術理念であつて、彼の評語や指導理論からこの語を抽出することは容易である。卽ち延寶八年の『田舍之句合』には「德利狂人いたはしや花故にこそ」といふ農夫の句と、「櫻狩今日は目黑のしるべせよ」といふ野人の句との判詞に

德利を抱いて花に戯るゝ狂人深切なり。また目黑が原の遠の櫻尤も優し。上野谷中の櫻を見盡したる體、言葉の外に現はれたり。兩句幽玄差別なし

といひ、貞享三年の『初懷紙』では其角の「日の春をさすがに鶴の歩みかな」に對して

元朝の日の華やかに射し出でゝ長閑に幽玄なる景色を鶴の歩みに掛けて云ひ連らね侍る。

と云つてゐる。こゝにいふ中世的な「幽玄」とは「自然の風物の幽遠靜寂な點を含む如くでもあるか、主として主觀的觀想と、それに伴ふ情緒その表現法、その歌調の優婉閑寂な點」(岡崎義惠氏『日本文藝學』)であつて、俊成が和歌に理想としたところはこれである。然しいふまでもなく同じ理念も時代々々によつて、またそれをうけつぐ人によつて同じものにはならない。芭蕉が考へてゐた幽玄もその通りで、先に擧げた句の評語にそれが明らかなる如く、元祿といふ時代の華やかさの影響を著しく受けてをり、それを優艶と「言外餘情」といふ點で幽玄に結びつけてゐるらしく見られる。そしてこれは彼の句に可なり明瞭に見られるやうである。

原中やものにもつかず揚雲雀
猫の戀やむとき閨の朧月
入かゝる日も糸遊の名殘かな
枯芝やまだ陽炎も一二寸
さみだれの降りのこしてや光堂

幽玄なる語が元來老子の「玄之又玄」より出で、道家の說をとり入れて成り立つたものであることは既に明らかである。芭蕉は田中桐江に莊子を聽いたといふことで

あるがこれはいつ頃の事か明らかでないにしても、かうした教養がこの幽玄といふことを感得せしめたものであらうと想像出來る。然し當時の彼は未だこの老莊の說をたゞ藝術上にのみとり入れ、處世上に應用することは考へてゐなかつたらしい。處世上老莊的に考へるやうになつたのは十一月號に記したやうにその晩年である。

次に問題になるのは「さびしをり」といふことである。これについても芭蕉は不易流行と同じく少しも語つてゐないので、弟子達の言葉をつなぎ合して見てゆくほかはない。これは「さび」とは淋しいといふことゝ紛れ易いが、さうでなく

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰。さび色よくあらはれたり(『去來抄』)

といふ芭蕉の評語に去來は說明を加へ

――去來曰。「さび」は句の色なり。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば、老人の甲冑を體し戰場に働き、錦繡を飾り御宴に侍りても、老の姿ある如し。賑やかなる句にも、靜かなる句にも、あるものなり。――

と云つてゐる。又許六は「贈落柿舍去來書」の中で

また予が年やう〳〵四十二、血氣いまだおとろへず尤句のふり花やかに見ゆらん。しかれども老の來るにしたがひさびしほりたる句おのづからもとめずして出べし――

と述べてゐる。この去來と許六の言葉を綜合すると花やかさをも賑やかさをも料理しながら、その料理の仕方に「さび」が現はれてゐなければならぬといふものゝやうである。「しをり」とは許六が

十團子も小粒になりぬ秋の風

の自句に對して芭蕉が、「この句しをりあり」と云つたと述べてをり、又土芳は『赤冊子』で

冬空のあれになりたる北颪

旅の馳走に有明し置

について「馳走の字さび有、あれになりたると心のしほりに旅亭のさびを付て寄るなり」と云ふ評語を記してゐる。許六の句は、宇都谷峠の入口で賣つてゐる名物の十團子も秋風の吹きそめた或る時、それが小さくなつて來た事を發見した。そこに此の山で暮しを立てゝゐる人達の生活が、山と共に寂寥たるものになつて行く情景を言外にあらはしたところにしをりがあり「旅の馳走」の附句は、冬空の荒天となつて凄まじき威力をもつて人間に迫る時、その下の一旅亭に、せめてもと旅亭の人の心やりで置いて行つた一燈を命と賴んで蹲まつてゐる情景を附けたところにさびがあり、それは「荒れになりたる」をしをりとして附けたものであるといふので、これによ

つて見れば、人間の生活が自然の威迫をうけつゝ、その下にさゝやかに生命を保つてゆくことに崇高を感じる如きものがさび、しをりであるとなすものらしい。こゝに芭蕉によつて自然として意識されたものは無意識的には父、主君、師その他による畏怖がコムプレクスされたもので、この內に向つた彼の理想我に彼の自我が畏怖しつゝあつたことのあらはれであつて、彼がその畏怖に堪へてゆくことを贖罪と考へてゐた思想が藝術的指標となつたものらしい。こゝで思ひ起すのは、彼に「古き世を偲びて」と前置があつて

　霜の後撫子咲ける火桶かな

といふ句のあることである。この句の撫子は俊成の「霜さゆるあしたの原の冬枯れに一もと咲けるやまとなでしこ」より出で、その詞書の「古き世をしのびて」といふのは、昔俊成卿が寒き夜の冴え果てたるに白き淨衣のすゝけたるを着て、桐火桶を抱き、閑疎として歌を詠んださまを思ひ出て、芭蕉自らも今時を隔てゝ火桶を抱き句を案じつゝ、そゞろに昔に通ふあるものを考へてゐたのであらう。さびとかしをりとかいふ評語は彼の造つたものであるけれども、其基は俊成、定家などが歌道に庶幾したところのものと同じであり、岡崎義惠氏に從へば「人間に於ける動物的生命力の最大限度に弱められしをられ、肉體的慾望の最大限度に細められ、厭せられ總て水々しい生命の若さより來る華やかなもの、膏膩の香高きものゝ、最大限度に吹消された處に生ずる。消極的なものゝ持つ一種の崇高さである。」（同氏『日本文藝學』）卽ち芭蕉が「さび」ありと評した前記の連句の、自然が威力を逞しうする下で、一穗の灯火を唯一の賴みに一夜を不安に戰きつゝ過す旅人の姿は、自我を滅した世界の象徵であつて、これに芭蕉がさびしをりが備つてゐると評したのは、彼のいふさびしをりなるものが、彼の自我が理想我によつて脅かされつゝある心理で、それがマゾヒスティッシュな彼の心に快感を與へたものに外ならないのである。卽ち芭蕉にとつて自然は超自我の一部でありそれに脅かされることは、彼の父母に對する罪障感の反復强迫であつて、彼にはその威迫に堪へて縮まつた生活を送ることがその贖罪と考へられたのである。そしてそのマゾヒスムスがまた中世に指標を求めるやうになつたのであらうと考へられる。何故なら俊成、定家は歌道によつて公家に依存し華やかな生活をした家に生れて來たのであるが、武家の擡頭によつてその位置は脅かされつゝあり、俊成、定家共にその生活は窮迫を極めてゐた。彼らが大いなる力に生命を絶たれんとする崇高に美を求めたことは、その現實に於て武家のサディスムスに

威迫されつゝあつたことの象徴であり、恰もそれが芭蕉の對自然の畏怖と似たものがあるからである。この芭蕉の中世主義は、彼を絶對視し只管偶像化さんとする一聯の人々の中にも、是としない人もあるので、例へば山本善太郎氏の「蕉風成立の基本問題」（岩波『文學』第六卷第四號」の中にそれが見られるし、斯ういふ觀方をする人は山本氏一人ではないと考へられる。彼の偶像化せんとする人といへども、芭蕉に對する超人間的優越性（この心理は自己を卑少に觀る劣等感から起る。）を拋棄するならば、正當な芭蕉の位置といふものが明らかになるにちがひないのである。

以上で芭蕉の中世思慕が歴史的に存在意義をもつものでないことがほゞ明らかなつたが、時代がこの種の傾向を歡迎する事はむろんあり得ず、芭蕉がまたさういふ世の好尚を知らない筈もないので、彼は一面さういふ境に入りながらもなほその連句に見る如き華やかさをも表現したのである。（芭蕉の華やかな方面、戀、愛の句における多樣性は次號において述べる豫定である。）この方面の彼が、母の俤によつて行動されてゐることは、疑ふ餘地がなくそこに實證されるのであるが、この二面性はやがて芭蕉の現實と理想との兩面でもあるわけである。彼が夷狄、鳥獸の名のもとに自分で自由にならぬ或るもの（エス）を斥けつゝもなほ愛慾に對して寛容的な態度をとらなければならなかつた事實は次號に述べる筈であるが、それは理想に對する現實の勝利、超人間的なものに對する人間性の勝利でしかなかつたのである。そしてそれが芭蕉の過去に負ふところであつたことは、次號で立證する。

彼の幽玄の唱道は、先に述べたやうに『田舍之句合』『春の日』に見えてゐる。しかし彼によつて幽玄と評された句を見ればわかるやうに、それは中世的な意味のそれとは明らかに異つてゐる。初期の彼の句にはさびとか細みとかいふものは少しも見られず、それが作品にあらはれたのは貞享元年以後であらう。これは一般にもさう認められてゐるらしく、荻原井泉水氏はその著『芭蕉を尋ねて』の中で左のやうに云つて居られる。

芭蕉一代の俳句を見ると、延寶、天和の以前のものと貞享、元祿以後のものとは截然として違つてゐる。即ち貞享元年が丁度その回轉期となつてゐる――

また島田青峰氏も『芭蕉名句評釋』でこの年の『野ざらし紀行』のことに觸れ、

――旅中の實感より得來る句は、次第に從前の句と違ふ色彩を帶び來り、烟霞の癖は漸く芭蕉の身を離れ難くなりつゝあるやうに見えます。

と云はれてゐる。さうしてこの轉回をなさしめたものが、この貞享元年の前年たる天和三年の母の死を契機とするものであることは、次回にも更に詳述する筈であるが、斯く中世的なものも概ねこの年以後に見られる傾向であるのを見ても、井泉水氏其他によつて指摘せられた轉機と中世への思慕が密接不離のものであることも凡そ推測が出來るやうである。試みに云つて見れば、現實の生活苦を抽出し去つた美しい幻影であり、その幻影の中に自らを遁走させることであつた。この彼の懷古コムプレクスをよくあらはしてゐると見られる句、

　寔に／＼此世の極樂といふは外にあらず御所のことになむ此四五日以前上京にありて御所の中を通りければおりふし雨ふりて心靜にいと有がたく殿／＼の紅梅今をさかりと見へ申候音樂さても／＼面白くそゞろに涙をながして通り侍りければ

　紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

は、眞僞になほ再考すべき點があるやうに史家に見られてゐるが、たとへ僞書としても彼の心理を描出し得てゐるものといふべきであらう。（この心理は、次號「芭蕉と性愛」に述べる筈である芭蕉の藤堂家出仕時代の行動と照し合はせる時、何ゆゑに彼が「見ぬ戀つくる」とまで幻影を濃厚化したかゞ一層はつきりするやうである。）

　以上の懷古コムプレクスは、芭蕉の罪障感の原因に關係するところがあり、又その性格がマゾヒスティッシュであつたことを證據立てゝゐる。彼が自らの弱さを補強するための老莊的なものゝ取入れも、その弱さを高く見ようとする理窟づけにすぎなかつたらう。（幽玄といふ中世的な標語が老子から出たことは先に述べた。）

　芭蕉は決して大衆から遊離した理論を唱へてはゐない。彼は德川中期の社會を意識し、大衆への働きかけを念慮においてゐた。此時代は既に云はれてゐるやうに、町人階級が既往の社會からの分離を示し初めた時である。されば芭蕉も曾ては仕官懸命の地を羨んだ身であつたが、町人の中に入つてその藝術を完成させたのである。たゞ芭蕉の出身とその教養とがほんとうの意味で町人のものとはなり得なかつたゞけである。芭蕉は廣く號令するやうな質ではなかつたけれども、その組織方面ではこの社會情勢に無關心ではゐられず、町人の參加を無視出來なかつたゝめに、彼の俳論の中にはこれに應ずる準備が出來てゐた。彼は「和歌優美、俳諧自由」（『去來抄』）といひ、又「詩歌連俳はともに風雅なり、上三のものは餘すところも、その餘す所迄俳はいたらずと云所なし」（『白冊子』）と云つたのも彼であるらしい。發句では彼は自然をヨリ多くとりあげたが、連句では人事を好ん

で詠み、そしてその中では詩歌にとりあげられぬ庶民の間の美をとり上げた。それは恐らく彼が郷里に於て、或は青年時代京都遊學中になした遊蕩生活が土臺になつてをり、それの昇華されたものであらうが、芭蕉が近松、西鶴と並んで元祿の三文豪なる名を贏ち得たのはかゝる時代的意義によるものあらう。

嘗て倉橋久雄氏は本誌で芭蕉が笛を好んだことに着目され、笛は彼の指導癖の象徴であると云はれた。これは分析學徒でなくては云へない面白い言であると思ふ。青年時代から知識人たる誇負のあつた芭蕉である。現實に支配し得なかつた人々を、この俳諧といふ具によつて操縦して見ようといふ無意識の願望が、なかつたといふよりあつたといふ方が眞に近いだらう。そしてのちには、それらの背反により「ひとり住むほど面白きはなし」といふ心境に達したことゝ思はれる。芭蕉の支配本能は強くなく、その指導ぶりにも號令的なところが見えなかつたのは、自我の破壞本能が常に外に向はずして內に向ひ、從つてそれの變形とも見られる支配慾も強くなかつたのであらう。

私は嘗て現代の俳句結社を論じて主宰者がその主權を確保する唯一の手段は、組織をもつ點と、主宰者としての神秘性の保持にあると云つた。(『現代俳句』昭和十一年一月號)もとより當時は分析學を知らなかつたが、今これを顧ると、この神秘性の保持といふことは、フロイドが指導者の卓越性と云つてゐる言葉とほゞ同じものであるのに氣がついた。指導者を指導者として成員個々に仰がしめるには、何か指導者が他に比してすぐれてゐるといふことを成員に信じ込ませなければならぬ。その卓越性の神秘の靄が晴れてしまふと、指導者と雖も結局成員個々と變りはないといふことになり、「とつて代る」エディポス的願望を起す基になる。この點で現代の指導者たちがそれ〴〵の雜誌で選句を擔當し、その神秘的卓越性を保持してゐることは賢明な策であるといへる。かういふところから見ると、芭蕉はあまりに正直すぎて氣の毒な感じがする人である。彼は自分の持つてゐるものを槪ね門下に傳へてしまふと、彼らは何だ、敎へてくれるものはそれだけかといふやうに彼に叛逆してゐるのである。或は芭蕉はもつと神秘性を保持してゐたかつたのかも知れぬが、指導者としてさうも行かなかつたのかとも思へる。いづれにしても右の事實は、芭蕉にとつて悲劇たると同時に、同じやうな集團に首領となる者にとつても、永遠に解消しがたき悲劇であると云つてよい。私は芭蕉を偶像視するものではないが、其角、荷兮、野水越人、凡兆らが芭蕉に優つてゐないことは斷言しうると

思ふ。しかも彼らが自ら「芭蕉たるべし」と誤認したことは、俳諧そのものゝ性質がアマチュア的であるからであり、模倣によつて或る程度芭蕉らしく擬裝することも可能であるからであらう。

實作の上においても、初期においては芭蕉は連句に發句に、俳文に、創作の範を示してゐる。彼が附合に身ぶりを以て土器を碎く眞似、太刀に反りをかくる眞似をし、又凡兆の烏の俳文を評價したりしたのは、さういふ指導者としての用意であつたらう。しかし啓蒙的な段階を過ぎて、門下がそれ〴〵獨立して創作が出來るやうになるとかうした範例は要らなくなる。彼が指導者として有してゐた神秘的に見られてゐた創作力は、實は神秘的なものではなかつたことがわかるに從つて、この方面からもエディポス的願望の發生を可能ならしめる。

藝術家と觀賞者大衆とを繋ぐものは、藝術家が觀賞者大衆の感情を代表し、その空想を藝術に表現するところにある。だから芭蕉は德川中期の世相をとり入れてその藝術に庶民悅樂の感情を披瀝したのである。しかし元來俳諧といふ狹範圍の文學では、作者を離れた單なる觀賞者はあり得ないので、これを觀賞するものは當該作者もしくは作者仲間を出でないことになる。換言すれば讀者層を廣汎にもたないといふことである。西鶴が俳諧を捨てゝ小說に走つたのも、いろ〳〵理由はあらうが、より多い讀者をもつことが利益であつたからにもよることはいふまでもない。然し俳諧は、その限られた詩型からして無際限に複雜になりえない。たとへば連句の附合における飛躍、發句のとり合せの飛躍を最極限に果してもその效果は知れたものである。だから初期には觀賞者大衆の感情を代表してゐた芭蕉の文學も、漸く行き詰りが見えて來ざるを得なくなる。これは芭蕉の場合のみではない。貞德、談林等でも、それが行詰りの早かつたのはかうした關係に基づくものと考へられる。さうしてその最高峰を示す作品といへども、これを模倣する上においては難くないといふことになり、指導者の卓越性の神秘は破れざるをえなくなり、こゝからも亦エディポス的願望が起ることになる。

今や私は本稿の示す主題の結論をしなければならなくなつた。蕉門の背反は明らかにその組織の特殊性にあり、その初めは群居本能によつて集まつたものが、その意外なる擴大によつて分散本能を生じ、それが離散の兆を示したものであるが、それがエディポス的願望によつて促進されたことは先に述べたところで明らかである。然るにも拘らず芭蕉のマゾヒスティッシュな性格は、背反者たちにも憎惡を以て對せず、彼らに腰を屈してその機

嫌をうかゞふかの如き態度をとるに至つた。これは彼がさうすることによつてその罪障感の滿足を得んとしたがためである。即ち芭蕉こそは罪障感的マゾヒストなる名を以て呼んでも差支へなき典型的人物であると思ふ。然しそれにもかゝはらずなほ門下が芭蕉を克せんとした事實は蔽ふべからざるものがあり、このエディポス的なものはその集團と共にその根を生じてをり、實に「集團惡」と云つて差支へなく、「さればこそこれを知つた芭蕉が「ひとりにな」らんことを希うたものであつたのだ。

然しながら今人を集め、もしくは集まらうとする時、後年の離散や背反を豫期するものがあらうか？ 人の集團をなすのは人の群居本能から發して、後には同じ「道」同じ「趣味」同じ「鄕里」同じ「職業」同じ「民族」同じ「國民」「藩家」「庭等」を以て集合するものであつて以上のいづれかの集團に屬せざる人間は全くないのである。而してその集團には首領あり成員があつて、大同小異の心理機制を生ぜしめ、したがつて多くはエディポス的な願望を成員に生ぜしめるに至るのである。これは大は國家より小は家庭に至る迄の多くの集團を個々に觀察してゆけば、どの集團にも見られるところのもので、その根原は首領と成員とのリビドーの關係にある。即ち成員個々は首領からリビドーの纒綿をうけるのだが、首領から彼らは一樣に愛してもらひたい願望をもつてゐる。然し前にも述べたやうに全部を愛するといふことゝ、全部を愛さぬといふことゝは結局同じものとなるので、首領のリビドー獨占の欲求が起り、又一方成員間にも、その成員の規模が大きければ大きい程、ヨリ小さな群に集る習癖を生ずる。これは大きな群より小さな群の方がリビドーが相互に濃厚だからである。そしてそこに相互に面白からぬ心理が生ずることゝなるのであらう。

もちろんかゝる群居本能、ヨリ濃厚なリビドーの相互纒綿は畢竟次第に薄れてゆく運命にあるものと見てよからう。たとへば愛鄕心とか鄕里の人と睦み合ふとかいふ心理も、遠國の人程盛んで、永く都會に住んでゐるものはそれ程ではないといふ事實は、それを證してあまりがある。これを蕉門の場合に見ても、武士出身の去來、丈草等は芭蕉と永久に親密の關係を持續する如く見られたが、町人出身のものは多く背反者として數へられるに至つた事實の中にそれを見ることが出來る。然し鄕黨、師弟の關係は消滅しても、また異つた種類のリビドー纒綿・が集團內に派生し來ることは豫測し得られるので、とにかく集團をつくること自體が厄介なことの種である。そこで芭蕉が獨り住むほど面白きはなしと云つた言葉の眞意味がはつきりするやうに感じられるのである。

ヂオヴァンニ・セガンチイニ

精神分析的研究（カール・アブラハム）

岩倉具榮 譯

四、作品に現れたる母への相反並存性

セガンチイニは欲する限りの力を以て、光と色を支配することが出來た。かくてブリアンツァで彼をあんなに屢々捕へたものと同じ性質の勝利の喜びが悲哀の氣分の中に混じり始めた。この樣に突然の變化が繰返されたその內部的理由は確かには分らない。併し乍ら人間の一般的經驗の力に就いては幾らか推測することが出來よう。

二つの極端な氣分の間に低迷することは、神經症患者の內的苦鬪の作用について知りぬいてゐる吾々としてはよく分る。相葛藤する慾望を調和的に適合させることは出來ない。若しも一つの慾望が心の意識面で勝利を占めると、無意識に押込められてゐる反對の慾望は穩かではない。

それは神經症的な代償形成として、變裝して意識面へと近づいて行く。例へば、若しも男性的活動が優勢で、神經症者に特有な衝動性で、それ自身を押付けようとすると、同じ瞬間に反對の抑壓されたものが意識面にそれ自身を感ぜしめようとする衝動が存在する。憂鬱は勝利の感情と混合してゐる。

セガンチイニの場合にはもう一つの原因があると考へられねばならない。全精力を盡して彼はその美術上の技法を自己教育により完成し、自然から色と光の秘密を探り取つたのであつた。望んだ決勝點へ達した時に、緊張は急に弛んだ。この樣な成就は昇華せる本能に依つて可能となつたのであるが、その本能は決勝點の直前で急に去つてしまつた。それは新しい決勝點、新しい擴大を求めた。何故なら初めの成功によつてそれは更に增長して

來たからだ。この樣な要求がすぐに滿足されないと、その人の氣持は重くなづて來る。彼は何となく貧弱になつたやうに感じ——希望が一層乏しくなつた樣に思ひ、勝利の喜びは憂鬱的な失望に屈服するやうになる。

「もの憂き時」はセガンチイニがこの樣な氣分で描いた最初の繪の題である。それは以前のものとは著しい對照をなしてゐる。こゝにも亦人はたそがれの光を見出す。

「石のゴロゴロした野原に一人の若い百姓の娘が夕方の光を受けて坐り、ふるへつゝ、ものうげな思ひに沈んでゐる。そして彼女の前には煙の出てゐる小さな釜がいぶつてゐる赤い火の上にかゝつてゐる。彼女の向ふ側には首を低くのばして、斑の牛が立つてゐる。」（セルヴェス）繪の調子は絶望的な淋しさである。併しその方向のある直線によつてこの美術家はすぐれた手法で人間、動物、及び風景をお互ひに密接に結合させてゐる。觀る人は結局、この繪で何となく慰められるのを感ずる樣に思ふ。彼が自然と一つであることを感じてゐる限り、人は決して見捨てられない。それこそ、父として心配してくれる人格的な神を全く知らなかつたとの美術家の信條であつた。

この繪を完成してからのちに、セガンチイニは間もなく孤獨に引き付けられる樣に感じた。それでその繪が如何にこの美術家の內奧の感情から出てゐるかゞ分ると思ふ。サヴォニンの上、遙けきトッサーンの小村に、彼は自分の氣分に適した孤獨の場所を見出した。一八九三年の夏の間、そこの小さい小屋で彼は生活した。彼は澤山のアルプスの植物にかこまれつゝ、光りと色を大いに樂しむことが出來た。それだのに彼は却つて、立派な草も花もない高い丘の峰近くで何時間も過すことさへあつた。彼はこの荒野を描き、そこに草食む羊の小さい一群を描き添へた。

「悲しげな羊飼がそこに坐つてゐる。彼は未だほんの子供であるのに、老人の樣に疲れ切つてゐる。彼の顏は、赤く日に燒けて、まどろみつゝ前に垂れ、手は弱々しくものうげに股の上に横はつてゐる。高い所へ行く程。その光景は益々灰色に、黑くなつてゐる。」（セルヴェス）この繪は『アルプスの牧場』といふ題である。その凡ゆる筆觸にブリアンツア期を思ひ出させるものがある。アルプス牧場の悲しげな淋しさの中でセガンチイニはたつた一つの慰めを見出してゐる。自然が乾いた草の葉の少しきりしかを生物に與へてゐない所で、母性はその凡ゆる偉大さを示してゐる。繪の前方に羊が二匹の小羊に乳をのませてゐる所を、彼は描いてゐる。母の愛——をこの畫は象徴するものだが——こそは、人にとつても動物に

とつても、彼等が孤獨である時に、一番確かな隱れ家である。

一八九〇年から一八九三年の間に彼は『涅槃の繪』といふ名前を與へられた一組の繪を作つた。再び、セガンチイニは今迄度々さうした樣に、幾度も變へて同じ想を描いた。今リバプール美術館にある『奢侈逸樂の徒の地獄』と題する一聯の畫の最初のもの及び、ヴヰンの近代美術館にある『惡い母』と云ふ題の最後のものは、美術的見地から云つて、この畫家の最大の作品に屬する。併しその內容といふ見地から見て、『奢侈逸樂の徒の地獄』は特に大きな反對に遭遇した。何故なら、この繪は理解されなかつたからだ。そしていろ〳〵試みて見たにも拘らず、この畫を完全に說明することの不可能であるのが分つた。このことはセガンチイニの藝術が長い間本當に重大なものとして評價されてゐた時にも同樣であつた。說明を要する繪の――そんなものは今迄彼はかつて描いたことはなかつた。彼の初期の作品、例へば母の愛の繪は、凡ゆる人の心に明白な單純な言葉を語つた。之等の繪の謎は今日でさへ完全には分らないのである。精神分析學はその秘密をあばくことが出來るであらうか。

セガンチイニが『修奢逸樂の徒』の構想を佛教神話から得たといふことを、吾々は知つてゐる。母性の務めを盡さないで肉慾に命を捧げる女達は、死後に雪の荒野に休みなくさまよふべく罰せられるといふ敎說を彼が見出したのは、佛敎神話に於いてゞあつた。それ故、彼はそこでは殆ど眼を休めることが出來ないほどの、果てしのない雪野原を描いた。その前方には暗い連山があり、後方には輝くばかりに白い山々が連なつてゐる。この荒れ果てた地表には死體の樣な動かない女の姿が幽靈の樣に浮んでゐた。

『惡い母』の後年の別作では前方にさまよふ女の姿を見せ、その髮の毛は木の低い枝にからみ付いてゐる「彼女の體の彎曲の全部は悲しみ泣くものゝ如く、その開いた腕は力なく絕望し、木にからまつてとけ引つる樣な髮は自殺の苦悶の如く、又死の樣に蒼白い顏はゆがんだ口と沈んだ眼をして、後悔する者の引裂く如き苦しみの樣である。併し子供の求め渴く首が、母の裸の冷い、愛情の缺乏に乾上つてゐる胸の上に垂れかゝつてゐるのは、これを見る者に恐ろしい効果を與へる。」(セルヴヱス)この作には子供の姿が加へられ、母親は數人の代りにたつた一人きりしかゐない。遠くには一列の他の懺悔者が雪の上をさまよつてゐるのが見える。(表紙畫參照)

この繪の愛のない母と見棄てられた子供とは、セルヴヱスが指摘してゐる樣に、アルプス牧場に於ける羊の母

子と好個の對照を作つてゐる。アルプス牧場の繪と『惡い母』とは共にトッサーンで作られた。セガンチイニは後に自分で書いた樣に、『奢侈逸樂の徒の地獄』で惡い母達を罰し樣と思つたのだ。何故なら、彼の意見によれば、彼等の生活は自然の最高原則に反對する罪であつたからである。彼が繪を描いてゐた時は何時でも心にこの事を考へてゐたことを、吾々は疑ふことは出來ない。併し同時に彼は、自分の仕事が如何なる本質的な眞の動機から仕上げられたかを全く見過してゐたことを、吾々は確言出來るのである。

常態にせよ變態にせよ、人間空想の凡ゆる所産に於て――フロイドが示した樣に――潜在せる意味とは區別さるべき顯在の意味がある。意識は顯在のものを知るのみである。潜在せる意味は無意識であつて、而もそれは何等かの空想的創造の眞の重要なる內容なのである。それなくしては顯在內容は理解されないのが普通である。精神分析の助けを借りて人は空想的創造の隱れた源へ到達することが出來る。それは抑壓されてゐる慾望傾向を暴露する。その慾望はひどくゆがめられてそれと認められない時にのみ意識へ近づくことが許される。セガンチイニの神秘的な空想作品は、今日でも完全には理解されない。何故なら、それ等の顯在的意味のみが把握せられてゐるのみであるからだ。說明することの六づかしい象徵に依つて表現されてゐるところの、抑壓された慾望を調査研究するのが精神分析の仕事である。

それ等は意識心理とは極めて撞着するところの慾望の深く抑壓された亢奮であつたに違ひない。――それでなければ、セガンチイニはいつものやり方で、明白に簡潔にそれ等を表したであらう。彼は、隱す所なく、惡い女達を罰する目的を達することが出來たのである。事實の點に於いてはもつとよくその目的を達することが出來たのである。何となれば、それ等の畫は分りにくいにも分りにくいのだが、この樣な女の心に印象深く語る目的に於て失敗してゐるからである。

セガンチイニは、吾々が旣に知つた如く、本能生活に於る殘酷性の要素を大變強く抑壓したのであつた。彼の母に對する攻擊的な殘酷な感情は、最初に變形を經驗したものであつた。凡ゆる作品で彼はおだやかで、親切で同情的な己れを示したのであつた。そこで彼は殘酷な罰を彼岸に現して、而もその罰せられてゐる者は母達であつた。こゝに以前の敵意、子供として母に對する死の願望がある。それが抑壓から歸つて來てゐることを吾々は見るのである。『奢侈逸樂の徒の地獄』では數人の人物が空中を辷り行くところが描かれてある。そしてその畫を

觀る者は畫家がそれ等の中の特別の一人を强調しようと望んだといふ印象を受けないのである。併し後年の別作では大變違つてゐる。そこでは彼は、喜びのない孤獨の中で懺悔する一人の女と見棄てられた子供だけを吾々に見つめさせる。セガンチイニ自身がこの樣に見棄てられたのではなかつたか。母の死後の彼の淋しさは恐怖の最初の苦しみを心の中に起させた。一般に惡い母達を罰しようといふ慾望の後ろには、自分の母を罰し、自ら母に復讐しようとする無意識的な慾望が現れてゐる。

セガンチイニが見棄てられたといふ感情の中に苦しんだ凡ゆる恐怖と憂鬱を、彼は懺悔する母へ投射してゐる。惡い母達を孤獨の苦痛に所罰した佛教傳說は、彼の心に同じ衝動を起させた。他のどんな罰も、之等の母達に見棄てられた子供が苦まねばならないことを、この樣にはつきり感じさせることは出來なかつた。

幼兒的性感の全情熱を以て母に固着し、叉母の凡ゆる行動を嫉妬の眼を以て見守る男兒は、一寸でも母が離れると、母に見棄てられた樣に感ずる。彼は競爭者に對して恐怖と嫉妬とを、母に對しては敵意を感ずる。母は出來るだけ澤山の愛を彼に與へることが出來るのに、十分與へないので惡い母だと云ふことになるのだ。大人の神經症者の無意識は――精神分析者の敎へる如く――母がかつて自分よりも父へ澤山の愛を與へたからとて母に復讐することを求める。ある神經症的症狀に於ては、息子がこの不實のため母に對する復讐を晴らす。セガンチイニの『奢侈逸樂の徒の地獄』は自分の母に對する復讐の試みである。

心の冷たい母達が、その冷い心のために罰を受けて雪の荒野に放たれる。その理を解するのは六づかしくない。併し、惡い母達が雪野原を辷り步く理由は、佛教神話に依れば、說明を要するであらう。辷つてゐる女達は永久の不安といふ苦しみを宣告されてゐるのだ、といふ說明は明白である。淋しい地表を無限に單調に動くことは、永久の刑罰といふ印象を强めるために企てられてゐるのだ。

併し神話は、荒れ果てた砂地をいつまでもさまよふ樣な他の象徵を以てこの事を表現することも出來た筈であつた。神話を正確に分析して見ると、他の空想的創造を分析して見る樣に、凡ゆる象徵に嚴密に限界のあるのはその理由のあることが吾々に分る。セガンチイニがこの神話からその想を取り入れたのには特別の理由があつたに違ひない。それでなければ、彼の創造的空想はこの樣な象徵を借りて來る必要がなかつたのである。それ故、母達の罪とその罰の形との間にはもつと深い關係がある

ことを吾々は探さねばならない。

涅槃の繪と同じ時期に作られた、吾が美術家の作品の一つは、この問題の解決の鍵を吾々に與へる。それは既に言及したことのある『異教の神』である。セガンチイニは性愛の女神が空中をただよつてゐる所を表現した。彼女は頭を心地よげに腕に休めて、靜かに浮遊する甘美なる喜びを樂しんでゐる樣に見える。そして同時に聖母の樣な『キリスト教の神』は夢中になつて吾兒のことを幸福さうに考へつゝ、靜かに坐つてゐる。

最初に、吾々は同じ動きがこの美術家の繪の一つでは極度の喜びを、他の繪では、極度の苦痛を表現してゐるといふ驚くべき事實に面する。併しこの逆說は精神分析者には、屢々出會すのでよく分つてゐるものである。夢の中で、空中に浮ぶことはある時は極めて愉快な感情として經驗され、ある時は恐しい經驗となることを分析者は知つてゐる。

多くの人はその幼時に空中をすべり通つた時に最初の官能を感じたのをハツキリと思出すことが出來る。之はブランコに乘つたり高い所から飛下りる時や、その他子供が遊んでゐる多くの運動中に起る。之等は幼兒の自己性感の表現であり、即ち、普通の大人の性行爲の場合の樣に、相手の人間が加はらないで、肉體の刺戟により産出される喜びの感情である。多くの子供はこの樣な活動をして飽くことを知らない。心配な緊張の感情は屢々快樂と關聯してゐる。フロイドの探究はこの恐怖が慾望の抑壓に起源することを吾々に教へた。

慾望の抑壓された傾向は夢の中に逃げ込み現はれる。自己性感が既に大なる抑壓に屈した時期には、多くの人多分凡ての大人は、空中を飛んだり、深い所に落込んだり、そんな風な運動をしたりする夢を見る。之等の夢の中の感情の調子は――抑壓の程度によつて――快樂と苦痛の間を上下し、又兩者の混合でもある。こゝに吾々は最高の喜びが突然極度の困惑に變化するのを見る。

夢の象徵は無意識からの象徵である。それ故空想の凡ゆる創造――美術家の作品も國民の神話も同樣に――と共通してゐる。之ることの象徵的意味は今やセガンチイニに於て諒解される。『異教の神』は制限なく空中を辷る甘い喜びに沒頭してゐる。惡い母達は、『キリスト教の神』の母性の理想を眞似ないで、この異教の女神の例と一致して行動したのである。セガンチイニは無意識に之によつて母を叱責したといふことを吾々は知る。彼は云はゞ、次の如く彼女に叫ぶ、「あなたは性愛でお父さんに執着してゐたが、私には何もくれなかつた！」彼はこの繪の根本を形造る殘酷な空想で、抑壓されてゐる復讐

の慾望を滿足させてゐる。斯ることによつて表現されてゐる極度の肉慾の樂しみは母達（彼の母）にとつて死後に奢侈逸樂の徒の地獄で苦まねばならぬ最も恐しい苦痛となる。彼等にとつて、それは絶えざる拷問の刑罰である。吾々自身が空間中におちると信ずる夢の中の二三秒は吾々には永遠の樣に思はれる！

　セガンチイニが之等神秘的象徴的の繪を描いた時期の間、彼はその眼を內部に向けてゐたといふことは非常に注意すべきことである。彼の孤獨への逃避そのものが外部世界から身を引く傾向の證明となつてゐる。彼の藝術は幻覺的空想的となつた。併し或る人が現實に背を向ければ向ける程、抑壓されてゐる慾望の空想的滿足を現實の代りにすればする程、他人は彼を諒解出來なくなる。彼の表現は彼自らが感じたのと同じ響きを吾々に傳へることは出來ない。丁度この樣なことがセガンチイニに起つたのであつた。

　自分の思想を自由に表現せずして、而もそれを全く隱し度くもない人は、象徴によつてそれを傳へる。象徴は事物を示し同時にそれを假裝せしめる。ある時は一つの傾向が支配し又ある時はもう一つの傾向が支配する。涅槃の繪の神秘的言葉はセガンチイニの最も深いコムプレクスがそれ等を表現する手段を求めたことを示し、又この美術家は慾望に屈したけれども、終に抑壓の力は作品の內奥の意味を假裝せしめる程强かつたことを示してゐる。

　セガンチイニは之等の繪の最初のもの『奢侈逸樂の徒の地獄』が、世の中に發表されるのを許し、それが理解されるかされないかは心配しなかつた。このことこそはその當時彼が如何に現實から離れ、自身のコムプレクスにのみ調子を合せてゐたかを示すものである。この點に於て、尙一層驚くべきことは、斯る女の姿を現すのに、セガンチイニは現實、卽ち自然の法則を破つたといふ事實である。セルヴェスが云つてゐる如く、「奢侈逸樂の徒がまるで見えないクツションの床にゐる樣に空中に横つてゐる所を彼はハツキリ描いた。そして幽靈の姿としては彼はそれを餘りに肥つて、餘りに肉體的に描いたのである。」之迄友達のビットーレ・グルービチー（Vittore Grubicy）の忠告と批評を受入れてゐた彼は、今やその意見を表現するに當つて烈しい情熱に飛込み、又その後でさへ全く忘れることは出來ないのである。（未完）

岩倉具榮譯　（定價送料共一圓八十錢）

理想の家族（マンスフィールド珠玉短篇集）

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイド）

宮田齊譯

　此等の發達障害を發育不全の治療に專ら從ふ精神分析者は、教育をその最も悪い側面から知るやうになるのであります。一體、教育といふものは大砲で雀を射つやうな眞似をしてゐる。そんな事をやるよりか、子供部屋では適宜に禮儀や作法に就て割引をしてやつて、撮喰ひのしたい兒には撮喰ひをさせるがよし、父親氣取りでゐたい者には勝手に妄想させるがよし、また裸になりたいのには裸體を、性器を弄びたい兒にはその遊戯を、自由にやらせたらよいではないか。一體、幼兒期の快感行爲なるものが、所謂良い教育の齎す諸々の損害に比較して、將してそれ程特殊な重要性をもつてゐたものなのだらうか。例へば、教育の結果、兒童の人格內に分裂が生ずることや、その個性の一部分が排他的になることや、また愛する力が削減されて了ふ結果、生きる悦びを味ふことも活動することも、出來ない人間が出來上るといふやうな事實と比較してみるとき、將してどれだけの意味があるのか。

　此の樣な疑問をもつ分析者は、結局、先づ自分だけは少くともこんな眞似はすまい。自分の子供達はこんな方法で教育するよりは寧ろ自由に放任しておいて、幼い頃から強制を加へて人格的不具者をつくりあげる位なら、成人した曉に聊か我儘者になる方がまだ益しだ。と心得ることでせう。

　と、こんな風に申すと皆樣方は、私の觀方があまり一方に偏してゐるのに驚かれるに相異ありません。が、此の邊で一つ立場を變へて眺めて見る方がよからうと思ひます。扨て、同じ教育でも、從來考へて來たものと全然別な、全く異ふ目的を揭げた見地から之を眺めますと、

大いに趣きを變へて參るものであります。

例へばアウグスト・アイヒホルン（August Aichhorn）がその著『不良少年』（Verwahrloste Jugend）の中に述べてゐるやうな、不良兒を對象とする教育を考へて見ませう。

アイヒホルンによれば、不良兒は、自己を取卷く人間社會の仲間に編入されることに對して反抗するものであつて、本能滿足の衝動を抑制することが出來ず、また性本能のエネルギーを轉じて別の目的、卽ち、社會的により高位に置かれてある目的に向けることが出來ないのであります。そして、社會に一定の標準を與へてゐる諸々の制約を自分に加へることを拒み、また此の共同社會に於て自分の持分となるべき勞働に服することをも拒否するのであります。

斯樣な者に對して、教育的に、或は分析的に働きかけようとする者は、何よりも先に次の如き印象を受けないではゐられません。卽ち彼の幼兒期に於て、先づ外部から本能生活に抑制を與へ、軈てその外部的な抑制を徐々に彼の內面生活に同化させて行くやうな力が與へられてゐなかつたのは洵に遺憾だといふことであります。

茲に一例として、一時ウィーンの少年審判所の厄介になつてゐた或る少女を取上げて見ませう。當時八歲であつた此の兒は、家庭でも學校でも持餘し者でした。どんな教育機關に託して見ても、何處の養護所に預けて見ても三日も經たぬうちにアッサリ兩親の手許に戻されて了ひます。勉强は一切しないし、他の子供達と一緒になつて働くこともしない。その上、愚鈍の風を裝ふことが極めて上手で、大概の所では知能的に缺陷があると診斷される始末。授業時間中には教室の腰掛の上に寢轉んで性器を弄んで居つて、これを妨げようとすれば大聲で喚きたてるものだから大人の方が閉口して引退つて了ふ有樣でした。兩親は外に手の下しやうもないと考へたものと見えて、家庭では此の兒を唯々虐待してばかりゐたのでした。處で、分析的に此の少女を觀察して見た結果、次のやうな二つの事實が判明いたしました。先づ第一に、此の子供が周圍の人々との間にもつ感情的なつながりの發達を促す上には外部の情勢が洵に不都合だつたといふことが明になつたのであります。自己の肉體に依つて快感を得る行爲を放棄して了つたために生ずる快樂の損失を埋合せてやるだけの愛情の倍償ともいふべきものはどの方角からも彼女には與へられなかつたのでした。また兩親が頻りに處罰を加へて見ても、彼等の期待するやうな抑制的効果などは一向に現はれず、却つて此の少女は——素質的にか、それとも幼兒期に於ける何か重要な體驗

によるものかは判然としてゐませんが——強度のマゾヒズムに陷つてゐて、懲罰を加へれば加へる程、それが逆に性的興奮と性的行爲への刺戟になる、といふことも明かになつて來たのであります。此の不良兒の例を前にお話しておいた種々の發育障害の實例と比較してごらんになると、此の兒もやはり、自由な、一人前に纒つた人間にはなれなかつたのだといふことがお分りになると思ひます。彼女は、道德的發育と共に精神的發育をも停止じて了つた小さな脅かされた。獸の如きものに過ぎなくなつて了つたのであります。

また同じ書物の中でアイヒホルンはもう一つの著しい不良化の例を擧げて居ります。これは、六歳の頃以來何年となく自分の母親から總ゆる種類の性的快樂を得て來た男の子ですが、成熟してからは彼女と本格的な性的交渉を結び、遂に彼と同年輩の少年達が纔かに空想の裡に描き得るに過ぎなかつたことを、現實に獲得しおほせたわけなのであります。が、扨て、前に申したやうな所謂教育なるものが齎す面白くない結果を思ひ合せて、此の兒は嘸かにし、統一のとれた、活力の充ちみちた男性になつたであらうと思ふと事實はさうでない。彼の發育過程には謂はゞ一種の短路*ともいふべき現象が起つたのであります。

* Kurzschluss; short-circuit 電氣技術上の用語である。

即ち、早くから願望を充足することの出來た彼は、まはりくどい成長の經路を省略して了つた。つまり。父親にのみ許された快感行爲の機會を得たいばかりに、自分が父親になりたいといふ「一般の子供達のもつ」願望は彼にとつては用のないものになつたのです。その爲に彼は人格の分裂を免れることは出來たが、その代りに、或る時期以後の發育を不必要なものとして全然停めてしまはなければならなくなつたのであります。

斯樣に御話して參りますと皆樣もすでに御氣付きのことゝ思ひますが、實の所問題は私の申す程困難な狀態にあるわけではございません。抑々發育障害と不良化とは双方共に極端な結果に立ち至つた場合であつて、一方は過剩な抑制の、また一方は一切の抑制の缺除の影響を示すに過ぎないのでありますから、分析の示す諸々の事實の上に樹立さるべき精神分析的教育學の課題は、從つて此等の兩極端の中庸を見出すこと、即ち、兒童の各の年齡に應じて、快感行爲の默認と本能の抑制とを適宜に按配して與へることにあるといふべきなのであります。

處で、本來ならば、此の新しい教育學的分析の方法論を詳細に御紹介申すことが私の皆樣の對する御報告の内容になるべき筈のものかも知れません。が、實は、精神

分析的教育學なるものは今のところ未だ出來上つてゐないのであります。唯僅かに、此の方面に關心をもつ個々の教育者——即ち、先づ自分から分析を受けた結果、自らの本能生活に關して理解し得た事柄を以て直ちに兒童の教育に應用しようとする、人々が存在するに過ぎません。斯樣な次第で、愈々根本の原理が組織され、廣く一般の應用に適するやうな方法が出來上る迄には相當の時日を要するものと思はれるのであります。

とは申しながら、精神分析が教育學に對して僅かに將來の示唆を與へる外には聊の貢献もして居ないと考へて頂いてはなりません。精神分析は實際の仕事に携つてゐる教育者が事とするに値ひしない、寧ろその樣な手長は敬遠して了つて、十年か二十年も經つたころに、一體精神分析の教育的應用はどうなつたかと尋ねた方がよい、等とお考になつては困ります。

精神分析は、今日既に、教育學に對して、三通りの貢献をしてゐると、私は申したいのであります。第一に、既成の教育形式に對する批判の役割を勤めます。次に、精神分析的心理學として、本能・無意識の學説、リビドーの原理を以て、前回の三つの講演によつて皆樣も御承認下さつたやうに、精神分析は教育者の人間に關する認識を擴大し、且又、兒童と成人の教育者達との諸々の複雜した關係に對する理解を深めます。そして最後に、兒童分析、治療方法としては、教育過程に於て兒童に加へられた種々の損傷を治療する役を演ずるのであります。

以上三つの點のうち、第二の點、即ち、意識的行爲の無意識背景を通じての教育局面の解明といふことに就て次に一つの實例を御話し申上げませう。(未完)

大槻憲二著 定價二圓卅錢 送料十二錢

現代日本の社會分析

杉田直樹博士は『科學ペン』誌上で、精神分析學の出現のために、法學も醫學も犯罪學も倫理も道德も婦人問題も、革命的轉換を餘儀なくされたと喝破せられたが、誠に至言である。わが國の文化に於ける右の諸點の革命的轉換を宣言し源動するものは本書である。

春陽堂發行・本研究所取次

經濟界の精神病理

高水力太郎

事業界の景氣の循環を論議する場合に最も普通に用ゐられる術語は「信用」だとか、「不況」だとか、「衝撃」だとか、「マニア」とか、「ヒステリー」とか、「希望」だとか云つて、これ等はみな精神病治療家の日常用ゐる語に外ならない。現に「信用」と云ふのは英語では「コンフイデンス」であつて、これは「確信」とか「自惚」とか云ふ別の精神病理的意味があり、「不況」は「デイプレツシヨン」であつて、これには「沈欝」の精神病學的別義があり、その他「マニア」、「ヒステリー」、「希望」などは純粹に心理學的用語であることは今更申すまでもない。

事實、アメリカの精神病院に於ける最も普通の病氣(即ち躁欝病)は景氣の循環と正に符合する症狀を呈する。その種の患者は幾週間、幾月間、或は幾年間、激しい亢奮狀態を持續する。その期間が過ぎると、今度は沈欝狀態に陷る。その沈欝の最深の狀態に於いては患者は自分の肉體的必要は心を配るに價しないものであるやうに感ずる。

右は經濟界そのものゝ精神病理的傾向に就いて云つたのであるが、また更に經濟界の個々人に就いても同樣のことが云へるのであつて、彼等はやはり他の方面の人々と同じに無意識的な本能感情過程に依つて動いてゐるのである。それ故に精神分析學の最近の發見を知的に把握してゐることが、彼等の職業全體に對して價値あるばかりでなく、また自他の分析に依つて自分の精神狀態を再建しておくことが多くの經濟社會人にとつて價値あることである。近代の社會は多くの激しい危機や不健康な反動が極度に走つてゐる。あらゆる人々の内で經濟界の人々は殊にこのやうな精神的疫病に對して免疫になつてゐ

る必要がある。ところが、事實はその正反對で、彼等の基本的態度が臨床的に屢々見受ける本能感情の變質者に近似してゐる如き人々が、經濟界の仕事に多く携つてゐる。

今日政治界及び經濟界に於いて普通に見られる本能感情上の病症にして精神病界のそれに類似するものはパラノイア（妄想症）と强迫神經症とである。妄想症患者は自分が追跡せられてゐると信じてゐる。さうして他人が自分に害を加へようとしてゐる、と考へてゐるのであるが、その考へは實は自分自身の感情の相手に投出せられたものである。彼等は相手の行爲を時として極端に如何にもありさうな風に想像して説明するのである。パラノイアの對象は特定の人物であることもあるし。或は社會全體、政府、資本家、ユダヤ人、醫者仲間、或はその他何らかの團體を擬人化したものであることもある。パラノイアはドイツのファシズムにもロシアの共産主義にも明かに見られる。またアメリカの政治にも至るところで認められる。

强迫神經症は超過補償の窮極の結果である。罪障感、絶望感、敗北感、無價値感などに堪え得ず、それ等から何とかして遁れようとして、患者たちは超人的な事業を企てようとし、或は非現實的な理想を抱き、或はまたこの世にありもしない立派な重大な模範的人格を描いてそれを自分自身の上に押しつける。これはまたそつくりそのまゝ類似のものが政治界や經濟界に發見せられる。古典的な經濟思想を奉ずる人々は、財産を失くした世界の住民たちが、マルサス經濟學説に基いて、人口の調節を試みなければならないと云ふ風に考へた。この考への中にも一種の被害妄想の痕跡が認められる。

新しい經濟思想を奉ずる人々の間に於いても、强迫神經症は類似の傾向を示し、彼等は一つの型に世界を改造せんために一肌脱がうと氣負込み、世界の氣まぐれな衝動を意識的に統制しようとして宛も神經症者が自分の衝動を支配しようとするのと同じやうなやり方をとるのである。

アメリカの社會經濟狀態は永い間の不況から立直らうとして、今や途方に暮れてゐる。そこには困難や絶望や不確實が行互つてゐるために、人々は御互に反目し合つてゐる。で、經濟界の人々が一般の人々のためになし得る最大の奉仕は彼等自身の本能感情上の盲點を取去るためにあらゆる可能な方法を講ずることでなければならない。經濟界の如何なる人も、彼の眼が自分の本能感情の葛藤のために歪められてゐる限りは、社會問題に對して健全な、客觀的態度をとることは出來ない、經濟學が人

間の行動の學問であるべきならば、まづ經濟學者や經濟界の人々がその本能感情を分析的によく教育し直さなくてはならない。

×

以上はアメリカ雑誌『スクリブナーズ・マガヂン』に掲げられたハロールド・フレミング（H. M. Fleming）氏の稿『經濟人の精神衛生』と題する論文の大要をわが『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌（昭和十一年七月號）の抜粋に從つて紹介したものである。

苦惱の解消法

奥本島田

一、苦惱の自然的解消作用

他人からお話を聞いてゐるとき、自分が言ふべくして言ひ表はし得なかつたことを聞かされると氣が樂になる。又、讀書をしてゐて氣が樂になるところは、自分が言ふべくして言ふことが出來なかつたり、行ふべくして行ふことが出來なかつたりしたことをすら／＼と書き綴つてある部分がある。

氣が樂になる反對、卽ち、氣が苦しいとは苦惱に外ならない。

言語、文章などは大體に於いて意識的のものである。ところが、心の惱みは意識に感じられてはゐることはゐるのだが、自分で容易に言語や文章に表現し得ないところのものであつて、したがつて意識化されてゐない心的現象である。これを意識に對して無意識と名づけておかう。

吾人には、時としてその意なきに浮かび上つて來る思想がある。例へば、ある場所へ行つた時に、數年以前に見た夢がひよつと心に浮かんで來たり、何事も考へない

でおからうとかゝつても色々な思ひが心に浮かんで來て自分の考へを邪魔したり、紀念碑の前に立たずんで過去を追想することなどが自然に生ずるものである。

思ふことを言はざるは腹ふくるゝもので、何か心に浮かんでゐることをスラ〳〵述べると終に氣が樂になることは吾人の常によく體驗するところである。婦人などが姦しく喋舌つた後で氣が樂になつて次の仕事に取りかゝつたり、他人の陰口を言つた後でその陰口の相手によく服從して働いたりするなどは我等が日常目撃し、或は體驗する一時的苦惱解消法となつてゐるものである。而もその側に、現實に對する行動能力と享樂能力とを恢復してゐる事實を見のがしてはゐないのである。さうすると、氣が樂になるためには、無意識を何かの方法で意識的に發散する作用が自分の心に働けばよいのである。併し、その作用は外界の自然現象の如くに吾々の內側に自然的に働いてゐるのだといふことを今認めたのである。で、私はこの自然的良能作用を自由に驅使するために研究して見たい。

二、精神分析法

前述した如く、思ふ存分に喋舌つた後で氣が樂になること、自分が言ふべくして言ひ表はし得ないことを他人がスラ〳〵と言ひ表はしてくれると氣が樂になること。このことから考へると、自分が思ふ存分喋舌つたことには苦惱感情の發散があり、その文句には苦惱感情に相當するリビドー量の含まれてゐることが分る。さうして、二つのことから考へると、その意味は一つの纏つたものに言ひ表はせるであらう。それから苦惱なるものは自己の現實的に充足され得ない願望がさうなつてゐるもので、その感情の發散のために生ずる文句は如何なるものであらうとも、願望充足となつて終らなければならない。

そこで最も完全に苦惱を解消しやうとならば、換言すれば、無意識を意識化しようとするならば、(一)思ふ存分喋舌つてしまふこと、(二)思ふ存分喋舌つた文句(聯想)の中から一定の纏まつた意味を分析知覺すること、(三)さうして無意識の願望するところ(苦惱)を知ること、これは感情の終息となる。少くとも、これだけ三つのことはやつてのけなければならないのである。この操作をすることを精神分析といふのである。さうしてこの操作をするためには第一に思ふ存分に言ひたいことを喋舌ることをしなければならないが、そのための條件は心の中に次から次へと浮かんで來ることを少しもかくさずに喋舌つてしまはなければならない。――この條件は

精神分析時の根本規則と稱するのである。で、精神分析はこの條件を無視しては絶對にだめである。

×

さて、さうするならば、人生苦惱の分析解消の最後に於いては吾人の現實に對する人間としての願望充足を見出すであらう！

人生の願望とは何であらうか？ それははたして充足され得るものであらうか？ 次に私は人生苦惱の分析に就いて研究してみたい。(昭和十三年二月一日)

春花秋葉錄

篠原政雄

それ〲に美しければすてがたし春の女よ秋の女よ。

これは歌人吉井勇氏の名歌である。もの夫々にとり柄はあらうが、然し、大人しい娘とお轉婆娘やきつい娘とどちらが好きなかと男に尋ねてみたら十人が九人迄、勿論大人しいに限ると云ふだらうと思ふ。美人畫等を見ても大抵はしとやかな女が畫かれてゐるから。

なぜ大人しい娘に心引かれるかを、殊に分析的な立場から考究してみる。

先づ第一に考へられるのは、男性が一般に持つサディズムが女のマゾヒズムを要求してゐるためである事は動かせないところだ。易では男女を陽と陰とに配してゐるのはその意であらう。

第二の點は、これは一層深遠なかと思ふのは、自己が相手に愛される場合、より深く、より強く、より純粹に愛して貰ひたいとは誰しも念願することであるが、大體男は女に對しては、無意識的に第二の穴として願望してゐるのであつてみれば(胎內復歸願望)其穴は奧深くて居心地よい程よく、美しくて平安な程よく、自分丈で他

に邪魔者が居ない程よいのであるから、心理的にも、出來る丈心の奥深く自己が這入り度く、成る丈けリビドーを多く纏綿してくれて、然も自分丈けであることが望ましい事になる。

大人しい娘はさういふ願望を滿してくれるのには一番條件が適つてゐるのではあるまいか。大人しいといふのはマゾヒズム性格の外に、又一つは抑壓が強くて本能感情が心の奥深く引込んでゐる狀態であらうから、これは例へてみれば、戶口から植込等の間を通つてずつと奥深い處に住宅がある様なものであり、幾山も越えた後に見える山の様なものである。但しこゝで抑壓と云つても勿論程度の問題で、超自我の高きに過ぎたり、ペニスナイドが甚だしかつたりする、所謂ケンのある女や、男の様な女ではなくて、主として羞恥などよりする本能感情の抑壓適度で（羞恥と云ふのは又、近親定着による超自我に源發してゐるものとは思はれるのであるが）女らしさがなくてはならぬ。

だから男が成る丈け女の中へ深く這入らうとする（穴の願望）無意識的努力と、大人しい娘の心（——本能）は奥深いと思ふ無意識とが錯綜してゐるのであらうと思ふ。さう云ふ處へは這入り難いが、然し這入れば奥が深き安定感があると云ふ無意識の感じがあるに違ひない。安定感は入口（現世）から奥深く離れる程增してくるのは當然だから。事實戀病などにかゝる娘は昔から大人しい人と相場がきまつてゐるのは、それ丈抑壓が強い、卽ち、本能感情は十分強いのにそれが心の奥深く秘められて居るのだから、さう云ふ深い本能の中に自己が取り入れられる事は、言ひ換えてみれば女の心の奥深く這入る目的を達することにもなつてくる。

又、抑壓が強いと其底が十分に知り難いから、自づと未知なものに對する探險慾をそゝられると云ふ點もあらう。

老子に「重爲輕根、靜爲躁君。」と云ふ言葉がある。東洋では殊にこの靜を尊ぶが、大體靜は靜寂、寂滅等と段階を辿つてゆけば、その究極は滅に至るのであるから、意識的方面よりの解釋はしばらく措き、靜と云ふ中には分析的には多少、死の願望、卽ち胎內復歸願望の傾向を含んでゐるらしい。大人しい（靜かな）娘に對する上述の分析は、かゝる點からも裏書きされる様に思ふ。

次により強くと云ふ點と、より純粹にと云ふ點では、強いと云ふのは一面リビドー量の多い事であらうから、これは相當生命力の旺盛な事も必要になつてくる。さうするとどうしても健康で、精神狀態も活潑でないとその

感じはないから、深く強くと云へば大人しいと同時に、女らしい活き〳〵とした魅力が（マゾ性を毀さぬ程に）ないといけない事になる。隨分慾張つた願望だが。

純粋と云ふ事は貞操と關連する。自分丈愛して貰ふ爲めには必然的に相手に貞操を要求する様になり、これが大人しいと濫りに他に心を移すまいと云ふ無意識的滿足を與へる。事實、貞操保持の一理由として近親定着に依る抑壓も手傳つてゐるのだから*

* 貞操保持の原因としての近親定着に就いては高水氏の「貞操と誘惑」參照。

その上これ迄に誰も先に這入つてゐない事も要求されるから、從つて處女なる事も必要である。

大體世人の娘と云ふ觀念には多分に處女と共通するものがある。だから娘に對しては處女克服慾も働いてゐるのである。かういふ無意識心理狀態を、意識面から見ると結局神秘とか、憧憬とか言ふ言葉で現はすより外に方法がつかぬのだらうと思ふ。

お轉婆娘等は全てこの反對で、戸口からすぐ座敷迄覗けると云つた具合だから、這入つても不安定なのを免れまい。轉と云ふ中には次々と心が轉じ移ると云ふ意味があるのだらう。

きつい女と云ふのはマゾ性が少ないので、これは男性のサディズムとそりの合ふ筈がない。尤も近頃の樣に去勢的な男性が多くなればこれ迄の原則も大分ぐらついてくるだらうと思ふ。それかあらぬか、最近は大分マゾ性の少ないお孃さんが殖えてくる樣だが（さうなれば又、當然サド性の少ない男性を要求する樣になる）これは一部分は男性の責任でもあり、更に溯つて考へれば社會經濟機構の缺陷に遠因するものもあらう。

電壓は器具を毀さぬ程度で高く、容量の多い程光も強きが如く、やはり男女は其サド・マゾ性がある程度顯著な方が相引く力も強く歡喜も大きいのだから、男女の中性化してゆく傾向は人生最大の感激を次第に稀薄ならしめてゐる悲しむ可き現象だとも云へる。

世の紳士淑女よあなたのためにも、あなたの戀人の幸福のためにも、先づ分析を學んで、男は男らしく女は女らしく心懸け給へかし。

大槻憲二著
精神分析雜稿
久しく品切中のところ、重版出來
定價一圓五十錢・送料十錢

刀劍鑑定の作法における無意識心理

土屋秋實

吾々が意識され難いとされてゐた吾々の心の動きを科學的に把握出來る様になると、即ち吾々の心眼が開けると吾々は、從來不合理的だと思はれてゐた現象が意外にも合理的であり、意味なき偶然的なものと思はれてゐた事物が必然的な意味をもつと悟り得る歡びを經驗する。吾々の直觀力は本能的な正確さをもつものである。即ちそれが原始的であれば、それは不合理的、偶然的と稱せられる形態をとつて現象するにせよ、無意識的領域においてそれは意識的自我が想像だにし得られない程銳敏な感受性に富むものであつて、大局から觀れば、一見不合理的、偶然的に見えても、それはやはり合理的必然性を有し、明確な意味をもつのである。その様に徹見することが無意識心理學の任務であると云へる。この名稱はその研究對象に着眼した場合のそれであり、研究方法に即した場合には、それは精神分析學と稱せられる。私はこの様な科學的見地から刀劍鑑定の作法に顯現した無意識心理を分析して、その合理的意味を明らかにしてみたいと思ふ。

吾國においては、刀劍は封建的武家政治時代の武士の魂を代表するものとして尊重せられたのであるが、それは即ち武士の特權、更に一般的に言へば强者の弱者に對する特權及び男性の女性に對する特權を代表してゐると考へられる。封建時代は、その様な特權が歷史的必然性として一般に許容せられた様な狀態に、社會的生產諸關係があつた時代である。從つてこの様な社會的諸關係が武士の魂たる刀劍に具現してゐると考へることが出來る。以上は意識的な觀察であるが、無意識的には、その特權を代表する刀劍がペニス象徵として觀察せられる事は分析的見地から既に實證せられてゐる。それは、吾々の無意識的性本能が轉位機制によつて象徵的に刀劍に纒

綿せられる事を示す。吾々の唯我獨尊願望は容易に脱却することが出來ない程根强いものであるが、封建時代には特にそれが殺伐な形態の下に發動したと考へられる。この本能的願望は劣等感と優越感との相反並存感情として發現する。卽ち自己の唯我獨尊欲のために極端な優越欲をもち、そのために劣等感が生じ、それを補償するために極端な優越欲を表現する象徵行爲が必要となるのである。それを代償的滿足と稱する。封建時代における武士の尊大な態度は社會的唯我獨尊願望の劉越感の面を現すものであり、農、工、商人及び女性の慇懃さは武士の尊大さに對する反應として社會的唯我獨尊願望の劣等感の面を示すものである。武士の帶びる刀劍は社會的優越感の象徵であり、町人の諂ひ及び女性の封建的手管は社會的劣等感の表はれであると解せられる。兩者は相互に關聯し合つてゐるのであつて、一を他から切離して論ずることは出來ない。江戶時代末期に到つて封建制度が新らたなものへのそれ自らの內的發展力によつて崩壞し始めると、町人はそれ自らの劣等感を補償するために武士に對抗するに足る英雄や俠客を必要とし、それを作り出した。しかし封建制から資本主義への明治維新による轉換が町人を代表する英雄や俠客によつてなされずに、尊王精神によつて我國が家族的協同社會である事を自覺した武士によつてなされた事は日本的特徵をなすのであるかもしれない。

話は橫道に入つたが、要するに刀劍には封建社會の無意識象徵があることを認識して戴けば結構だと思ふ。

刀劍を鑑定するには一定の作法がある樣である。演劇や映畫で觀ると、純白の懷紙を口にくわへて威儀を正し徐に中味を鑑識する樣であるが、この白紙をくわへるのはどう言ふ意味があるのであらうか。私はそれに關して浮世繪において懷紙をくわへてゐるエロ的な女を畫いた場面を聯想し、兩者の間に何等かの深い類似性があると思つた。白紙をくわえた女は汚れた女の處女擬態への超過補償であらう。鑑識の際に息が刀劍にかゝらないために白紙をくわへるのだとの理屈も全く否定し去ることは出來ないかもしれないが、それよりも心を正すためと解する方が正鵠を穿つてゐると思はれる。

刀劍を鑑識するのは單にその刀劍の作者を確定するためばかりでなく、その刀劍に表現された作者の心を鑑識するためでもある。人と人との生命のやりとりに使はれる武器である以上そこに無意識的な錯綜が現れてゐてはならない。名刀と稱せられるものには鏡の樣な虛心坦懷な心が表現されてゐなければならない。それを鑑識するのが刀劍鑑定の目的であらう。その場合に白紙を口にく

わへる作法はその裏に處女性尊重、處女性鑑識の心理がその反動として現れたもので、即ち童貞性鑑識の無意識心理が潜んでゐると思はれる。その點は浮世繪にあるエロ場面と共通した無意識心理ではないかとも思はれる。即ち白紙が處女を象徴し、その象徴的暗示によつて刀劍が鑑定者の心に惹起さす氣分を直觀的に把えて、それによつて刀劍の物的及び心的性能を鑑識し樣とするのではあるまいか。そこに性的無意識心理が象徴を形成して轉位され、强迫的に表現せられてゐるのではあるまいかと思はれる。處女に對して男らしさを示す樣な感じを與へる刀劍が無意識心理的實用刀なのであらうか。これと反對に殺氣だつた刀劍とはそれにサディズム的變態感情が表現されてゐるのを言ふのであらう。ついでながら武士の切腹は、刀劍をペニス象徴とし、腹を女胎象徴とせる自己色情的行爲であり、それによる眞情の吐露を示すものであるとも解せられる。果してさうならば、こゝにも亦愛と死との密接な關聯が認識され、また刀劍を愛する氣持が察せられる。(完)

精神分析學診療所

醫學博士　古澤平作

市内大森區田園調布三丁目六〇八
(田園調布驛東口際)
電話田園調布(102)三〇三二

現代日本の心理經濟法

大槻憲二

一、文化と戰爭の問題

一月九日の東京朝日學藝欄に『文化と戰爭』と題して宮澤俊義氏の感想が揭げられてゐた。戰爭に文化破壞面を何とか是認しようとする方に傾いてゐた。論者の趣旨は戰爭の文化破壞的な一面のあることを問題にしたもので、私は只今それを不當としてこの批評の筆をとらうとしてゐるのではないのである。が、たゞ論者がその是認の方法を道德的な方法にとらうとしたその心理的過程を問題にして見ようと思ふのみである。卽ち論者は、戰爭が文化を破壞することは確かである、それは道德的にいけないことかも知れない、併し仕方のないことだ、併しいけないと云へば、文化にだつて道德的によくない點がある、それは文化には必然的に有閑的な一面があるからだと云ふのである。これで文化は破壞せられても仕方のない道德的理由は立つたかも知れないが、それ故にとて戰爭がその役目をひき受ける道德的理由はまだ確立せられてゐないのだが、論者は恐らくこれで戰爭の文化破壞權を道德的に確立して見せたと云ふ錯覺を持つてゐることであらうと思ふ。

私は何が論者をしてこのやうな錯覺を持たしめたかを追究しようとしてゐ

アプフウプ ABHUB

他の學問がアプフウプ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黃金を探し出す。

無愛想の心理經濟

不老泉院主

愛想がよいと云ふことはリビドーを相手に向つて支出することで、その限りに於いてリビドーは自分の內に貧困を來してゐる。女はとかく愛想のよいものであり、愛想よくすることが、彼女の美德とせられてゐるが、その限りに於いて彼女等のリビドー經濟はとかく破產し勝ちになり易いやうだ。

女に比して男はとかく無愛想であると云はれてゐるが、それは男が女のやうに

るのでもなければ、またその論旨の誤謬を指摘しようとしてゐるのでもない。それどころか、私は或る程度まで氏の論旨と形式的結果に於いて一致するとさへ思はれる考へを抱いてゐるものではあるのだが、たゞ私は論者のやうに道徳的には考へず、心理經濟的に考へようとしてゐるものであることを敢へて始めに斷つておいて、さうしてそのやうな考へ方の方が遙に事情を正確に把握し、且つ論理的にも破綻を來す危險の少いことを示したいと思ふものである。まづ論者の文章の主要は部分を左に紹介して、然る後に細かく批評して見よう。

×

ナイル川のフイレ島にあつた古い寺寺がダム工事の犧牲にされてしまつたときのことである。イギリスのバアドウツド卿はこれは文化の破壞だといふので強硬な抗議を公にした。そのときある人が彼にかうたづねた。「卿よ。もし卿が生きてゐる赤ん坊とドレエスデンのラフアエルのマドンナといつしよに燃えつゝある家の中にゐたとしたら、いつたいどうなさるおつもりか」この問ひに對してこの熱烈な文化愛好者は生きてゐる赤ん坊よりもさきにラフアエルを持ち出すつもりだと答へたさうである。

シユブランガアはこの問題はさらに、强度が同じ場合に社會的價値と美的價値とのいづれに優位をみとむべきかといふ問題と、强度が違ふ場合には事情によつては美價値が社會的價値に對して優位を占めうるかといふ問題とに分れるといつてゐる。なるほどさうに違ひない。が、つまるところ藝術とか文化とかいふものに相對的にどれだけの價値をみとめるか。

これは頗るむづかしい問題で、なか〳〵簡單に答へることはできぬが、た

相手から愛せられることを期待しないでも濟む存在だからではあるが、それにしてもその限りに於いて、彼等のリビドー經濟は貧困に陷る率が少いやうである。私は女の無愛想を奬勵してゐるわけでは決してないが、愛想のよすぎると云ふことはナルムスムスの上でも病的であると共に、心理經濟上でも健康な態度とは申しにくい。

郵便局や市役所などへ行つて見ると吏員は大抵無愛想なものであるが、多數の人間に事物的に接觸することを職業としてゐるものが、一々の相手にリビドーをやたらにふり撒いてゐたら、それこそ忽ち疲れて（リビドー破産して）しまふ。郵便局員や役所員に比して、銀行員の方が一般に愛想はよいが、それは一方が公吏であるに對し、他方は商人である、その相違にもよるが、銀行だとて多數の來店者に事務的に接する仕事である點に於いて變りはない。そこで何とかリビドーの節約法が考案せられなければならないが、彼等は態度（形式）だけを丁寧に、

ゞ、文化といふものにどのやうな價値をみとめるにしろ、それに絕對至上の價値をみとめるわけにいかないといふことだけは確實であらうとおもふ。人間あつてのちの、「生」あつてのちの、文化である。この意味で文化は本質的に有閑的な性格を身につけてゐるといつてもいゝかとおもふ。

かやうに戰爭と文化との間にときに背反が生じうることは、文化が本質的に身につけてゐる有閑的性格の當然の結果であり、それは要するに文化價値がほかのいつそう重要な價値―「生」價値―のために犧牲にせられることにほかならぬが、しかもそのことは文化そのものゝためにも必ずしもたゞ悲しむべきことではない。文化の基礎が人間であり「生」である以上は、その「生」の要請のためにそれが多少犧牲にせられることがあるとしても、それは文化の眞の發展のためのひとつの不可避的な過程と考へらるべきであらう。「生」をはなれて文化はない。文化は、だから、あくまで「生」に卽してのみその發展の途をたどらなくてはならぬ。

×

右の論は隨筆的な文章であるから、そこに哲學的な廣汎性と科學的な正確性とを期待することは出來ないのは當然であるが、從つてそこには二つの問題が當然の事として豫想せられてあることを知らねばならない。それの一つは、文化と戰爭とは相對立する二概念であると豫想せられてあること。それの第二は、文化とは過去の文化のみであるとせられてゐること、これである。戰爭も勿論廣い意味に於いては文化である。併し文化と文明とは違ふと云ふ常識論に從つて戰爭を文明に屬するものとして、文化と對立すると考へておくことも許されないではない。

愛想よくして、心理（内容）はなるべく纏綿しないと云ふ方法を案出してゐるやうである。さうしてこの方法は銀行員外の諸方面にも存外廣く適用せられてゐるやうに思はれる。

貧者の一燈

と云ふ言葉があるが、これは貧者の一燈は富者の萬燈に相當すると云ふ意味であるとは、讀者諸君の夙に御存知のところであらう。併し一燈は一燈であつて萬燈の萬分の一の價値しかないことは、これ何人も否定することの出來ない客觀的事實である。燈のやうなものだから貧者の一燈だなどゝ淸貧らしいことを云つてゐるけれども、これがもし現金で一圓と一萬圓との比較となつたら、誰も貧者の一圓など取る奴はないであらう。とる奴があれば馬鹿が氣違ひである。

併しこれは客觀的な價値でなく、主觀的な價値、卽ちリビドー量を意味するので、リビドー量とすれば、貧者が一燈を獻ずるに要するリビドー量は富者が萬燈

たゞ文化を過去のそれにのみ限定し、現在又は將來のそれを除外してゐるかの如き觀あることは、この論旨を窮屈なものにしてゐる形がある。現に論者が「生」と呼んでゐるものは、現在及び將來の文化を包含してゐるものとしての生でなければなるまい。例へば、ナイルのフイレ島に築かれたダムは「生」であると共に「文化」に外ならないではないか。して見れば、このダムに抗議したバードウッド卿の文化擁護論は過去の文化のために現在の文化を拒否せんとするものであると云ふ意味に解すべきであつて、必ずしも文化擁護者の文化破壞者への抗議として窮屈に考へるべきことではないと思ふ。このやうに窮屈に考へるから問題の動きが却つてとれなくなり、解決が永久に困難となつて來るのである。

ベルグソンの哲學を俟つまでもなく、人生は永遠の創造的發展であつて、過去の文化は既に過去の人類の創造的發展の記錄であつて、それは既にそれが創造せられた瞬間に於いて文化的使命を果してゐるものである。勿論、過去に於いて既に使命を果してしまつたものでも、これを無意味に破壞し去ることは固より好ましくない。我々はそれに對して我々としての價値を認めるものである。何となれば人類の現在の文化は過去の文化の遺產としての面を濃厚に具へなければならない運命にあるからである。

それ故に時に現在の「生」を犧牲にしても過去の「死」(文化)を生かさなければならない場合、或は生かせたく希望する場合も、甚だ多いのである。その意味に於いて、我等はバードウッド卿の抗議に滿腔の同感を覺える。

それ故に、戰爭が文化を破壞するとすれば、それは道德的には是認せらるべき理由を發見することは決して出來ないのである。もし發見したと錯覺し

を獻ずるに要するリビドー量に比して勝るとも劣らないであらう。

觀念生活に於いては右の通りだが、現實社會に於いては貧者の一燈のリビドーは富者萬燈のリビドーの前に默殺せられる場合の多いことは如何ともし難い。たゞ、我等は富者となつて一燈の心を失はず、貧者となつて萬燈の力の前に卑屈にならない用意だけは怠つてはならない。さうしてその用意はたゞ分析のみがこれを我等に可能ならしめるものであらうと思ふ。

磨瓜雅

わが若き友K君は硯の趣味を有し、多くの名硯を藏してゐる。過日、余の許に訪れてその名硯の箱書きをしてくれとの依囑である。就いて見るに。その硯は縱約一尺位、お多福型、又は瓜型の美事なもので、周邊の石刻裝飾は瓜とその蔓とに象つてある。

余は硯の箱書などした經驗はなかつたのであるが、何か分析的な警句でよいか

たいならば、それは宮川氏の例にならつて文化の「有閑的性格」とやらを大いに强調するより外に途はないのである。

戰爭の文化破壞を是認したいと思ふならば、それはそのやうに道德的な方法に依らず、寧ろ心理經濟の立場からなされなければならない。戰爭それ自身が一般的に云つて既に道德的是認のむしろ困難なものである。勿論、或る種の戰爭はたしかに「聖戰」ではあり得るであらうが、その場合にも當事者は常に多少の道德的苦痛を味はないと云ふことはあり得ないのである。併し戰爭は常に必ず文化を破壞しなければならないものではない。今次の事變に於いても我軍は可及的に文化を庇護しようとしてゐることは屢々我等の聞き及んでゐることであるし、伏見城の陷落せんとした時に城代鳥井は城内の名什珍寶を敵軍に托して後に城に火を放つたと云ふ美談をさへ我等は聞及んでゐる。もし宮澤式論法で云ふならば、鳥井は「有閑的性格」の文化財を破壞すべき折角の機會を放棄した不道德漢であると云ふ結論に達するのである。

このやうに戰爭は必ずしも文化破壞の條件の上に成り立つものではないのである。たゞ已むなく多くの場合に文化を破壞することがあり得るのである。如何なる場合に戰爭は已むなく文化を破壞するか。それは必ずしも敵が文化的建造物に占據してゐると云ふやうな場合のみではない。軍の行動の前にはだかつてゐる如き場合も亦さうである。それは戰爭と云ふ事が實に絕大なるリビドー量を要する仕事であり、從つてそのリビドー經濟を首尾よく行ふと云ふことがその勝敗の數を殆ど決定するものであるが故に、もしそのリビドー經濟行使の前途に當つて過去の文化財が橫はるならば、已むなくそれを破壞しなければならないのである。もしそれを破壞する勇氣がないならば、我

ら書いてくれとの事に、勇を鼓して「破瓜陋、磨瓜雅」と書いて贈つた。K君余にその意を尋ねたが、余笑つて答へなかつた。分析を學べる同君は自ら悟得するの時あるべきを思つたからである。

柘榴果阿吽

K君はその時また別のやゝ小なる、と云つてもこれとて縱五寸以上の長方形の逸品で、支那製の古硯であるとのことでそれの箱書を依囑した。硯海の向ふに縱二寸位、橫四寸位の長方形の面（墨など置くべき場所）があつてそこに左圖の如き美事な彫刻が施されてあつた。

即ち二個の柘榴であつて、一つは口を開き、他は口を開いてゐない。私はこれ等二種の柘榴を見て直ちに仁王を聯想した。御存知の通り、仁王は一對になつてゐて、その一方は口を開き、他は口を閉ぢてゐる。これは呵吽の呼吸を象れるものであると云ふことを豫々聞及んでゐたので、この柘榴もやはり阿吽の呼吸（別言すれば、陰陽の和合）を意味せるもの

等は必然的に敗北を覺悟して掛らなければならないのである。それ故に過去の文化を絶對視する者は現在の「生」の問題をより輕視するものであると云ふ、宮澤氏と形式上（實質上はともかく）同じ結論に私も亦到達したわけになるのである。

ところで宮澤氏がこの結論に達するに就いて何故に道德的な方法を選んだかと云ふこと、換言すれば、論者をして戰爭の文化破壞權を道德的に確立し得たと錯覺せしめた心理的原因に就いては、私は論及する意志はないやうに始めに云つた。併しやはりこの問題は心理經濟の方法を確立するためには論及しておかなければならない問題であると云ふことに私は氣付いて來た。私は論者の個人生活に就いては何等の豫備知識がないので、氏個人の心理に就いての精神分析的推斷を下すことは出來ないが、一般のインテリ階級者に就いての診斷としてならばこれを下すことが許されないではない。インテリ一般は自分が生産者又は創造者として現在の文化過程に參與してゐないと云ふ罪障感、過去文化の單なる鑑賞者、感傷的享樂者に過ぎないと云ふ劣等感を極めて根深く持つてゐる。そのやうな劣等感や罪障感は必然的に何らかの補償を要求してやまないが、それは殆ど無意識的な劣等感であり罪障感であるが故に、その補償も亦無意識的になされるのが普通である。そこで多くのインテリ等は宮澤氏の如く、自ら「有閑的性格の所有者」であると云ふレッテルを貼付けることに依つてその補償をなすのであるが、そのレッテルは自分自身に貼付けるのは不當であると云ふ虚榮心がインテリ特有の我儘心に依つて持たれてあるので、そのレッテルは自分自身に貼られる代りに「文化」一般に貼りつけられる。かくして自分はよい子になると共に戰爭と云ふものに依つて

に相違ないと直觀したのである。そこで私はこの方の箱書には「柘榴果阿吽、墨硯亦呼應」と書いて贈つた。墨硯關係は

陰陽の關係であり、男女の和合をも仄かに暗示するものであるから、右の箱書の意味は敢て詳しく説明するまでもなく讀者諸君の諒解し給ふところであらうと思

代表せられてゐると信ぜられてゐる「生」の問題への申釋も立つと云ふ一擧兩得の無意識トリックが完成せられるのである。かくして最も氣の毒な目に合はされるのは「文化」一般であつて、彼はインテリを久しく養つて來た恩を仇で報いられる母親のやうなものである。

かう云ふやうな病的な心理傾向を有するものが、もし現實的な「生」の問題、例へば戰爭の如きに參與するならば、彼は必然的に敗北者とならなければならない。何となれば、彼の心理經濟法は書齋的個人主義の上に立つてゐて、現實社會生活の法則の上に確立せられてゐないからである。

二、採點制度の功罪

同じく東京朝日『鐵箒』欄（一月二十八日）に大川晋平と云ふ人が『採點學』と題して學校に於ける採點の方法の客觀的妥當性を問題にしてゐたのは、同じく心理經濟の見地から見て我等に幾多の興味があつた。大川氏の文章の肝要點を次にまづ紹介して見よう。

×

極端にいへば、一點の不足でも落第の不名譽と苦痛をなめねばならないし、僅半點の相違でも、百千の競爭者を蹴落として、堂々と入學の榮冠をかち得ることが出來るのだから、成績考査に採點といふことが行はれてゐる限り、一點半點の微と雖も、豈これを稼がずして可ならんや、だ。

だが、成績考査の結果を點數で評價することを、科學的に考察した場合、果してそれにどれだけの權威が與へられるであらうか。

どの學科に就ても點數評價に對してはわれ／＼は、その客觀性を疑はずに

ふ。因みに庭の地などは屢々阿字の形に掘るがこれは阿吽の阿であつて、即ち陰として築山の陽（吽）に對應するのであらう。

墨硯蒐集の心理

K君が若いに似合はずこのやうに墨硯の趣味を解することは不思議であると思つてゐたが、まづ一つには父君への同一化と云ふ契機が私に氣付かれた。父君はまたその方の趣味篤い人であるが、その父君の藏品よりも自分の愛品の優れてゐることを誇つてゐるところに、同一化を超えたエディポスが感ぜられた。

次に彼の母親が極めて早期に長逝せられたことが告白せられた。また次にはその愛人が一兩年前に病沒し、その病沒の事情に就いて彼が根深い罪障感を持つてゐることが分つた。次に彼はその若さに似ず品行極めて方正であることが確證せられた。

更に次に彼が時として大筆の天井より下つて自分の鼻頭を擽するの夢を見るこ

はゐられない。式と答が正しければ數學においては滿點を與へることに、誰も疑念を持たないかも知れないが、たとへ二者同樣の答案でも思考徑路の巧拙、解答時間の遲速等によつて、その實際の成績には、隨分大きな開きのあることを忘れてはならない。

然し全科平均九十五點の學生生徒は優等生とし、學校卒業後も、就職に、結婚に、非常なプレミアムまでつくのに、それが採點者の氣まぐれからであつても、一度與へられた落第點は、その人の一生につきまとうて、彼や彼女を泣かしめるのである。

上は大學から、下は小學校まで、そして日本ばかりでなく、世界各國でも行はれてゐるであらう成績考査の採點に就ては、科學としての採點學といふものがなかるべからずと思ふがどうか。

×

實に尤な疑問であり、また尤な提唱ではあるが、假りに採點學と云ふやうな科學が成立したとしても恐らく永久に、採點法の缺陷はなくならないであらうし、而もその缺陷を負ひつゝ採點の方法は學校に於いても世間に於いてもいつまでも持續せられて行くことであらうと私は思ふ。問題は、事物の價値を正確に評量することが絶對に不可能であると云ふことゝ、而も他方に於いて我等は事物の價値をともかくも何らかの方法で確立しなければならないと云ふ必要に不斷に迫まられてゐると云ふ矛盾に存するのである。

人生に於けるあらゆる事物、殊に人間の能力はこれを客觀的に正確に評量すると云ふことは人間にとつては絶對的に不可能であるが、それが不可能であるとする理由をこゝに説明することはやめておかう。併し絶對的正確に評

とがあるとの事實が告げられた。

このやうにして彼にとつて硯はその死せる二人の愛人の代償であり、筆匣は父又は父に同一化せられたる自分自身に外ならぬことが分析推斷せられるに至つた。

持物と持主

昨年十一月三日の東京朝日『青鉛筆』欄に次のやうな面白い話が出てゐた。

百圓札と少年の話——十八日午前零時大阪玉造の夜鳴きうどんやでうどん三ばい平げた少年が「これでとつてくれ」といつて手の切れるやうな百圓札を出したうどん屋のおつさん「無茶したらどんならん百圓で釣があるかいな」と困つてゐるところへ通りかゝつた玉造署の刑事が少年を警察へ

東區空堀通三丁目川鹿電機工業所の給仕君(一五)で去る一日朝會社から現金、小切手合せて二千七百圓を銀行預金するため二千七百六十五圓預入れの通帳を持つて使ひに出たが「これだけ金があればどんなに面白いことができるやろ」と氣

量することは不可能ではあるが、併し大體に於いて、常識的に、評量することは必ずしも不可能ではないし、また現に人々はそれを行つてゐるのである。勿論それは常識的、個人的、直觀的、獨斷的な方法であるから、常に誤謬を犯しがちではあるが、それでもとにかくそれで當座の間には合ふし、また誤謬なるが故にケガの功名で、正確であつたよりも却つてよい結果を齎らすやうなこともないではない。例へば、大佛次郎氏が外交官の試驗に落第し、その方面への努力を斷念して小說家として立つに至つた如き失敗の成功は、現代試驗採點法に於いても屢々認められる事實である。

右のやうな失敗の功績もあるが、また失敗の罪惡とて固よりないことはなからう。例へば、或る有能な人が、假りに試驗を受けることの技能に於いて拙なるためにその競爭者よりも下位に落ちたことに絕望してそれからの努力を斷念し放棄し、遂に寶の持腐れに終つたと云ふやうな事實もないことはないであらう。その場合には勿論、その人自身の劣等感と云ふことも、他面に於いて問題とせられなければならないが……。

更にまた失敗の喜劇とてないことはない。例へば、或る學校の首席卒業生が十年二十年の後に更に社會の試驗の前に却つて逆の成績をとり、末席者よりも下位に立つと云ふ如きことゝてないことはない。現に我等はさう云ふ事實の二三を知つてゐる。併しこれとて更に三十年、四十年の後にはまたその地位が逆轉して了ふと云ふやうな變化の可能性とてない事でもないと、私は考へてゐる。

とにかく事物や人間の價値の評量は絕對的には不可能であるが、相對的には可能であるし、可能不可能の問題を超越してとにかく必要でもある。その

が變り映畫館の入口で百圓札を出したが斷られ、芋も頭饅も百圓札では賣つてくれないのでうろ〳〵するうちに夜になつた。

貧民窟の安宿で宿料十五錢の先拂に百圓札を出すと宿屋の主人はカン〳〵に怒つてよせつけずそれからガード下や地下鐵の構內で每晚ごろ寢してはルンペンたちに「本物だよ」と百圓を見せても「おもちやかまがひ物だ」と誰一人相手にしてくれず百圓札を持ちながら乞食同樣の暮しをしてゐたことを自白「こんなこはい、つらい目にあつたのははじめてです」とつく〴〵後悔手づかずのまゝ持ち步いてゐた拐帶金をさしだした。【大阪電話】

つまり少年にはその持物が不似合であつたゝめに世間が信用しなくてから云ふ結果になつたのだが、原則として持主は持物よりも高價でなくてはならないのだでないとそのものゝ價値を發揮しなかつたり、持主に危害を及ぼしたりする。この少年が殺されなかつたのはせめてもの

ためには併しその評價は始めから相對的なものであると云ふことを標榜してかゝるわけには行かないので、いかにも絕對的であるかの如き外見を彷彿せしめる如き方法が選ばれなければならないわけになる。そのためには現在の採點法の如きは相當に尤らしい外貌を具へてゐるので適當ではあるが、併しそのためにそれの犯すべき罪過も相當に大きくならざるを得ないのは當然である。

そこで我々としてはその採點法の意義を十分に知悉して、そのために我々が自分を不幸に陷れるやうなことのないやうにすると云ふことが必要になつて來るのである。で、まづ

第一に、現在の如き採點法が採用せられるに至つた動機を心理學的に研究して見なければならない。それは、この方法が最も輕便であるからだと私は見る。換言すれば、試驗者の心理エネルギーを要すること最も少量にして、而も如何にも客觀的妥當性を、少くとも當該試驗問題に關する限りは、主張し得るからである。この二つの長所のある限り、現在の如き試驗制度と採點法とは永く廢棄せられることはないであらうと私は信ずる。併し勿論、それ等の長所は試驗者側にとつて都合のよい點であつて、受驗者側にとつては固より少しも都合のよい事ではない。で、

第二に、受驗者がその採點の結果に就いての心構へを確立しておかなければならないと云ふ問題が生ずる。現在の試驗制度は右に述べた通り、試驗者の心理エネルギーの節約と、客觀的妥當性の幻覺を與へ得る點がその二長所であるが、第二の長所たる客觀的妥當性の幻覺とはどう云ふ意味かと云ふにそれは當該試驗問題に關する限りに於いては、右の如き採點の結果は動かせ

幸としなければならない「玉を抱いて罪あり」と云ふ言葉が昔からあるが、柄にないものを持つてゐると罪なき罪を自分に負はせることさへある。併し持物が自とより高價であることを承知してゐて却て身の安全を圖り得る場合とてないことはない、支那の昔の話で有名な藺相如が十五城に匹敵する國王の名玉を預つて隣國に使し、その隣國王にむざ〳〵取られさうになつたのを種々の機智を弄して無事に持歸つたと云ふ話は讀者諸君も既に御存知のことゝ思ふが、これは彼が、自分の身よりも玉の方が、恐ろしい隣國王にとつて比較を絕して貴いことを十分に承知してゐたためであると私は考へてゐる。自分より輕いものを自分が持歩いてゐる時には、自分はそれを容易に支配することが出來るが、自分より重いものを持歩いてゐる場合には、その重いものゝ重さに順應して自分の動きを定めるやうにしてゐれば自分と物とを並せ保つことが出來るわけだ。これは物理學的事實であると共に心理學的事實でもある。

ないものであるが、そこには第一に偶然と云ふ要素が多分に含まれてゐることゝ、各人の能力には方面と消長とがあると云ふことゝが無視せられてあることを忘れてはならないのだ。偶然前夜調べたところが試驗問題に出れば、その人は前夜偶然調べなかつた他の人よりも非常によい成績を得ることがあらう。

それに依つてその人の能力の一般的評價と見なすことは誤りである。第二に、人々の能力には方面の別があつて、たとへ試驗の成績を擧げ得る如き方面では劣つてゐる人でもその人の別の能力（人格の誠實さ、圓滿さ、健全さの如きもまた一種の能力と見なして）に依つて社會的存在意義を果し得る場合がある。第三に、人の能力にはその人の修養や努力や自然的發展に依つて常に消長があるから、ヘーゲルのやうに大學では哲學では落第點をとつた人でも、世間に出てからは世界的大哲となる人もあるし、エディスンのやうに學校で數學の低脳兒扱ひされても後には世界の發明王として君臨し得る場合とてないことはないのである。

で、要するに受驗者は現行試驗制度と採點法の意義と限界とを十分に承知して、それを必ずしも輕視することなく（確に或る程度までは評量法として妥當性を有してはゐるのだから）、而もそれに惑されることなく、常に寧ろ自分自身の能力と心理との分析評價に專念してあるべきだと思ふ。とかく劣等感の強い人が偶然悪い點をつけられたりすると、そのまゝ氣落ちして當然伸びるべき才能をまで伸ばさずに終ることが極めて多いであらう。

學校に於いての試驗や採點のみならず、社會に出てからでも凡そ一切の社會的評價の方法はみな評價者の心理經濟法則に從つてなされてゐるものであ

新刊紹介

▼『故岩倉具方從軍畫集』――岩倉具榮公令弟洋畫家具方氏が海軍省囑託從軍洋畫家として上海の花と散られたことは嘗て本誌上に屢々報道したが、こゝにその從軍畫集の完成したことを故人のためにも喜びたい。收載せられたる作品三十葉、内三葉は三色刷り、何れも從軍中のものゝみで、卷頭には米内海相及び長谷川司令官の題字、有島生馬氏の序文、具榮公の故人閲歴が掲げられてこの畫集を重からしめてゐる。卷末には故人の書簡集が掲げられて讀む者の涙を誘はずにはおかぬ。作は專門家の間でも十分に高く評價せられてゐる。（神田區神保町二丁目、三教書院發行、定價五圓。）

ることを承知して、そこには試驗制度と同じ缺陷の存するものであることを承知してゐなければならない。例へば、人々は總理大臣は現代國家の最も偉大な人物であると思ひ、學者は官立の、殊に東京帝大の總長が一番優れてゐると思ひ、博士號のあるものはないものよりも偉いと思ひ、高等官は判任官よりも優れてゐると思ひ、市長は町長よりもあらゆる點にて勝つてゐると思つてゐる。それはさう云ふ場合もあらうが、誰とてさうでない場合の多いことを十分に承知してはゐるのだが、承知しつゝなほ且つさう思ふのは、さう云ふ形式的な評價方法が最も簡單で心理エネルギーを消費することが少いからである。

社會的な心理經濟法の興味ある一例を次に報告してこの評論を終らう。それは某官廳に於いては、風俗壞亂的な繪畫を描く畫家をブラツクリストに載せてあると云ふことであるが、その名簿を一覽した人の報告に依ると、そんぢよそこらにゐる無名の下手い下劣な春畫家や町畫師と同列に、文展や美術院の有名で高級の美人畫家や裸體畫家も一視同仁的に名前を並べてゐると云ふことである。それは前の上下的評價方法とは別に、分類的評價の心理經濟的方法を示したもので、それはたしかに或る意味で滑稽だが、併し、これとてやはり心理經濟の方法と云ふか點ら見るならば極めて合理的であり効果的であると云ふことは疑ひのないところである。

現代日本の心理經濟方法としては、なほ他に種々の方面に興味ある事實を發見することが出來るであらうが、とにかく右に偶然私の目に入つた二つの事實を捕へて研究の資に供して見た、(完)

四版殘少!!（定價一圓八十錢 送料十二錢）

社會・宗教・文明

フロイド 精神分析學全集 第三卷

（口繪）フロイド肖像

集團心理と自我の分析

有名なル・ボンの群集心理説を駁し、分析社會學説を樹立した重要な論文。

宗教の未來

邪教問題の喧しい折柄、必讀の文字でありませう。

文明と不滿

良心起源論や文明の心理學的意義の説や、本誌本號の內容と聯關するところ多し。

春陽堂發行

本研究所宛御申込の方に限り一割引

文献維持委員制の新設に就いて

本誌經營上の發展に伴ひ雜誌維持委員制の廢止を見るに至りましたと同時に、別に文献維持委員制を新設したいと存じますにつき、廣く一般誌友の間からこの擧に御參加下さる方々の多からむことを切望いたします。文献維持とは世界各國語の斯學關係文献を今にして蒐集しておかなければ將來は益々困難になることを虞れるために、思ひ立つたのであります。殊に前墺國ヴインに於ける斯學會及び同會所屬出版部の行く行くの解散（未だ存續的に事務をとり、新書の出版はせぬやうです）は一層その不安を大ならしめるものがありますにつき、今からでも遲すぎはせぬと思ひ、諸君の御援助を期待する次第であります。

維持費は一口五十圓とし、幾口にても御加入下さつて當方としては多々益々便ずるわけであります。維持委員諸氏に對しては、本研究所は十分にその御好意に酬ゆるの道を考へてをります。何事によらず人の好意に無償に縋らうとするやうな蟲のよい考へ方は――よしんばその目的が如何に崇高であらうとも――分析者の恥づるところでなければなりません。但し五十や百のはした金に一々代償を考へるとはあまりに神經質すぎると苦笑をされるやうな太つ腹な方々があるならば、必ずしも我々は代償をとつてくれなければ絶對に好意をも受けないと頑張るやうな偏屈人でもないと云ふことを斷つておいてもいゝです。とにかく原則としては御好意に報いる道を考へてゐます。それは本研究所關係の出版物（但し雜誌は別）は出版部の出版物なると否とを問はず、永く全部無償で謹呈する（從つてその總價は維持費を超ゆるの時期至るべきは當然）と共に、蒐集せられたる文献の閲覽權を認めることは勿論、その他、御希望の件は何なりと、當所の力に協ふ限り、應へたいと考へてゐるのであります。

維持費支拂は一時に全額を御支拂ひ下さるに越したことは御座いませんが、都合により分納にてもよろしく、但し一年以内に全納願上げたく存じます。

精神分析學入門講話（六）

シグムント・フロイド（K・O・生譯）

第三講　行り損ひ（續）

諸君。前講に於いて我々は、行り損ひを、行り損ひに依つて障碍せられた行爲との關係に於いて考察しないで、それ自身として考察しようと云ふ考へを持つた。そして行り損ひは、個々の場合に於いて、それ自身の意味を仄めかしてゐるやうに思はれるとの印象を受けた、また行り損ひに意味があると云ふことを大規模に確めることが出來るならば、その意味は我々にとつて、行り損ひが依つて以て起きる條件を調べることよりもやがて一層興味が持てるやうになると云つておいた。

一體、心理現象の「意味」とは如何なるものとして解すべきかを、も一度我々は定めておかう。意味とは意圖に外ならない。その意圖に從つて心理過程が生じたのであるから、また心理の連りに於いてその心理過程が占める位置も亦「意味」に外ならない。大抵の我々の研究に於いては、我々は「意味」の代りに「意圖」、「傾向」などを以てしてもよいのである。では、我々が行り損ひの中に一つの意圖を認識すると信じたのは、行り損ひの欺瞞的假象又は詩的昂揚であつたらうか？

我々はまづ云ひ損ひの例だけに局限して、多數のそのやうな觀察を一瞥して見よう。すると我々は直ちに、云ひ損ひの意圖や意味が明かに認められる如き實例の一大範圍を發見するのである。就中、云はんと意圖したのと正反對のことが出て來る云ひ損ひの多くを發見する。議長が開會の式辭で「ではこれから閉會と致します」と云ふ。それは意味極めて明白な云ひ損ひである。彼の云ひ損ひの意味と意圖とは、彼が會を開きたくなかつたと云ふに存する。「彼は何の氣なしにさう云つたゞけだ」と或る人は云ふかも知れない。我々はたゞ彼の言葉だけをとればよいのだ。そんなことはあり得ない、議長が閉會どころか開會しようと思つてゐたことはよく分つてゐる。

それに我々が最高の長官と認めてゐる彼自身としてもその開會の意志のあつたことを確言し得る筈だなどゝ抗言して私を邪魔して貰つては困る。そんなことを云つて來る人は、我々が云ひ損ひをまづそれ自身として觀察しようと云ふ考へでゐることを忘れてゐるのだ。云ひ損ひとそれを障碍した意圖との間の關係については、あとでお話しようと思つてゐるのだ。でないと諸君は論點を移動させる一つの論理上の誤謬を犯すことになる。英語で所謂 "Begging the question" を行ふことになる。

また別の場合には丁度正反對のことを云はないで、云ひ損ひに依つて正反對の意味が表現せられることがある。例へば「わが尊敬すべき先任者の位置を襲ふに私は仇せざる(慣せざると云ふべきところを)ものであります。」と云ふが如きである。「仇せざる」(geneigt)は「慣せ(geeignet)ざる」の正反對語ではないが、挨拶する人が正に云ふべきことゝに正反對の意味を鋭く表現してゐるのである。なほまた別の例に於いては、云ひ損ひは意圖せられたる意味に加ふるにまざまざと今一つの意味を以てしてゐるのである。その時の失言の文句は多くの文句の集合、簡約、凝縮の如くになつてゐる。例へば、或る婦天下の妻君が「宅は何でも私の思ひ通りに飲み喰ひをしてよろしいので御座います」と云つた。それは「宅は何でも彼自身の思ひ通りに飲み喰ひをしてよろしいので御座います」と云つたつもりらしいのだ。併し彼女の夫が何を飲み喰ひしたいと意志しよう。夫の代りに自らが意志しようと云ふのだ。云ひ損ひは屡々そのやうな凝縮の印象を與へるものだ。例へば、或る解剖の教授が鼻孔に就いての講議をした後に皆の者によく分つたかと尋ねたに對し、分つたと答へたところ、彼は續けてかう云つた、「どうも信ぜられんね。だつてこの町の幾百萬人の中で鼻孔の事の分つてゐるのは一本の指……いや、五本の指で數へるほどしかないのだからなあ」と。この凝縮せられた言葉には、それの分つてゐるのはたつた一人だけだと云ふ意味が含まれてゐるのである。

行り損ひがその意味を自ら表現してゐる一群の實例に對照して、また別の實例があつて、そこでは云ひ損ひがあまり意味を持たず、我等の期待に執拗に反抗する程のものがある。もし誰かゞ云ひ損ひに依つて或る固有名詞を歪めたり、或は妙な綴音を拵えたりすると、この屡々起る出來事に依つて、あらゆる行り損ひは有意味なものかとの問題は既に否定的な意味に決定せられるやうに思はれる。併しそれ等の實例を仔細に檢べて見ると、これ等の歪みを理解することは極めて容易だと云ふことが分つて來るのである。これらの曖昧な實例と、さきに擧げた

明瞭な實例との差はさして大きくないと云ふことが分つて來るのである。

お宅の馬の樣子は如何ですかと尋ねられた或る紳士が"Ja, das draut" と答へた。多分まだ一ケ月はかゝると答へたつもりであつた。何だつてそんなことを云つたのかと尋ねられたら。その紳士はかう說明した。彼は、「困つたこと(eine traurige Geschichte)」と云はうとしたので "draut" は "traurig" と "dauert" との凝縮であると。(メリンガー及マイヤー兩氏報告)

また或る他の紳士は自分が反對してゐる或る事件に就いて語り、やがてから續けた「併しやがてその事實は露見した。」と、その時彼は「露見した」("Vorschein") と云はうとして「ドロ見した」("Vorschwein") と云つた。彼はそれを「ドロ豚のやうな事」("Schweinerei") だと考へてゐたからだ。(右同兩氏報告)

さきに私は、未知の娘に向つて Begleitidigen しようと申出た青年の話をしたが、覺えてゐられる事と思ふ。我々はその言葉を勝手に、begleiten (お伴する) と beleidigen (汚辱する) とに分けたが、この解釋は別に確證を要するまでもなく確かだと我々は感じてゐる。諸君はこれ等の實例からして、これ等云ひ損ひのやゝ曖昧な場合とても、そこに二つの相異る話しの意圖の干渉、撞着に依つて說明のつくことを認められるであらう。これ等曖昧なものと先の明瞭なものとの區別は如何にして生ずるかと云ふに、それはたゞ、一方に於いては一つの意圖が完全に他の意圖の代りになり、そのために反對の事を云ふ云ひ損ひとなるのに對し、他方に於いては、一つの意圖が他の意圖を歪め或は變化させるだけに滿足し、かくして混淆が生じてそこに多少の意味が現れると云ふ點に存するのである。

我々は今や多數の云ひ損ひの秘密を把握したと信ずるこの洞察をしかと握つてゐれば、我々はなほ他の、これまで謎のやうであつた一群の行り損ひをも理解し得るであらう。例へば、名前が歪められて出て來ると云ふ場合には、相似て而も相異る二つの名前がせり合つて出て來るためだとは考へにくい。併し第二の意圖を嗅ぎ出すことはさして困難ではない。名前の歪みは、云ひ損ひとは別にしても、甚だ屢々生ずることである。その歪みは名前をいやな響きにしたり、或は何か卑しいものゝやうな響きにしたり、惡口の普通の種類となつてゐる。教養ある人々はさう云ふことは愼むやうに教へられてゐるのだが、併しなかなか思ひきれないのである。彼等もこれを今日もなほ「洒落」として用ゐてゐるが、何れにもせよ甚だ下品なものである。名前の歪みの野卑な醜い例とし

ては、或る人がフランス共和國大統領ポアンカレーのことを近頃シュワインカレー（豚カレー）ともぢつたことを擧げておかう。云ひ損ひに於いてもやはり、このやうな赤面させるやうな意圖の浸潤を認め得ることは勿論である。同じやうな説明を押進めて行くならば、滑稽な、或は矛盾した効果を持つた云ひ損ひの或る例を我々流に解することが出來るやうになつて行くわけである。「我等の上官の健康を祝して（auftossen）」と云ふところを「嘔吐して」と云つたのでは、思ひがけない言葉の侵入に依つて折角の祝宴が味氣ないものとなつたことであらう。さうして我々は侮辱や反抗の言葉の模範に從つて、强ひられた敬意に力强く反抗し、「そんなことは俺は信じてゐない、俺の本心ではない、あんな奴糞喰らへだ」などゝ云ふ外は何とも想像がつかないのである。これと全く同様なことは、無難な言葉から野卑な猥褻な言葉を作ることの云ひ損ひに適用出來る。例へば「アプロポス」から「アポポス」を作つたり、「アイワイスシャブヘン（蛋白質）」から「アイシャイスワイブヘン（排卵女）」を作る如きである（右同兩氏報告）

多くの人々は無難な言葉を故意に猥褻な言葉にもぢつて或る種の快感をとる如き傾向のあることを、我々は知つてゐる。それが即ち洒落や地口であるのだが、實際に於いて我々はさう云ふ人に就いて、それが果して彼の意圖的な洒落や地口であるか、或は云ひ損ひなのか訊いて見なければならないのである。（續く）

新舊心理學の相違に就いて

藤田由美

（はしがき）私はまだ講座を擔任する資格のないものであるが、自分の勉强の一端にもとて、英國の新心理學者A、G、タンスリー氏の『新心理學と人生』と題する一書を精讀して見た序に飜譯して見たところ、大槻先生

の加筆を得て講座欄に掲載せらるゝの光榮を得た。こゝに掲げたものは右の書の第一章の抄譯であるが、多少わが國の事情を參酌しつゝ敷衍したものである。初學のためには誠によくかんで含めるやうに書いてあると思ふ。

×

心理學は心の起原、構造、活動、表現に就ての科學である。個人心理の働は、意識的のものにせよ無意識的のものにせよ、單に機械的である處の行動を除いては、總ての人間行動の背後に存してゐるが故に、心理學は實際には人間生活の科學である。

それにも拘らず、舊心理學は實際に活きてゐるまゝの人間生活から分離されてゐたやうに見え、非現實的であるといふ感じが常に附隨してゐた。舊心理學は無限に錯綜してゐる人間の意見や感情や行動に對しては殆んど何の說明を與へることも出來なかつたし、また吾々總ての者が生活に於て直面する實際問題には殆んど役立たなかつた。そして事實上、舊心理學は、實際的効用に對してはあまりにアカデミックであり抽象的であり過ぎた。我々が新心理學（無意識心理學）の發展を理解しようとする前に、先づ、實際知つてゐるやうに、舊心理學が如何に、我々の實際見てゐる如き心理と心理の活動との解釋に失敗したか、その原因を一瞥せねばならない。

最近迄、心理學の重なる問題は、意識內容——卽ち我々が十分意識してゐる處の感情や思想——に殆んど限定されてゐた。またその唯一の方法は內省であつた。內省とは心理學者が彼自身の心理に於ける意識的思想や感情を記述し、分類し、然る後その結果を廣く人類の心に一般的なものとすることであつた。心理學者が何らか直接の知識を持ち得るのは彼自身の意識に就てのみであるといふことは明かだからだ。內省は常に心理學者の重要なる方法の一つであらねばならぬ。何となれば、心理學者は、他人が話や書いたもので彼等の心を告げるところを聞き、或は行爲や行動に於て見られる如き彼等の心理作用の結果などから、間接に他人の心を知ることが出來る。然し乍ら瞬間瞬間に彼が意識するまゝに直接心の働きを探り得る處のものは自分自身の心のみである。そして他人を觀察したその結果を吟味してみる爲には、必然的に彼自身の心と作用とを參考にするより外はない。この點で心理學は、科學の分野に於て獨特のものである。そしてその主題がこのやうに獨特のものであるために、その方法が全然內省に依存してゐる限りに於ては、心理學は極めて局限せられた意味しかないものとならざるを得なかつた。

このやうに局限界せられた意義しかなかつたゝめにそ

の結果として、舊心理學は意識的知覺作用及推理過程を過度に强調するやうになつた。そのために却つて心理を適度な距離からありのまゝに眺めることが出來ず、心理作用を眞に了解することが總べて困難となつた。純粹に推理的能力を偏重する原因の一つは、一階級としての心理學者たちの心理的傾向の中に見出さるべきである。內觀及び分析に可成りの興味及び能力を持つてゐないならば人は恐らく心理學者にはなれない。そして彼がこれらのものを持つてゐるならば、それは彼の推理能力が高度に發展して居り、それを活用することが好きであるといふことを意味してゐる。從つて彼が最初に分析する處の心、——彼自身の心——は純粹に推理的な過程が比較的高度に發達してゐる處の精神である。かくの如くして內觀的心理學者たちは一般の人間心理の中で推理的過程が演ずる役割を過大視しがちである。人を心理學者たらしめ得る能力そのものゝために、何か異常な材料が彼に與へられる。

然し乍ら人間精神に就いてのも一つ以前の考へ方に於ては、推理的能力を過信視する更に重要なも一つの原因があつた。推理の過程はそれの發展した形態に於ては、本質的には、心が十分に意識してゐなければならない處の過程である。然るに他方、それ以外の多くの心理過程に就ては、精神は確に十分に意識してゐないか、或は全然意識してゐない。それら心理過程の結果は意識せられるが、本當の性質は知られないか曖昧のまゝになつてゐる。そしてそれ等の結果は屢々眞實を穩す處の假面を附けてゐる。

半意識的か或は全然意識されないにも拘らず、我々の行爲及意識的な考の實際の原因をなす心理過程があるとの考へは、猶多くの人々にはぴつたりしない考へであるが、非常に重要な考へ方である。しかじかの行爲をしようとの決意を眞に十分に合理的に定めるならば、我々は必然的に、その決意に達するまでの過程に於けるあらゆる段階を十分に意識し、そしてそれらを明瞭に說明することが出來る。他方に於て我々は既に述べた通り、說明せねばならぬと感ずるが故に右と同じ行爲をなすことがあらう。而もそのやうに感じた心理過程に就ては何等明瞭な說明をすることが出來ない場合が屢々である。或はまた出來ると思つてさへゐても、その說明は間違つて居り、事實我々の行動を惹起せしめた實際の心理過程を說明し得てゐない場合が屢々である。我々が問題の過程に就いて、少くとも明瞭にして且滿足し得る如き說明を與へることの出來ない原因は、それが非合理的な過程であるが故に必然的に意識にまで決してもたらされないため

である。行動に迄導いた所の根據について誤つた說明を與へるのは、一般に、眞の根據に就いては我々は無意識であるが故にそれの代りに、別の根據を作り上げてそれだと云つてゐる如き場合である。この「理窟づけ」の過程は極めてありふれたことであつて、實は殆ど普遍的である。我々とても大抵は、もし大膽に內省して見るならば、我々自身の中に「理窟付け」の例を見付けることが出來る。また若しそれほど大膽な自己內省が出來ないならば、我々は少くとも他の人の中に理窟附けの例を見付けることが出來る。さう云ふ例の見附け出し易いのは、その行爲の原因が半ば意識されてをり、あまり骨折らずに意識に上せることが出來る場合である。然し他の場合に於ては、眞の原因は全く匿されてをり、とても近づき難いことがある。で、特殊な方法をとらなければ意識にまで持ち來すことは出來ない。

近代の研究に依つて無意識的な精神過程が極めて重要性を帶びてゐることが分つた。そしてその無意識を、また無意識の意識への關係を、我等は大いに問題にしつゝあるのだ。一方、舊心理學が、內省に依つて心の作用を說明しようとの試みに於いて、十分に意識的合理的過程に依つて行はれる部分を過重に評價せざるを得なかつたこと、從つて內省の注視から全部或は一部分のがれる處の不合理な心的過程に依る部分を看過せざるを得なかつたことは、正にさもあるべきことである。

心的過程の知識に於て近年に爲された廣大な進步は、我々の心理生活に於て非常に大きく根原的に役割を果してゐる非合理的過程の認識や分析に存してゐることは確かである。これらの進步は主として、知識の進步に於ける二つの大きな道が開かれたゝめである。――第一の道は人間心理認識の生物學的方法と呼ばれる處の進化論の影響の下に起つたもの、第二の道は極めて最近になされた異常心理過程の理解――精神病理學――の廣大な進步である。

有機的進化上の問題としての人間心理の取扱は一八七一年に出版された『人間の由來』中にダーウヰンに依つて始めて說かれた。ダーウヰンは、心理の働きに於ては人間と高等動物との間に根本的相違のないことを示さうとした。そして彼は確に人間の心の働きと動物のそれとの間に非常に强固な連續のある事實を確證した。有機體は進化するとの信念が一般化せられて以來、人間精神の進化が多くの人類學者や心理學者に依つて硏究された。その結果文明人と原始人とに、或は高等動物とに共通する心理特性は人間心理の中に、根本的重要性を有するものとして段々認められて來るやうになつた。よしんば自

意識や倫理感の發達、藝術鑑賞力や抽象推理力や實行力などの進歩はそれ以後に比較的表面的に生じて來たにもせよ。勿論、これら後代の進歩は重要でないと吾人は云はうとしてゐるのではない。反對にそれは人間に取つて人間たるべき最も重要な特質である。何故ならそれは人間の心を動物の心と別ち、猶その中に過去の業績や未來の發展の希望が横はつてゐるからである。然しそれらは相對的に表面的であり、そして廣く無意識と非論理的本能——原始人からそして人間以前の先驅者から受けついた慾望情緒——の上に建てられてゐると云ふ事實には依然變りはない。この相續せられた基礎は多くの我々の生活の重要な出來事を決定し、そして明かにそれと認め得る方法に於てのみでなく、我々が全く無意識である處の多くの方法に於て、出來事の總てに影響する。基礎の重要性を輕視し或は無視することは、心理の構造や活動の眞の理解を不可能にするが故に、人間生活が實際如何に決定せられてゐるかの理解を不可能ならしめる。

精神病理學最近の研究はその偉大な進歩をジャネー、フロイド並びにユングに負ふてゐるのであるが、彼等の研究に依つて從來分らなかつた多くのことが發見せられた。そして二、三の根本的に重要な、心理學にとつて價値ある概念が齎された。そしてこれらの概念に依つて心理學の理論に新しい發展が促された。最も重要な一般的結論は、ヒステリー症や精神症の場合に見る如き心理の異常な活動は、正常の健康な心の必須の部分を形づくる機能の特性が極端に不均衡に發展したものだといふことである。これら病理學的發展の光に照らして、この結論の原理のもとに、正常の心理の最も不可解な現象を解釋出來るやうになつた。かくして肉體の組織及機能の病理學の發展が正常の生理學過程に光を與へたと同樣に、心理の機能や構造に一層深い洞察を與へしめた。

かくして新心理學は人間心理を高度に發展した有機體として見る。その最も根本的な特徴に關して云へば、その心の所有者の必要に適切に順應する有機體としてこれ等の必要の不斷の關係に於ける長き進化の過程の間に構築せられ、洗練せられたる有機體として見る。併しこの有機體は近代文明生活の急速な發展や急速な變化の要求に對しては適應力を缺いてゐることを最も屢々示すところのものである。意識的推理の力は後年の發達に係るものであつて、それは、最も高度に發達した人間に於いてさへも、云はゞ本能感情や情緒的願望の頑丈な構築物の表面を形作るに過ぎないのである。多くの場合、合理的活動は一見重要らしく見えるけれども、それは錯覺であつて、謂はゞ深く根ざしてゐる本能と慾望の單なる外被

に過ぎないのである。

新心理學はその資料を、通常及異常の心理生活の全野から得て來る。外部からの觀察から、內省から、行爲や行動の研究から、藝術、文學、實際生活、神話、歷史、原始人の行爲、習慣、最も進んだ文化的行爲、習慣等から得て來る。既に人間心理の解釋に向つて條理整然たる。輝かしき進步は堂々となされつゝある。

また未來に於ける探究の分野は無限である如く思はれる。同時に、價値ある資料の大半は未だ科學的に殆んど發掘せられては居らず、いろ〳〵見解の相違があり、何れとも解釋し得る餘地あるものも存するといふことは認めねばならぬ。（完）

精神分析學語彙（三七）

一、相反並存の葛藤（Ambivalenzkonflikt）——相反並存的な心境の諸成とが特別の高度に達し、或は他の何らかの根據から自我の中に入り込んで來ると、愛憎二種の要求の間に葛藤が生ずる。それをアムビバレッンの葛藤と呼ぶのである。このやうな葛藤が如何成り行くかはさま〳〵であらう。對とに對する陰性的（憎惡的）感情は抑壓せられ、陽性的愛情的感情が强化せられることがある。さう云ふ場合には、對象に對する極端な感傷愛や配慮が生ずる。このやうな事情は多少とも、ヒステリーに於いて典型的に見られる。併しながら或はまた自我が對象愛敵視的態度に對して防禦するために性格變更を試みることがある。この性格變更は、陰性的（憎惡的）態度を以て對象に臨んだことへの反動形成が常住化一般化したわけになる。そこで善良な、優しい同情的な性格が出來上る。また本來の對象の代償に向つて憎惡が轉位せられることもある。這般の事情は屢々强迫神經症に於いて見られる。併し大抵の場合、相反並存の葛藤の全體は代償的對象に移り行き、これを恐怖症的に回避するやうになるものである。

一、アメンチア、急性幻覺的錯亂（Amentia）——一種の精神病であつて、あらゆる感覺分野に集團的な幻覺が起こり、錯亂狀態に陷るものを云ふ、フロイドに依れば、アメンチヤは最も極端にして且つ最も顯著なる精神病の形態である。心理學的に說明を下すならば、これは外界知覺の心理裝置からリビドーが大量的に引上げられ、外界の影像を表象する內部的な力の參與も同時に引上げられてしまつた結果であると云ふことになる。同時に自我に依つて新たな世界がエスの願望亢奮の意味に於いて構築せられることになるのである。外界との絕緣の心理學的動機は現實に於いて願望の拒否せられることが堪え難いことに思はれることにある。幻覺的錯亂は明かに願望的空想として認識せられ得

る。

一、健忘症（Amnesie）――局限せられたる記憶障碍を云ふ。フロイドの發見に依れば、ヒステリー症候形成に導いたところの出來事は、記憶の外に閉出されてゐる。また大抵の場合、ヒステリー發作に對して健忘症それ自身が存在してゐる。健忘症の條件は如何と云ふに、忘れられてゐる出來事は本能感情的な根源のために、就中、それを想起することが不快であり堪え難いがために、記憶外に葬り去られてゐると云ふに存するのである。神經症的症候と關聯するあらゆる健忘は抑壓がその原因である。健忘の內容は常に性的性質又は攻撃的性質のものであつて、それでなくとも性的又は攻撃的な本能充奮と最も密接な關係を有するものである。幼時期記憶の大部分が失はれてゐることは幼兒期弱健忘分名付けられてゐるが、それは決して幼兒期の精神機能が劣等なるためを以て說明し得べきものに非ず、それは性的又は攻撃的な本能力との關係から說明せらるべきで、從つてこれもヒステリー性の健忘症と同じく、記憶內容の抑壓として說明せられねばならない。また現に、幼兒期健忘の大部分は、精神分析に依つて引出すことが出來、それは性的又は攻撃的な性質を多分に帶びてゐるのである。實は一切の後年の本能感情生活に條件づけられたる健忘も、云はゞ幼兒期的健忘の連續又は派生の如きもので、健忘せられたる內容は幼兒期のそれと關聯するところが多い。精神分析の役目は、その健忘を開發するにあるとさへ云へる。正にその名に價する分析とは幼兒期健忘を出來るだけ早期に亙つて發掘することにあるとフロイドは强調してゐる。

一、双混、アムフィミクシス（Amphimixis）――生物學者ワイスマンは受胎に際して兩個人の性殖細胞が混合することをアムフィミクシスと名付けたが、フェレンチーはこれを性心理學的な意味に轉用して、摩擦及び射精の過程に、肛門的（保留的）及び尿道的（射出的）の兩傾向が結合せられ互に層々階段づけ合つてゐることを指摘した。このやうにして男子に於いては尿道性感と肛門性感とが性行爲に於いて一致するのであつてかくの如きを部分本能のアムフィミクシス双混とフレィンチーは名付けたのである。

――未完――

大槻憲二著・本研究所取次
社會生活法（第三版新刷）
人心觀破・明朗生活への道・新時代の科學的修養書。精神分析通俗入門書として適當。
定價一圓拾錢・送料十錢
四六版函入紙裝

内外彙報

イェーケルス博士からの書翰

延島英一氏がその譯著『ナポレオンの精神分析』を原著者イーケルス博士に贈り手紙を添へて挨拶せられたところ同博士から早速次の如き懇篤なる禮狀が來た。

×

貴下のお手紙と私の「ナポレオン」日本語版二冊を受取つて、私はどんな嬉しい驚きを感じたでせう。私が貴下の名文も國語も讀めぬことは非常に殘念です。私は、たゞ裝幀の美しいのに感嘆するばかりです。私にとつてこの裝幀は、日本人が異常に纖細な趣味を持つてゐることの新しい證據です。次にお手紙について申し上げます。私は生來謙遜な人間ではありませぬが、お手紙の親切なお言葉は、私の能力と價値を誇張し過ぎてゐると感じます。しかしその誇張にもかゝはらず、貴下のお手紙には、測ることのできぬ一つな偉大な「ドキュマン・ユメーン」たる點があると思はれます。すなはち純粹で貴重な人間性の證據を見る思ひがします。それは現在の困難な時世には極く珍らしいことですから、私はその點で特に感謝に堪へません。大槻憲二氏にもよろしくお傳へを願ひます。

一九三八年十一月二十三日

ニューヨーク市、ルードキヒ・イエーケルス

『精神分析季刊誌』昨年度第四册

一、「精神分析技法の問題」オットー・フェニヘル（ロス・アンジェルス）――

一、「急性强迫症的憂鬱症患者の描ける繪畫の分析治療上の利用」エリクスン及ロレンス（ミシガン及ニウヨーク）――

一、「神經症患者と正常者との境界線上にある病者の精神分析的研究」アドルフ・スターン（ニウヨーク）――

一、「自殺、妊娠並びに再生」ベチナ・ウオアブルグ（ニウヨーク）――

一、「二歳四ケ月の嬰兒の夢の觀察」マーチン・グロートヤーン（シカゴ）――

一、「男兒の打擲空想の豫備段階に就いて」エドムンド・ベルグラー（ニウヨーク）――

「、「自我の機能に於ける防禦及び綜合」トマス・フレンチ（シカゴ）――

一、新刊批評――

『メニンガー診療所報』

米國のカンサス、トペカに於ける精神分析的精神病診療所はメニンガー博士の經營するところであつて、隔月に所報を發行し本誌とも毎號交換してゐるが、今日まで內容紹介の機會がなかつた。こゝに最近號二册の內容を紹介しておく。

昨年九月號は第二巻第五號に相當し、「ショク療法特輯號」とし、精神分離症及憂鬱症に對してメトラゾールを使用して結果に就いてのメニンガー博士の報告が卷頭をかざり、その他三氏が類似の問題に就いて報告してゐる。

昨年十一月號はバーナード・カム博士が『抵抗の問題』に就いて論じ、次にダグラス・オア博士が神經症兒童の分析例に就いて報告し、第三に所長メニンガー博士が「醫學のシンダレラ」と題する隨筆を寄せてゐる。その他新刊批評雜報。等。

國內關係時事

▼『中年期の婦人に何故離婚が多いか』と題して、二月六日の東京朝日定庭欄に米國ニウヨークの分析者レアマン博士の說が紹介してあつた。

▼大槻憲二氏近業一束報告——

一、性格改造法——『人生創造』一月及二月號。

二、豐臣秀吉の外征——同誌二月號

▼『新聞と漫畫』高山カ也氏稿——「現代新聞批判」二月一日號

▼延島英一氏近業一束報告——

一、亡命ロシア人の社會主義運動と其將來（國際評論十一月號）

二、ソ聯獨裁政治と自然科學（科學知識一月號）

三、ソ聯に於ける新階級の成と（法政大學新聞一月二十五日號）

四、スペイン內亂の敎訓（日本學藝新聞二月一日號）

五、バルセロナ陷落後のスペイン（セルパン三月號）

六、The Sino-Japanese War and International Labor（ニューヨーク市發行インタナショナルレビュウ十二月號）

七、La Guerre Sino-japonaise et le Proletariat International-（パリ市發行ルリベルテール十二月五日號）

▼本誌前號（冊子）及び前々號（正誌）の內容に關してはその廣告面を參照ありたし

フロイド賞贈與式

昭和十三年度フロイド賞贈與式は研究會一月例會の內に擧げられた。即ち十六日午後五時半から例によりアメリカン・ベーカリで催された。食前、大槻氏からまづ北山隆氏がその論文『夏目漱石の精神分析』に依つて今回のフロイド賞を受領するに至つた經過を報告あり、序に從前の二人の受領者に就いての批評的言及もあつて、やがて、岩倉公が手づから賞狀、賞牌（目錄）及び賞金を渡された。その瞬間、居並ぶ會員諸君は心からなる祝福の拍手を送つた。續いて北山氏は立つて、今回の受賞を謝し、先輩及び友人諸君に向つて今後の指導と激勵とを希望し、慇懃な態度を以て挨拶を述べられた。

それから續いて祝宴に入り、詮衡委員三氏寄贈の酒を互に

淺酌しつゝ、北山氏の業績を祝福すると共に、新年の慶びをも互に分つた。食後の菓子は岩倉公夫人の御寄贈に係るものであつた。夫人が特に本夕出席せられたことは北山氏の深く光榮として感謝すべきことであつた。

やがて九時頃、會場に於いて紀念撮映をなしたが、その寫眞は本號巻頭に掲げてあるから、御一覽を乞ふ。

なほ當日の研究談は、小杉長平氏の相反並存性に關する話、小山良修氏の岡山縣下に於ける三十六人斬り事件に就いての話、高橋鐵氏のチヤプリン論、大槻氏の心理經濟法に關する研究などあり。その他、霜田靜志は子供を叱ることの可否に就いての問題を提出せられ、田中虎男氏は求めず爭はぬことの心理經濟法を說かれ、北山、北垣兩氏は兩親再教育の方法に就いて問題を提示せられた。

出席者は右言及諸氏の外に、倉橋久雄、藤田由美、大槻岐美、長崎文治、同靜枝、長田耕一、崎塚茂明、黑澤敬次の諸氏であつた。なほ立川玄一郎、大久保眞太郎、宮田戊子の諸氏からは鄭重な缺席挨拶があつた。

本研究所講習會例會

一月例會は九日夜、研究所に於いて催され『宗教の將來』第三、第四、兩章を精讀研究した。

第二章までは文化一般の心理的内容に關する批判であるが第三章からいよ〳〵宗教の心理的内容に關する批判に入る。

即ちこの章は、宗教的觀念の價値と、神の觀念發生の心理的起源を論じてゐる。

人間の無力の自覺と自然の暴力の認識との間に生ずる人間の不安を何とかして自己にまぎらさうとするために、人間はまづ自然を自己と同質のものであると考へようとした。異質のものであるならばこれを處置するに見當がつかない（即ち恐ろしい）が、同質のものならばこれを處置するには何でもなくはないまでも、少くとも非常に恐ろしいと云ふわけではない。これ即ち八百萬の神、自然神、即ちアニミスムスの生じた所以であるが、やがてそれ等が一つに統合せられて單一神となり、自分の幼時に於ける庇護者たる父の觀念と神の觀念とが合一することゝなつた。これは宗教思想發達史上に於ける一大エポック、メーキングな事件であつた。

第四章は右の論述への自己批判、又は自己懷疑を試みつゝ一神教的な神の觀念に於ける幼兒性と原始性との合一を論證してゐる。かくしてフロイドが『トーテムとタブー』の中で論じた宗教觀とこの書に於ける宗教觀の矛盾しない所以を明かにしたのである。

會後、分析的な雜談を交しつゝ茶菓をとり、また寒夜であつたからうどんを喰べて暖をとつた。お茶は福岡市の特別誌友、文献維持委員たる野村泰氏寄贈の銘茶玉露であつた。出席者は梅木米吉、北山隆、北垣照雄、田中虎男、大場巖、藤田由美、延島英一、塚崎茂明、馬場由子、高橋鐵、大槻憲二

等の諸氏であつた。大槻岐美氏は病氣のため缺席せられた。

×

二月例會は六日夜、同所に於いて催され、同書第五第六、兩章を研究した。出席者は右の諸氏（高橋氏以外）の他に宮田戊子、倉橋久雄、大槻岐美、小林一の諸氏であつた。

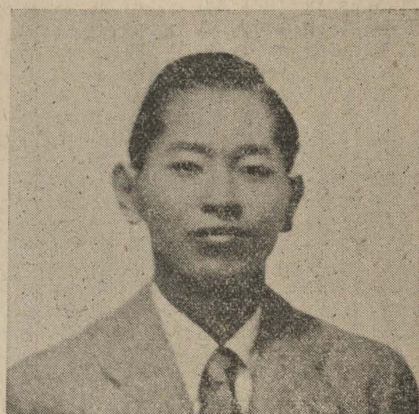
第五章は「宗教的ドグマとその證明の困難」とでも題すべき章であつて、まづ宗教的ドグマが如何なる性質のものであるかを研究してゐる。それは云はゞ祖先の信じたものであるが故に、我等も無條件に信じなければならないと云ふことである。併しこのやうな命令が徹底するためには現代人の理性はあまりに解放せられ過ぎてゐるために、そこで理性の批判の前をすりぬけてドグマを支持するための三種の努力が拂はれてゐる。その第一は、神靈學であつて、彼等は靈魂の不滅を證明せんとして彼等自身が亡き人の靈を呼返す能力を有することを實演して見せる。第二の努力は或る神父の「不合理なるが故に我信ず」と云ふ宣言である。信仰は理性より上位にあると云ふ意味であるが、併し不合理なるものは理性の上位のみならず下位にもあると云ふ事實は如何ともすることが出來ない。第三は「かのやうに」の哲學である。總て眞理とせられるものは實際的な動機から我等これを眞理と認めるかのやうに振舞ふのだから、ドグマもその一種としてそれでいゝのだと云ふ結論に達するかも知れないが、これは一つの「かのやうに」（眞理）が崩壞して他の「かのやうに」（眞理）が擡頭する必性を證明することが出來なくなりはせぬか。それにしてもドグマがドグマとして今日まで持ち續けて來た力は何處にあるか。その點を尋ねなければならない。そこで

第六章は「宗教的ドグマ受容の心理的根據とその矛盾」に就いて論ずべき段取りとなる。まづ宗教的ドグマは一種の錯覺であるとすればまづ錯覺と誤謬との區別が立てられなければならない。錯覺は必ずしも誤謬ではないが願望に基いてゐる。願望に基いたものが客觀的に眞理として妥當たると考へることは錯覺である。客觀的眞理ならば我々がそれを願望しなければならないと云ふのは矛盾である。

今後小林一氏の北支轉戰中の種々のと析的觀察談があつて、非常に有益であつた。また種々有益な材料をお土産分して持參せられた。

伊東豐夫氏の逝去

本研究所員伊東豐夫氏は久しく病氣中のところ、一月二十七日遂に長逝せられた。氏がなほ若冠にして、豐富な才を抱いてこゝに空しく逝かれたことを我等はわが國の精神分析界のために痛惜するものである。氏は東京帝大赤門前美滿津運動具店主伊東虎夫氏の令弟であつて、武藏野高等學校在學中病を得て通學を廢し、その頃學び始めた精神分析學に全身の興味を傾注し、本研究所創立當時及び本誌創刊當時には、熱

心に盡力せられたが病勢重つて少時本誌への寄稿をも絶つてゐたが、本誌第一巻中には氏の論文譯稿などが相當量に登つてゐる。氏の最大の業績は恐らくフロイドの「何故の戰爭か?」を譯せられたことで、これは本誌第一巻第七號巻頭に掲げられ、またフロイド全集第四巻『快不快原則』の巻末に同文は再收せられてゐる。この譯文と共に、君の名は長くわが國の精神分析學史上に輝いてゐることであらう。再び云はう、氏は學者的と云ふよりは如何にも天才らしい分析者であつた。

文献維持委員制について再言

文献維持委員の募集は昨年十一月末を以て一先づ締切つたのであつたが、その後、新潟縣の谷内正夫氏が是非加盟したいとの申出をなされたので、快くお受けしたところ、その他にもなほ二三同樣の希望を有せられる方々のあることを知つた。我等は、必ずしもこの募集締切を期限するには及ばぬことに思ひ至り、こゝに更めて募集期限の締切を撤廢し、永續的に御厚意ある方々の御加入を待つことに致しました。それ故何卒、その意のある方々の追々多く御參加下さることを心より懇願してやみません。詳しくは八十一頁廣告欄を御參照あらむことを希ふ。

通信

御元氣で御活動の御事と存じます。越後の山奥である當地は、すでに七寸位の雪に閉ぢこめられてゐます。でも小生頗る元氣毎日雜務に追はれて居ります。

私達の身邊を見ると、まだまことに分析を學ぶこと淺い私から見ましても幼兒的な人のあまり多いのに驚ろきます。それと同時に私の近親者の中にも分析を受けさせたい人が多くて困ります。早く斯の學問が發達して越後にも新潟、長岡位には分析醫をほしいものと切に思ひます。自分にその才能があつたらと思ふ事さへあります。しかし考へて見れば私自身まことに分析されざるもの、殘念です。

こんな事がありました。昨年夏上京しました時實は東京遊

學中の弟と駒込の研究所を訪ねて行つたのでしたが、研究所の塀を見て、その前を右往左往したゞけで遂に門をたゝく氣になれずに戻つたのでした。上京する時には大いに期待して行きましたのに。少なからざる劣等感が私にあるものと思ひます。

こんどの新館はどんなでせうか。又私の劣等感はいくらか直つたでせうか。何れにせよ今度上京の折は是非研究所を訪れて見たいものと今から考へて居ります。

それから私の亂筆癖。これは如何なものでせう。字をていねいに書く事が出來ないのです。字がまづいばかりではないやうです。私には未だ分析出來ません。

これからスキーの季節です。スキーがなかつたら雪國の冬は、まことに淋しいものと思ひます。スキーの快味や雪山の魅力については、大槻先生のいつかの分析を思ひ出します。

長くなりますからこの邊で筆を擱きます。

時節柄御自愛の程祈りあげます。（新潟縣、谷内正夫）

×

病氣も追々恢復いたしましたに就いては「社會生活法」や「立身道」は大いに元氣づけてくれますし、また忠告を與へてくれます。腰折一首「移り來し家は春光みちみてる」

（大阪、久下貞夫）

前號正誤表

頁	行	誤	正
表紙一	………	セガンチニ氏	セガンチニ作
同	………	岩倉具榮作譯文	岩倉具榮氏譯文
六	一一	まだ	また
八	二	意議	意義
一〇	一〇	一時	一方
一一	四	大きくもて	大きくても
一二	六	拙稿	拙著
二九下	五	無意）識	無意識）
七九下	一〇	特たない	持たない
八〇上	一七	さう、でなく	さうでなく
八六上	四	石原紙	石原純氏
九五下	三	勞動	勞働
九九下	四	他人や	他人の

フロイド精神分析學全集

第五卷

性慾論・禁制論

矢部八重吉譯

（口繪）一九三〇年のフロイド像（寫眞）第三版　（定價）一圓八十錢

この論文を讀んで、その人生觀に根本的革命を經驗しない人は稀であると云はれてゐる。（大槻）

性說に關する三論文

第一論文、性の錯綜――性對象に關する變態。同性愛、性的未熟者及び動物を相手とする場合、性目的に關する變態、解剖的違反、豫備的性目的の定着。あらゆる變態に就いての一般論、神經症患者の性本能。部分本能と性帶域。性的變態が外見的に目立つ場合。幼兒性感。

第二論文、幼兒の性感――幼兒期の性的潛在期とその中絕。幼兒性感の顯現幼兒性感の性目的。性的顯現としての自慰。幼兒の性的詮鑿。性組織發達の諸段階――幼兒性感の源泉。

第三論文、思春期に於ける性感の變化――性器帶域の主權と豫備快感。性的亢奮の問題。リビドー說。男女の別。對象發見。

論旨要約――

禁制と症候と不安と

全篇を十一章に分ち、不安神經症を細かく研究せる名論。

春陽堂發行・東京精神分析學研究所取次

本郷區動坂町三二七
振替東京七-八八一七一番

本稿の單行本化に就いて

本稿は本誌に連載すること既に十餘回、諸方面で熱心に精讀せられてゐることは、讀者諸賢からの旺んな感謝的反響によつてよく分ります。纒めてよみたいから早く單行本にしてくれとの要求が連りでありますので、出版部では近い內に愈々その着手を決心いたしました。誌上に揭げない部分も澤山にありまし、ベルグラーの「處女性心理の問題」（大槻氏譯）も獨乙原文共附錄いたします。或は一般店頭には出さずに直接購讀者にのみ配布いたすことになるかも知れません故、何卒前金にて御申込み下さい。定價一圓八十錢のところ、前金申込者に限り一圓五十錢送料十錢に割引いたしておきます。

フロイド先生額面用肖像畫頒布

英國の世界的心理學者マクドガルをして、その立場の相違の誇りをかなぐりすてゝ、「實にアリストテレース以來の大心理學者」と讚仰せしめたわが精神分析の父祖フロイド先生の肖像寫眞。諸君の書齋に揭げて碩學の功績を謝するも亦、文化人の一つの誇。

定價一圓五十錢。特別誌友には一割引（送料共）

(附　録)

Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Edmund Bergler

冷感症とその治療

ヒッチマン博士・ベルグラー博士・共著

高水力太郎譯

(十一)

—目　次—

第一章—總論　女性の對男性心理（第五卷・第四號）

第二章—一、女性性感の發達（第五卷・第五號）

二、女子性生活の特質（第五卷・第六號）

第三章—一、冷感症の概念、症候論、並びに程度（第六卷・第一號）

二、冷感症に特殊なる諸形式（第六卷・第二號）

第四章—冷感症の分析治療二例

第五章—冷感症の豫防及び處置

編輯後記

心理經濟の研究號として問題はなほ他にいくらもありませうが、本誌としては出來るだけの事はしたと信じます。卷頭五十枚の大論文は經濟學界にも多少の反響を及ぼしてよいものだと思ひます。東大の經濟學部は勉强そちのけにして大騷動をしてゐるが、民間學徒はこのやうに研究を怠つてゐないと云ひたい。

×

宮田戊子氏の芭蕉研究は愈々進捗して來ます。每號五十枚の連續執筆、その勞を多とすべきでせう。

大槻氏の時評『文化と戰爭の問題』は筆者近來快心の時評文ださうです。

×

表紙にフロイド賞牌の寫眞を揭ぐべき筈のところ、作者高村光太郞氏が名匠の常としてあまりに凝り過ぎて遲れ、今月には間に合ひませんでした。次號に間に合つて欲しいと思ひます。あしからずお許し下さい。

×

前號冊子、大槻氏稿『自尊心の崩壞と再建』の中に眞船豐氏原作映畫『大陽の子』の原作戲曲は『裸の町』だと書いてありましたところ、これは大槻氏の記憶違ひで、原作戲曲も同名であることを梅木米吉、倉橋久雄兩氏から御注意がありました。こゝに訂正報告いたすと共に兩氏の御厚意を謝します。

×

最近の特別誌友加盟者諸君の御芳名を左記御支援の御好意を謝します。

▲大阪市　島岡正雄氏
▲埼玉縣　中島太隈氏
▲神田區　長尾忠氏
（高橋鐵氏紹介）
▲函館市　最上司氏
▲淀橋區　福家愛氏
▲大阪市　平田惠一氏
▲臺南市　森寧親氏
▲葛飾區　淺田砲雄氏
▲神奈川縣　保田耕太郞氏
▲大阪府　三根剛四郞氏
▲新潟縣　內山泰信氏
▲小石川區　松原茂氏
▲豐島區　元吉良治氏
（大場巖氏紹介）
▲淺草區　鈴木正平氏
▲仙臺市　森谷長平衞氏
▲群馬縣　根岸一朗氏
▲京都市　武浦徹剛氏
▲秋田市　小野原一路氏
▲淀橋區　小島健氏
▲新潟縣　涌井儀八郞氏
（谷內正夫氏紹介）
▲大阪市　城上滋氏
▲京城府　沖元保之氏
▲本鄕區　中川牧平氏
▲荒川區　長谷川正義氏
（鹽山四郞氏紹介）

×

豫約募集中の近刊書『冷感症とその治療』は三月中旬又は遲くも下旬には出版になりませう。無暗な人に讀ますべきものでもありませんから、或は豫約者にのみ限定して販賣することになるかも知れ

ません。只今のところまだ確定してはをりませんが、精選せられた讀者を期待するものであります故、御希望の方はなるべく豫約御申込み下さい。

×

本誌前號正誌に掲載した分の『冷感症』は一一三頁以下組違ひがありましたので、本號で組みかへ再掲載しました。で、多少重複しましたが、御諒承下さい。

×

大槻氏著『續・戀愛性慾の心理とその分析處置法』は今夏又は秋頃の出版になりませう。

×

本號から國策線に添ひ多少減頁しましたが、冊子がありますので、實質上殆ど同じであります。諸式高騰のため誌代を値上しようかと思ひましたが、誌代はやはり据置きとしての苦衷、御諒承下さい。

☆

次號正誌特輯は『**性處置の問題**』といたします。性の問題は何としましても人間生活の重大な根柢をなすものであり、且つ分析學の分野に於いては特に多くの興味ある研究成果が上つてゐますので、今後もこの方面の研究はなほ續々試みねばなりません、讀者からも毎々その要求が編輯部に向つて發せられます。

只今ほゞ確定してゐるのには、オナニーの問題と同性愛の問題とがありますが、なほ女流分析家の天才メラニエクライン女史のこの方面の論文を紹介し得る筈だと思ひます。どうぞ、御期待下さい。

附錄の『冷感症とその治療』連載は本號を以て打切り、あとは單行本に委讓することになりましたが、續いてフランスの分析學會前會長ルネ・アランデイ博士の好著『夢の研究』が延島英一氏譯により連載せられることになりました。これは實例豊富で讀物としても頗る興味深いものであります。

▼昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
▼昭和十四年二月廿五日印刷
▼昭和十四年三月一日發行

(月刊) 定價 五十錢
(外地定價) 五十五錢

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人 大槻憲二
千葉市長洲町二ノ七
印刷所 千葉印刷株式會社

定價一部 五十錢
半年分 一圓五十錢(送料共)
一年分 三圓(送料共)

御註文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館・北隆館・(大阪)福音社

合本 單册「精神分析」（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」＊
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一卷・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）」＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二卷・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

第二卷・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
（合本としては品切）

第三卷

第一號（同　十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」＊
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
（合本としては品切）

第四卷

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

第五卷

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金三圓（送料十五錢）

＊は合本としては品切、その他は在庫す、單册代價送料共各五十錢

『精神分析』第六卷 合本內容

第一號（一、二月號）夢と象徵（正誌）
第二號（三月號）文藝と繪畫（正誌）
第三號（四月號）東洋醫學と分析（冊子）
第四號（五月號）處女性の問題（正誌）
第五號（六月號）斷種法と優生學（冊子）
第六號（七月號）貞操の心理（正誌）
第七號（八月號）受分析者の心得（冊子）
第八號（九月號）自己愛の研究（正誌）
第九號（十月號）分析學邦文獻（冊子）
第十號（十一月號）神經症研究（正誌）
第十一號（十二月號）分析學の勸め（冊子）

▲合本は送料共三圓五十錢▲單冊は正誌一部五十錢
冊子十錢（何れも送料共）

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。
一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。
一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。
一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。
一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

名大教授
醫學博士 杉田直樹
慶大教授
醫學博士 植松七九郎
日醫大教授
醫學博士 齋藤玉男 共著

新刊

頭腦の健全

○我國精神醫學の權威者共著！頭腦明晰の原理は此一卷に盡く！

●精神の衞生、頭腦の健全を欲する者は賣薬を購ふ前に先づ此の權威に聞け！

近代生活と頭腦の衞生 ○文化生活と神經症○享樂生活と腦の衞生 ○**神經衰弱の本態及治療**○文化生活と神經衰弱○學生の神經衰弱と豫防 ○神經衰弱本態○ 心的抑制○不足不滿感情○劣敗感情○不安感情

○**强迫觀念症**○赤面恐怖症○ヒステリー○願望神經症○**睡眠と不眠**○不眠の種々○不眠の手當○休養と睡眠○頭腦と食物○藥劑と頭腦の關係○運動と精神衞生○娯樂と頭腦の衞生

○**頭腦明晰の生理的方法** ○思考作用と素質○血行と思考の關係○讀書○ライプニッツ讀書法記憶の增進

內容一般（四六版上製）

定價金壹圓（送料八錢）

發行所 東京・小石川・大塚窪町一八 精神衞生學會
振替東京六五四六五番 電話小石川五四一二

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十四年二月廿五日印刷納本
昭和十四年三月一日發行
毎月一回一日發行
精神分析 三月號
定價五十錢・外地定價五十五錢

VII. Jahrgang, Heft 3-4, März—April, 1939. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Hefttitel: Die Seelenökonomie)

INHALT

Studien

Materielle Ökonomie und Seelenökonomie ... ... Kenji Ohtski
Psychologische Beziehungen zwischen Dichter Basho und seinen Schüler ... ... Bosi Miyata
Giovanni Segantini (*K. Abraham*) ... ... Tomohide Iwakura
Psychoanalyse für Pädagogen (*Anna Freud*) ... ... Hitosi Miyata

Kritik und Methodik

Psychopathologie bei ökonomischer Welt ... ... Rikitaro Takamizu
Wie kann man Schmerz überwinden? ... ... Simada Okumoto
Weib und Liebe ... ... Masao Sinohara
Symbolische Bedeutung von Schwert... ... ... Shujitsu Tutiya
Kultur und Krieg ... ... Kenji Ohtski

Varia

Lieblosigkeit als Seelenökonomie ... ... Furosen-in.

Einführung in Psychoanalyse

Vorlesungen zur Einführung (7) ... ... Sigm. Freud
Alte Psychologie und neue Psychologie ... ... Yosimi Fujita
Terminologie (36) ... ...

Neuigkeiten des In- und Auslandes

Inhalt der ausländischen analytischen Zeitschriften ... ...
Kleine Mitteilungen ... ...

Anhang

Geschlechtskälte der Frau (*Hitschmann u. Bergler*) ... ... R. Takamizu

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.